
転生者はシャーマン

秋月秋代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生者はシャーマン

【Nコード】

N2073M

【作者名】

秋月秋代

【あらすじ】

シャーマンキングの間違いによって死んでしまった一人の男性が転生してしまう物語。

更新はそつだなあ…地蔵並

く第零廻く プロローグ

《この世はくだらないものばかりだと思わないかい？》

「ん？」

何も無い空間。

そこにポツンと立つ俺と一人の少年。

なんの力もない俺もわかる程、此処は異質で、彼もまた異質。

《つまらない社会のしがらみ、同じ過ちを繰り返す愚かな人間達…
ほら、この世はくだらないものばかりだ》

「……………何が言いたいんだ？アンタ」

《つまりはね。こんなくだらない世界から、解放してあげた僕は、
感謝されこそ怒られる事をしてないと言っことさ》

「……………すまん訳がわからん」

《理解力無いなあ君。簡潔に言っつと君を間違っつて殺したんだよ》

「誰が？」

《僕が♪》

少しカチンと来た。

何、人を間違っつて殺した上に、自分は悪くないと開き直っつてんだよ。
とりあえず一発ぶん殴っつてやろうと思っつ。

《待った…よく考えて…ほら、僕が言った言葉を思い返してみてよ》

「だからなんだよ…」

《僕は君をあのだらない世界から解放してあげたんだよ？》

「そりゃあ、確かにくだらないだろうさ、俺も思う所はある。けどよ、世界には娯楽があるんだ！二次元の世界っていう、娯楽がな！だから気に入ってるまではいかなえが、殺されて喜ぶなんて事出来るか！」

《………そっか…未練があるのか…》

「ああ…」

《わかったよ…じゃあ黄泉返らせてあげる》

「へっ？」

少年の予想外な台詞にちよつと驚いた俺。
そんな俺を無視して力を注ぐ少年。

《黄泉返っても、もう君は普通じゃ居られない…》

「えっ…何？何か変わるのか？」

《君が持つ力は………》

あわてふためく俺を余所に、俺の身体（魂）は透けて、徐々に意識

が沈んで行く。

《.....シャーマン.....》

～ステータス～

名前：麻倉 葉生

ヨミ：アサクラ ハオ

性別：男

巫力数：250万

容姿：なんの因果かハオと似てる

Fate風ステータス

筋力：C - (B)

耐久：D + (C)

俊敏：C + (C) (A)

巫力：EX

魔力：C -

幸運：A (E) (A)

媒介：EX

() 内のランクは持霊の憑依状態によって異なります。

媒介（宝具）

エクスカリバー

ゲイ・ボルク

ゲート・オブ・バビロン（鍵剣）

備考

リリカルなのはとFateのアニメが無い世界です。
膨大な巫力数については生れつきです。

持霊1

名前：アルトリア・ペンドラゴン

性別：女

霊力数：20万

容姿：まんまFateのセイバーです

Fate風ステータス

筋力：B

耐久：C

俊敏：C

魔力：B

幸運：B

宝具：C

スキル欄

対魔力：A

A以下の魔術は全てキャンセル。

騎乗：B

魔獣、聖獣以上のランクの獣以外はなんでも乗りこなせる。

直感：A

戦闘時、常に自身にとって最適な展開を感じ取る能力。

研ぎ澄まされた第六感はもはや未来予知に近い。

霊力放出：A

本来は魔力だが今回は霊力。

武器や肉体に霊力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって能力を向上させる。

巫力もそこそこ消費する。

媒介：エクスカリバー

持霊2

名前：クー・フリーン

性別：男性

霊力数：25万

容姿：まんまFateのランサーです

Fate風ステータス

筋力：B

耐久：C

俊敏：A

魔力：C

幸運：E

宝具：B

スキル欄

対魔力：C

第二節以下の詠唱による魔術を無効にする。

戦闘続行：A

瀕死の傷でも戦闘が可能で、決定的な致命傷を受けない限り生き延びる。

仕切り直し：C

戦闘を離脱する能力。

不利になった戦闘を戦闘開始まで戻す。

矢よけの加護：B

狙撃手を視界に収めている限り、どのような投擲武装だろうと肉眼で捉え、対処できる。

媒介：ゲイ・ボルク

持霊3

名前：ギルガメッシュ

性別：男性

霊力数：30万

容姿：まんまFateのギルです

Fate風ステータス

筋力：B

耐久：C

俊敏：C

魔力：A

幸運：A

宝具：EX

スキル欄

対魔力：E

魔術に対する守り。

無効化は出来ず、多少となりとダメージ数値を削減する。

単独行動：EX

自分勝手に動き回る。

黄金律：A

人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。
一生金には困らない。

媒介：ゲート・オブ・バビロン

ゝステータスゝ (後書き)

人間レベルのランクがわからない

ゝ第一廻ゝ 転生（前書き）

最後の方なんか暗くなった。

く第一廻く 転生

「オギヤーオギヤー」

此処は……何処だ？

「産まりましたよ？ 元気な男の子です」

ん？産まれた？…どういう…

《やあ》

この声……あの時の少年！！

《とりあえず先に謝っておくよ》

なんだよ？

《黄泉返りじゃなく、転生させちゃった♪》

「オギヤー（ぶっ殺す！！）」

《アッハハハ無理だね。 まあそれはそうと君に新しく付いた力についてだけ…》

あーそんな事言ってたな…

《シャーマンってわかる？》

わからん

《なら霊能力者やイタコは？》

なんか聞き覚えはあるな

《君はそれらの力を持って産まれたんだ》

ほう…

《詳しい説明は居るかい？》

頼みます。

《わかった…霊能力者を総してシャーマンと言っただ。シャーマンは持^{もち}霊という自分専用の霊または精霊、肉体を持ち、各々の方法で霊の力を借りる事が出来るよ。》

俺、自分専用の持霊なんて居ないぞ？

《それは君が産まれたばかりだからさ…まあいいや欲しい霊とか居たら言ってくれ都合してあげるから》

至れり尽くせりだな…

《霊の意志は尊重するけどね》

当然だな

《あ、媒介がないと無理か》

媒介って？

《霊の力を具現する為の物とでも思ってくれていいよ。生前その霊が死ぬまで持っていた物が必要なんだけど…まあそこも僕が調達しよう》

随分と優遇してくれるんだな

《まあ手違いで殺してしまったしね》

そう言えばそうだったな

《それじゃあね…詳しい力とかは後で教えるよ》

あつ待った

《何だい？ こう見えても忙しいんだけど》

あんたの名前は？

《僕？》

そう。呼ぶ時とか困る。

《わかったよ…僕の名はハオ…星の王さ》

ハオか…わかったそれじゃあまたな

《うん…またね》

こうして俺の新たな人生が始まった。

あれから四年、俺は四歳になった。

そうそう、読者さんにはまだ名乗ってなかったな。

俺の名前は麻倉 葉生ってんだ。

なんの因果か、容姿も、名前も、ハオ同じだ。

これからもよろしくね。

そして現在、俺は一人ポツンと、公園の砂場に居る。

何故かというと、俺の持つシャーマンの力が、周りの子供達に感づかれ、仲間外れにされてる。

子供は異質なモノに敏感と言うが本当だった。

幽霊が見え、会話が出来る。

普通の人から見たら化け物だろうな。

まあ唯一の救いは…

《やあ》

俺を殺し転生させたハオと、俺の両親。
そして、

『ハオですか…』

『久しぶりじゃねえか』

俺の持霊のアルトリアとクー・フリーンの存在かな。
孤独な俺としては、かなり助かる。

もう一人居るが今は日本一周旅行をしてる。

そうそう、ステータスを見て、気付いた方も居るだろう。

俺の持霊はアーサー王とクー・フリーン、そしてギルガメッシュなのだ。

最初は、アーサー王が女性だった事に驚きを隠せなかった。

またハオの間違いかと思ったが、そうでもなかった。

アルトリア本人から聞いて確かめた。

いやはや、これにはびっくりしたよホント。

《そろそろいいかな?》

「ん? ああ悪い...何?」

《そろそろ君にシャーマンの力の使い方を教えようと思ってね》

「あー了解...」

『おつようやくか?』

『ギルガメッシュが居ませんが』

《居ない霊はしょうがない...彼は次の機会にでもしよう》

こうしてハオの指導の下、シャーマン修行が始まった。

1、憑依合体をしよう。

《憑依合体は簡単に言えば、霊を憑かせる事さ》

「それでやばくない？」

《大丈夫だよ》

「何を持って大丈夫かはわからんが…まあいいや」

《それじゃあ説明するよ。》

ハオが言うには以下の通りだ。

決して作者が楽しもうとしたわけじゃない。

自身の肉体に霊を憑依させることで、その霊が生前持っていた知識や技術、性格を肉体で再現する事らしい。

あと、一つの肉体に二つの魂を容れるため、自身と霊が一心同体にならねば生前の力を100%再現することはできず、意思疎通が上手いかなければ体はコントロールを失ってしまうらしい。

……………アレ？ 俺ギルガメッシュと意思疎通出来なさそう。

やだ…怖い。

《とりあえずやってみよう！》

「いやいやいや恐いよ！！ 意思疎通が出来なかったら」

《大丈夫だって…心配性だなあ》

「いやだっ」つべこべ言うんじゃないよ『…クー」

『男だろ？　なら禪締めて気合い入れな』

「……………フッ…そうだね。　少し恐いけどやってみるよ」

『おう』

お互いに笑みを浮かべる。

第三者なら感動モノだ《さっさとやりなよ》台なしになった。少しは空気を読んで欲しい。

「それじゃクー…」

『おう！…！』

「人魂モード！！」

クー・フリーンは人魂フォームとなって俺の手に収まった。こうして見るとカッコイイから可愛いになるんだよね。

ギルガメッシュはこの形態を嫌がってた。

なんでだろうか…まあいいか。

今は憑依合体だ。

「憑依！！　合体！！！！」

胸の辺りに取り込む感じで、人魂モードのクーを押し込む。

《スカッ》

『ん？ オイ通り抜けたぞ？』

なんて最初っから素人が出来る筈もなく、クーは俺の体を通り抜けた。

「ママーあそこ」「シッ指を指すんじゃないありません。目も合わせないの。」「」

.....
恥ずかしい。

《まあ最初だからね。教えただけで出来たら苦労はしない。》

『そ、そうですよ！！ 頑張つて練習しましょう！！』

『そうだぜ坊主。諦めずにやればいつかは出来る。』

皆の優しさが心に染みる。

またまた時間が飛び、アレから一年。

俺はようやく憑依合体を成功させた。

修行途中に、ギルガメッシュが帰ってきて、
『我^{オレ}を差し置いて修行

とは何事か！！』と、お怒りになられた。

勝手に歩き（？）回ってるのが悪いと思う。

まあ、その後はギルも修行に参加したけど。

そして次の修行へ...

2、憑依合体を極めよう。

現在、俺の憑依合体のシンクロ率は、以下の通り。

アルトリア	67%
クー・フリーン	85%
ギルガメッシュ	9%

ギルはかなりギリギリだ。

もうギリガメッシュと名付けようかな。

うん、それが良い。

《とりあえず100%まで逝こっ》

「なんか字が違ふ気がするけど?」

《気のせいじゃない?》

「ふうん…まあいいか」

こうして常時、憑依100%状態に出来るよう修行する事になった。

翌日、いつも通り公園に行くと、女の子が泣いていた。

まあ、見てしまったのはしょうがない。

というか、声を掛けないと、クーに何を言われるか。

『当然、行くよな? 坊主』

「わかってるよ…」

俺は泣いてる女の子に近寄った。

「ひつく…ひく…」

「何をそんなに泣いてるんだ？」

「ふえ？」

女の子は俺の方へ顔を上げる。

さて、此处で一つ思った事がある。

周りの大人や子供は、俺の事を化け物扱い。
目の前には、泣いてる女の子。

周囲から見れば、完全に俺が泣かした者と、
誤解を招く事は必定。

「とりゃあああああつ！！」

《ドスンッ》

「うおっ！！」

後ろから、強い衝撃が走る。

感蝕からして、足二本。

助走を付けたのだろう、全体重が乗ってた。

足のサイズからして、結構小さいな女の子か？

と、冷静に分析してるが、一つ言っておく。

俺はMでも、ドが付く程のMでも、ない！！

「ふえええええつ！！」

吹っ飛んだ俺を見て、驚いた声を上げる泣いてた女の子。

「フツ…悪は滅んだわ!!」

滅んでないし、悪でもないんですが…

「もう大丈夫よ!!」

「えっと…えっと」

「さあ、行くわよ!」

そうして、俺を蹴り飛ばしてくれた女の子と、泣いてた女の子は立ち去った。

まあ、泣いてた女の子は、心配そうに、こちらを見てたが…。

『大丈夫か? オイ』

「……………」

『…いくら子供でも許せませんね…さっきのは…』

「ありがとう…クー、アル…大丈夫…慣れてるし…」

（あの雑種…^{オレ}私の依り代^モに足を上げた事…いずれ後悔させてくれる…）

俺は起き上がり、修行に取り掛かった。

第二廻 誤解（前書き）

表現がおかしい所があるかも……

「
」について

「
」
↑生きてる人間

↑ハオ（シャーマンキング）又は効果音等

幽靈 ↑

「
」
「
」
↑ 憑依合体時

く第二廻く 誤解

▼なのは視点▼

私、高町なのはです。

最近、とても悲しい事があつたの。

お父さんがお仕事で大怪我をして、今入院中なの。

お母さんは、お父さんのお見舞いで忙しくて、お姉ちゃんは、お店の手伝い、お兄ちゃんは、恐い顔をして剣のお稽古。

なのはは、一人…皆の迷惑にならないように、皆の邪魔にならないように、大人しいいい子で居るの。

でも、いつまで経っても、お父さんは目を覚ましません。
それが凄く悲しくって、私は公園で一人泣いてました。

「ひつく…ひく…」

「何をそんなに泣いてるんだ？」

「ふえ？」

突然声を掛けられ、見上げると、そこには髪を腰まで延ばした男の子が居ました。

「とりやあああああつ!!」

《ドスン》

「うおっ!!」

瞬きの刹那、男の子は私の上を通過しました。

「ふえええええっ!!」

私は、あまりの衝撃的な、出来事に驚いて、声を上げました。

私は前を向いて、男の子を突き飛ばした(?)であろう人を見ます。

「フツ…悪は滅んだわ」

そこには、金色の髪をした強気な女の子。
とりあえず彼は悪じゃないの!!

「もう大丈夫よ!!」

「えつと…えつと」

と、とりあえず誤解を解かないと!!

私は誤解を解こうと、喋ろうとしますが、それを遮るかの如く…

「さあ、行くわよ!」

女の子は、私の手を掴み、公園から連れ去られました。

あの男の子、大丈夫かな?

▲なのは視点▲

▼アリサ視点▼

私の名前はアリサ・バニングス。

何処にでも居る、普通のお嬢様よ。

私は、今暇を持て余してる。

何か新しい出会いとか、起きないかしら？

そんな事を考え、公園に向かうと、そこには、泣いてる女の子と、女の子の前に立ってる男の子を見つけた。

此处で、私の頭脳がキューピーンと、悟ったわ。

あれは…いじめね！！

私も時々するからわかるわ！！

いじめる奴＝悪

悪は退治してこそよ！！

そうよ、アリサ貴女は、正義を行使するのよ！！

いざ！！ 悪を撲滅せよ！！！！

私は駆け出した。

バニングスに伝わりし、奥義を以って悪を殲滅しに…

そして、程よく加速した時、ジャンプ！！

悪に目掛けて、私の足が唸った。

- バニングス家奥義！！ アリサ・バーニング！！ -

「とりゃあああああつ！！」

《ドスンッ》

「うおっ！！」

悪は、私の奥義を喰らって、吹き飛んだ。

「ふえええええっ！！！」

女の子が私に感動してる！

此处で決めなきゃ一生の損ね！！

「フツ…悪は滅んだわ！！！」

決まった！！ もう文句なし！！

流石は私！！ 素晴らしいわ！！

鮫島にも見せてあげたかったわ。

私は、泣いてた女の子を見て、安心させるように言い放つ。

「もう大丈夫よ！！！」

「えっと…えっと」

どうやら、相当いじめられてたらしい。

オロオロしながらも、私に御礼を言おうとしてるのがわかる。

「さあ、行くわよ！」

私は、オロオロしてる女の子の手を、取り公園から離れた。

これは更なる安全を、確保する為！！

流石、私よね！！

▲アリサ視点▲

▼なのは視点▼

公園から、かなり離れた所で、足が止まる。

私は息を整え、女の子の方を見ます。

「まったく、男の癖に女の子をいじめるなんて」

どうしよう。

激しく誤解してるよこの子。

「ち、違つの！！」

とりあえずお話ししないと！！

「へ？」

「わ、私が泣いてたのは…その…最近…悲しい事があって…」

「それがいじめでしょ？」

「ち、違つの！！ お父さんが大怪我をして、それで悲しくて泣いてたの…」

「じゃあ、あいつは…」

「泣いてた私に、声を掛けてきただけなの」

私が誤解を解くと、女の子は肩を奮わせて、

「まぎわらしいわよ！！ アンタ！！！」

Σえええええええええつ！！

怒られたの、理不尽だよううう。

▲なのは視点▲

▼アリサ視点▼

此处まで、来れば安全ね。
それにしても、

「まったく、男の癖に女の子をいじめるなんて」

許せない奴だわ！！

「ち、違うの！！」

「へ？」

違う？ 何が違うのよ。

「わ、私が泣いてたのは……その……最近……悲しい事があって……」

「それがいじめでしょ？」

まさか、この子いじめられてた自覚無し？

「ち、違っの！！ お父さんが大怪我をして、それで悲しくて泣いてたの……」

……………えっ？

「じゃあ、あいつは……」

「泣いてた私に、声を掛けてきたただけなの」

……………つまり、いじめられてなかった。

だから、あいつは悪じゃない。

悪いのは、勘違いして攻撃をかました私？

そん………な………私が………悪いの？

で、でも……泣いてたし……端から見たら誰だってそう思うし………ああああ、もう……！！

「まぎわらしいわよ！！ アンタ……！！」

私は、ごちゃごちゃになった頭で、考えが纏まらず、怒りに任せて逆ギレした。

▲アリサ視点▲

▼なのは視点▼

あれから数時間、なんとか落ち着いたアリサちゃん（自己紹介はさ

つき裏方で済ましたの」と、一緒に男の子に、謝りに向かっているの。

「なのは。 やっぱり私も謝るの？」

「も、じゃないの！！ アリサちゃんだけ謝るの！！」

「なんで私だけなの？！」

「悪い事をしたのは、アリサちゃんだから謝るの！！」

「だって…謝ると負けた気がするじゃない！」

な、何を言ってるの？！

負けた気がって、悪いのはアリサちゃんなのに…こんな感じで、今公園に向かっています。

▲なのは視点▲

▼葉生視点▼

どうも、ドロップキックを貰った葉生です。

今、俺はギリガメツシュ…ゴホンツ…ギリガメツシュと憑依合体しています。

理由は簡単、シンクロ率が低すぎるから。

そして、ギリガメツシュとの修行法は、言うだけなら簡単だ。

- 1、武器を黄金の都から引っ張り出す速度を上げる。
- 2、ギリガメツシュを理解する。

3、武器を一通り振る。

ギルガメツシュは、数多ある宝具の持ち手故に、極める事が出来ない。

だが、それでも使えなければ、ただの宝の持ち腐れ。

極めてなくても、使い方はわかるらしいので、邪念を振り払うが如く、振る。

『そろそろ休憩にしましょう』

「「む？ そうだな…」」

アルの提案の下、休憩に入る。

この時でも、憑依合体は解かない。

何故なら、シンクロ率が、物凄く低いからだ。
ハオも…

《よくこのシンクロ率で動けるね？》

と、言われた。

この言葉に、危機感を覚え、先に、ギルガメツシュの修行に入っただ。

「あの…」

「「ん？」」

声がした方向を見ると、さっきの女の子達が居た。

「ほら、アリサちゃん」

「わ、わかったわよ。 その…勘違いしたみたいで…ごめん」

「ふん、気にするな雑種。 許容するのも、また王よ。 だが次は許さんぞ」

《ピシッ》

瞬間、場が凍った。

やばい！！ ギルガメッシュと憑依合体してたんだっ！ 解除、早く解除して謝らないと…。

俺は即座に、ギルガメッシュを解除した。

「ごめ《グシャッ》ブッ」

俺が、謝罪の言葉を、言い終える前に、顔が減り込んだ。

「な、何よ！！ 人が下手に出れば付け上がって！！ もう絶対謝るもんですか！！」

「ち、違っ…さっきのは」

「うるさい！！」

《ガスッ》

「へブッ」

俺の顔は、再び減り込んだ。

世界を狙える右だと、記しておこう。

金髪の少女は、怒って公園から出て行った。
残ったのは、茶髪の少女と、俺。

「大丈夫？」

「ああ……」

心配そうな顔をして、身を案じてくれた。
優しい子だ……。

「駄目だよ。謝った相手にあんな態度」

「……………そう、だね……」

▲葉生視点▲

▼なのは視点▼

「……………そう、だね……」

？ さっきと雰囲気が違う。

「ねえ？」

「ん？ 何？」

「さっきと、なんだか雰囲気が、違うみたいだけど……」

私は思った事を、そのまま男の子に聞きました。
すると、男の子は驚いたように目を見開いて、固まってしまいました。

「……………ど、どうしたの？」

「……………わかる……………の？」

「えっ？ う、うん……………だってあからさまに、変わってるの……………」

「……………そう、か……………」

そして男の子は、また俯き、そのまま黙ってしまいました。

▲なのは視点▲

▼葉生視点▼

わかる人にはわかるんだなあ。

『私達は見えてないみたいですね』

『まあ、雰囲気を感じるのと、霊を見るのとは、ちと、別だからな』

「なんで雰囲気が変わったりしたの？」

シャーマンなんて言っても、わからないか、ん？ そうだ！

「……………それは……………俺が多重人格者だから……………」

これで通るかな？

「多重人格者？」

少女は頭に？を、いくつも、浮かべ頭を捻ってる。

「人格がいつぱいある人の事」

これで通るかな？

「へー凄いね」

Σ信じた。 きっと心が純粹なんだろうな。

「あ、私、高町なのは。 なのはって呼んで」

「俺は、麻倉 葉生」

互いに、自己紹介した後、黒い車が凄い勢いで、公園を通過した。

『葉生！！』

「ん？」

「にゃ？」

『さっきの車に』

『あの嬢ちゃんが居たぞ！！ 眠っていたが、拘束もされてやがる

「!!」

「何?!」

アルとクーの報告を聞いて立ち上がる。

普通の人が言ったら、信じるか迷うが、アルとクーは英雄だ。信憑性は高い。

「ど、どうしたの?」

「さっきの車にあの女の子が居た。縛られてたし、誘拐か何かかな」

「えっ!!」

「アル!! ナビよろしく」

『わかりました』

アルは空を飛んで、さっきの車を追い掛ける。

「クー!!」

『あいよ!!』

「憑依!! 合体!!! クー・フリーン!!!!!!」

俺はクーと、憑依合体をし、アルを追って、駆け出す。クーの走り、息遣いをトレースし、ぐんぐん加速する。

無事で居てくれよ。

▲葉生視点▲

時は少し遡る。

▼アリサ視点▼

公園を出た後、私はズンズンと言った感じで、家に向かった。

何よ！ あいつ、せっかく謝ったのに…。

雑種だなんて…。

確かに私が悪いわよ！！ だからって、雑種呼ばわりするなんて、あんまりじゃない！！

横断歩道を渡った、その時、急に黒い車が、私の前に止まった。

「ちよっ…」

私が文句を言おうとした瞬間、ドアが開いて、男の人が私を引っ張り、車の中に無理矢理、入れられた。

その後、口に布を当てられ、私はそのまま意識を失った。

▲アリサ視点▲

ゝ第二廻ゝ 誤解（後書き）

修行の成果

ギルガメッシュ 9% ↓ 25%

く第三廻く 救出（前書き）

徐々に質が落ちてる…。

さてさて…いざ、参ろうか！
死地へ！！

感想待って…あー…うー…

………

よしっ！！

優しい感想待ってまーす
↑

く第三廻く 救出

▼アリサ視点▼

ん…此処、は？

私が、眼を覚ますと、そこは何処かの倉庫みたいな場所で、私の体は、鉄柱に括られ、身動き出来ない状態だった。

「ん？ やつとお目覚めか？」

「あんた達…こんな事して何が目的よ！」

「金に決まってんだろ！ ダホッ」

誘拐犯のリーダーだろう男が、私に近寄り、じろじろと私を見てきた。

「ッ…な、何よ」

「いや、何…金が入るまで、俺達の相手をしてもらおうと、思ってた」

「やるんすか？」

「俺、ガキはなあ…」

「なら、テメエは、見張りしてるよ」

「それと、これとは、違いますよ」

くっ、コイツら…最低ね。

「それ以上、近付くんじゃねえ」

「誰だ?!」

男が、一步私に、近付いた時、知っている声が聞こえた。

この声は…そう、私を雑種呼ばわりした失礼な奴!

▲アリサ視点▲

▼葉生視点▼

よく誘拐とかで有りがちな倉庫街。

なんで居るか? それは誘拐された女の子を助ける為。

俺は、見張りの後ろに降り、首に手刀を放つ。

クーと憑依合体してるためか、一撃で意識を刈り取れた。

『葉生…あの娘は、今、鉄柱に拘束されてる状態のようです。』

中を見てきたアルが、女の子の現状を教えてくれる。

「…んで? コイツラの仲間は?」

『四人です』

扉前に二人、コレはクリア。
中は四人か…、まっなんとかなるかな。

「くんじゃ、行ってくる」

『お気をつけて』

窓から入り、中の様子を見ると、男の人が女の子に向かって、歩いてるのが、わかった。

「ッ…な、何よ」

「いや、何…金が入るまで、俺達の相手をしてもらおうと、思っ
てな」

「やるんすか？」

「俺、ガキはなあ…」

「なら、テメエは、見張りしてろよ」

「それと、これとは、違いますよ」

かっつ、お決まりだね。

さて、そろそろ助けるとしよう。

「それ以上、近付くんじゃねえ」

「誰だ?!」

俺の声に、誘拐犯共が、こちらを見る。

「ハッ… テメエ達みてえな、屑に教える名なんぞねえよ」

「んだとオラッ！」

「何、馬鹿な事やってんのよ！」

「お？」「」

「お？ じゃないわよ！ いいから早く逃げなさい！」

女の子…んゝてか、女の子って、いちいち書くのメンドイな…。
しかし、名前も知らねえし…しゃあねえ無視するか。

「まあ、とりあえずお前ら…こんな事して、覚悟は出来てんだろ
うな？」「」

「無視するんじゃないわよ！」

「おい、坊主…ヒーロー気取りも大概にしな、現実を見てみろや。
こちとら大の大人が四人…さらに扉の向こうに二人だぜ？ どう
やって入って来たかは、知らねえがよお…どう見ても詰みだぜ？」

誘拐犯達は、銃を出して、俺に向けた。

「んなチャチなもんで、俺をやれると思っな」

「ほざけ！」

《ダアン、ダアン、ダアン、ダアン！》

《キンツ、キンツ、キンツ、キンツ！》

憑依合体によって得た、クーのスキルの一つ、矢避けの加護。狙撃手を、視界に収めた状態なら、当たる事がないスキル。

「なんだと…」

子供が銃弾を、簡単に弾いた事によって、驚愕する誘拐犯達。

「だから言つたろ。んなチャチなもんで、俺をやれると思うな
つてな」

「なんなんだよ…なんなんだよ！ お前は…！」

「ッ…！」

リーダーらしき人は、女の子に銃を向け、人質にした。
女の子は、銃を向けられ、その顔が恐怖へと染まる。

「貴様…」

「へっ…動くなよ…動いたらこのガキの命はねえぞ！」

これは失敗した…。

まずは安全を確保するべきだったかな…。

けど…

「疾ッ！」

俺の身体を、借りてる英雄は…

「跳ベッ！！」

考えるより先に、動いた。

そして、一瞬にして、間合いを詰め、銃を持つ腕を折り、蹴り飛ばした。

『まったく、冷や冷やさせますね。 クー・フリーン』

「結果オーライだから良いだろ」

『やれやれ…』

クーの言葉に、肩を竦めるアル。

確かに、アレは冷や汗ものだ。

何せ、人質を、取られたにも関わらず、動くのだから…。

女の子の方を見ると、口がパクパク動いて、顔面蒼白になっていた。

「大丈夫か？ って大丈夫なわけないか…ごめんな、怖い思いさせて…あと、雑種って言うてごめんなさい。」

こんな時に、謝るのも、どうかと思ったけど、このまま行くと、謝らずにズルズルと、引きずりそうだから、謝っておいた。
勿論、ちゃんと後日、改めて謝るけど。

『そついや、あいつはどうした？』

『あの公園にいますか』

▲葉生視点▲

▼なのは視点▼

葉生君が黒い車を追い掛けに行った後、なのはは交番に行つて、誘拐の事を知らせたの。
そしたら、警察官の人が…「悪戯に付き合つてる暇は無い」って言われたの。

頑張つて、必死に言つたけど、結局聞いてもらえず、追い返されて、今は、さっきの公園に居ます。

「どうして…信じてくれないの…」

目に涙を溜め、私はまた泣いた。

『おい、女』

「ひつく…ひく…うえええん」

『……おい、女！』

「ふえ……」

声が聞こえ、顔を上げると…

『ようやく気付いたか…』

誰も居ませんでした。

「うう…うわあああん」

▲なのは視点▲

▼ギル視点▼

我^{オレ}の名は、ギルガメッシュ。
最古英雄にして、世界を手中に収めし王。

今、我^{オレ}の目の前には、交番から追い返された、女^メが居る。
トボトボと公園へと戻り、泣き出した。

一度、声を掛けて反応無し。

二度目、怒鳴るように声を掛けたら、顔を上げ見てきた。

『ようやく気付いたか…』

我^{オレ}は、女を見下ろす形で、次の言葉を掛ける。

「うう…うわあああん」

が、次の瞬間、女がまた泣き出した。

《ブチッ》

『ええい、五月蠅いぞ！ 女！』

《聞こえるわけないだろ…ギル》

突如、依り代に似た声が、聞こえた。

『ハオか…聞こえるわけが無いとは、どういうことだ？』

《考えてみなよ…いや、考えるまでもない。 君は、霊なんだよ？
普通の子には、見えないし、声を聞く事さえ出来ない。》

『王の言葉だぞ？ 一言一句漏らさず、聞くのが礼であろう』

《だから、君は霊だから無理だつて…》

『くっ…ええい！ 腹立たい』

我は、怒りをぶつけるが如く、葉生が戻^{オレ}つて来るまで、辺りに霊力を撒き散らした。

▲ギル視点▲

▼三人称▼

- 夜 -

一本の電信柱に、立ってる一人の少女が居た。

「凄い、霊力…悪霊かな？」

少女の隣には、一体の霊。

「シヤマシユちゃん…悪霊は早急に？」

少女は、自身の持ち霊に問い掛ける。

『死刑。』

「うん。 そうだね。」

今、此処に…一人のシャーマンが、海鳴市に降り立った。

「世界が平和でありますように…」

▲三人称▲

く第三廻く 救出（後書き）

まだ出番は無いけど出そうと思ってる精霊。

スピリット・オブ・ファイア

スピリット・オブ・ウインド

スピリット・オブ・レイン

スピリット・オブ・サンダー

スピリット・オブ・アース

ファイア以外の甲縛式。

そして、五大精霊が合わさった甲縛式を出そうと思ってます。

ただ、問題が一つ……………

名前が決まってる……

出来れば読者様に考えて頂こうかなと思います。

他力本願な作者でごめんなさい。

ゝ第四廻(改)ゝ 許婚(前書き)

今日はヒロイン祭り

麻倉家は全員オリキャラにしました。

最後抜けてたので追加しました

く第四廻(改)く 許婚

- 翌朝 -

▼葉生視点▼

ジリリリリリリリリ...

部屋に鳴り響く、目覚まし時計。

「ん...ん...」

布団からもそもそと、手を延ばして時計を止め、起き上がる。

「ん...ふわぁ」

『おはようございます』

「おはようアル」

部屋で待機してるアルに挨拶。

最初は、部屋に女性が居る事に、緊張したけど慣れた。

「クーとギルは？」

『クー・フリーンは居間でテレビを、ギルガメッシュは散歩に出ました』

「そうか、ありがとう。しかし、昨日は参ったよ…」

『そうですね…』

昨日、アリサ（助けた後、聞きました。）と公園に戻ったら、目茶苦茶になってる公園、泣いてるなのは、ちよつとご満悦のギルが居た。

公園を調べてみると、ギルの霊力で、目茶苦茶になった事が、判明。なのはは、アリサの事を心配してる矢先に、起きた心靈現象が、怖くて泣いたらしい…。

とにかく、昨日は疲れたよ。

霊なのに、現代に影響与えるって…はあ……。

「あ、おはようございます」

「おはようございます」

居間を通ると、外人さんが居たので、挨拶をした。

『あの…葉生？』

「ん？ 何？」

『彼女はいたい…』

「彼女？」

『さっきの女性です!』

何を言ってるんだ? アルは? 家の女性は、母さんと婆ちゃんしか居ないぞ? 勿論、二人共生粋の日本人だ。

.....ん? 外人? 居間に居たなあ...クーは居なかったけど...

もう一度、居間の方を見る。

「（ニコッ）」

パアアッと、後光が射す程の笑顔を向けられた。
俺はそつと立ち去り、誣葉爺ふよじいの下へ駆けた。

「おい! 誣葉爺!」

ドタバタと俺は、誣葉爺の部屋の前に着き、一気に襖を、開けて、誣葉爺を呼んだ。

「なんじゃ、騒々しい」

「家に凄い美人さんが居る! しかも外人さんだ!!」

「おお、もう顔合わせはすんだか...その人はな、お前の許婚じゃ」

「.....はっ?」

俺の時は止まった。

許婚？ 何を言ってるんだろつかこの糞爺。

「じゃから、許婚じゃ。 将来のお嫁さんって事じゃ」

「……………き、聞いてないぞ！」

「言っておらんからのう」

「えっ…だって俺まだ小学生にもなってないし、え…、ええええええっ…!!」

「やかましいわ！ 男なら細かい事は気にするでない!! だいたいの男のくせに髪を伸ばしおって！ 切ったその日の夜に伸びるとはなんじゃ!! ワシをショック死させたいのか?!」

関係無い所突いてきやがった!! 己、自分が頭の淋しい人間だからって、ひがみだな!! 格好悪いぞ!!

「細かくねえし、髪は関係無いだろ！ それに霊能力者が髪が伸びたくらいでショック死ってありえないだろ!!」

「真夜中にうにうにょと伸びる髪を見れば誰だってショック死くらいするわ！ おっそろしくて便所にも行けん!!」

「どんだけ怖がりなんだよ!! 呪いの日本人形も髪伸びるぞ?!」

「アレは慎ましやかに伸びるから良いんじゃ！ お前は夜な夜な遠慮無しにうにうにょ伸ばすじゃろうが!!」

「俺の意志じゃねえ!!」

これは本当だ。

俺の髪は、俺の意志を無視して延びる。

一定の長さになると、止まるんだが、切ったら、夜に延びて、元に戻んだよ。

呪われてんのかな？　だが今はどうでも良い。

今は、急に浮上してきた、許婚の存在だ。

『して、誣葉殿。　許婚とは？』

アルが俺の意志を、言葉にする。

「うむ、実はな葉生が、生まれる前より、ずっと許婚の話が、出ておったのじゃ」

「なんでだよ」

「科学が進む、この現代…シャーマンの力は、酷く衰退している…この麻倉家とて、例外ではない。それを防ぐ為に、各霊能力者の家系同士の縁組が、あるのじゃ」

「じゃあ、この家、やばいのか？」

すると、爺さんは頭を、横に振り否定する。

「いや、麻倉家は、その中でも、衰退が遅いのだ。だからこそ、他からの、縁組の話が、多く寄せられるのじゃ」

そう、言つて、爺さんは部屋を出て行つた。
俺とアルも、居間へと戻ろつとした時、チャイムが鳴つた。

「ん…誰だ？」

玄関へと歩いて行き、戸を開けると、そこには、緑色の髪をなびかせ、チャイナドレスを着込んだ、一人の女の子。
胸元には、かわいらしいパンダのマーク。

「初めまして、道^{タオ}潤^{ジュン}です。麻倉 葉生君の家ですよね？」

嫌な予感しかない。

「はい、そうです。えつと…何か用ですか？」

「はい。道家から参りました。葉生君の許婚です」

……………許婚つて二人居たんだね。

『こちらが、麻倉 葉生です』

アルが俺を紹介する。

「あ、そうなんですか？」

「え、あ…はい…」

「よかった。優しそうな方で…」

「はあ…、あつとりあえず上がって下さい」

客を玄関先で、立たせて置くのも、アレなんで上がらせる事にした。

「お邪魔します」

そして、居間に着くとそこには昨日から居なかった父、爺、許婚その1が談笑してた。

「誣葉爺…また来た…」

「あ、その娘、父さんが連れて来たんだ」

「……………は？」

「なかなか…いい子じゃないか。葉馬…」

「まあ、私の友達の娘さんですから」

俺が、説明を要求しようと、口を開いた瞬間、またチャイムが鳴った。

「む、今日は千客万来じゃな。ほれ、葉生、行ってこい。」

「へーい」

爺に急かされ、玄関へ行き、戸を開けると、優しい外人のお姉さんが居た。

「ハオ・アサクラの、お宅ですか？」

今日はいい天気だ。

「……………アノ？」

「なんでしょう？」

「なんで…泣いてル？」

ちよつとアクセントがおかしいけど…まあ、通じるので良しとしとこう。

「なんでもないです。 あ、どうぞ」

「お邪魔します」

たどたどしい日本語で喋る、綺麗な外人さん。
なんか胸にキュンと来る。

病気かなあ？

外人さんを連れて、居間に戻ると、一昨日から姿を消してた、母さんが、皆と談笑してた。

「母さん！！ えっ？ いつ帰ってきたの？」

「さっきよ」

「えっ？ だつて…ええっ！」

「この娘さんが、玲奈さんが推薦する、許婚ですか？」

「はい、そうです。 お義父さん」

「なかなかの美人さんじゃて」

何、のほほんと会話してんだあああああつ！

「爺さん… いったい何人許婚居るの？」

俺の問いに、誣葉爺は、衝撃的な、事実を言う。

「あと二人じゃ」

「なっ！！」

あと……… 二人も………。

絶望（？）に打ちしがれてると、またチャイムが鳴った。
もう予感も何も無い。

きっと、次の許婚だろうと、葉生は、また玄関まで行って、戸を開ける。

「初めまして葉生さん」

「どうも…」

もう、驚かないぞー。

『へえ、君が葉生君かあ』

「こら、センジュ！」

この子はいったい誰？

『僕は千手千眼観自在菩薩…通称、千手観音菩薩のセンジュです。
さっちゃんの持霊さ』

まさかの仏さんが持霊キター……………！！

「よ、よろしく…えっと…」

『センジュでいいよ』

「わかった…」

頭が痛くなってきた……………はあ…

「とりあえずどうぞ」

「『お邪魔します』」

居間へ、案内するとまた一人、増えてた。

家の婆ちゃんだ。

ちなみに先月から、旅行に行つたと、聞かされてたんだが、きっと、この子連れて、来たんだろう。

「ただいま戻りました」

座ろつとした、矢先に玄関から、声が聞こえた。
皆、俺の方を見る。

わかったよ…行けばいいんでしょ…。

俺は玄関へと向かい、玉藻兄さんの所へ向かった。
あ、そうそう…一応家族構成を教えとくよ。

家の家族は、

祖父…アサクラ麻倉 フヨ誣葉

祖母…アサクラ麻倉 ショウコ昭子

父…アサクラ麻倉 ヨウマ葉馬

母…アサクラ麻倉 レイナ玲奈

そして、俺、アサクラ長男…ハオ麻倉 葉生だ。

で、今、目の前に居る、銀の長髪の優男にしか見えない、男性は、
家の門下生みたいな人で、安倍 玉藻。
彼の安倍 晴明の子孫なんだとさ」

「誰に言ってるの？ 葉生君」

「気にしないで、玉藻兄さん。ところで、そっちのガンマンのぬ
いぐるみを持った、女の子は、玉藻兄さんの婚約者かい？ 俺とし
ては、このまま肯定する事を、薦めるよ？」

「というか、マジもう勘弁…。」

確かに、女性に囲まれた、生活は羨ましいとは、思ったけどさ…許
婚って…彼女達の意志完全無視でしょ？ いや、彼女達の意志なら、
嬉しいのは、確かだけでも、でも多過ぎだよ…。

「彼女は君の許婚候補だよ」

「玉藻兄さん、冗談が上手ですね」

「アッハハハハ…冗談？ 僕は冗談なんかつかないさ」

「旅に出ます。 探さないで下さい。」

「うん、それ無理」

ちくしょう！！

身内が揃い、さらに許婚が五人も現れた。

今、俺はその許婚達と、見合わせてます。

なんか、ゲーム機の名前をした雑誌についてる、四コマ集になかった？ 五人の許婚を持つ設定の作品。

確か作品名は…五人いる！ だったような…。

「それでは、順に自己紹介をしてもらおうかの…」

「私はアイアンメイデン・ジャンヌ。 持霊は太陽と正義の神、シヤマシユちゃんです」

神様が持霊ですか…そうですか。

そして、お次はチャイナさん。

…………ごめん、名前聞いたけど、いろいろあって忘れた。

「私は、道 潤です。 持霊はキョンシーの孫明です」

「そん、めい？」

「300年前から道家に代々仕える武将よ」

『ほう…異国の武将ですか』

アルが武將の所に反応する。

やっぱり、騎士だからなのか、戦いたそうに、目を輝かせてる。

そして、隣に行つて、次の人。

「私は、ミイネ・モンゴメリ。持霊は大天使ガブリエルだ。」

大天使が持霊つて…まあ神様よりマシかな…うん。

はい、さくさく行こう。

「私は、西岸さち。持霊は千手観音菩薩のセンジュよ」

『よろしくね』

神様に仏様…意外に近くに居るんだね。

《一応、僕も神みたいな存在だよ？》

そういえば、そうだった。

ハオ…俺の持霊にならない？

《ならないよ。ハッ倒すぞ》

ごめんなさい。

さあ、次行ってみよう。

あ、最後だ…ふう、ようやく終わる。

「マリは、マリオン・ファウナ。この子はチャック」

そう言っ、抱えてたぬいぐるみを、見せびらかすように、見せる
マリオンさん。

「それでは、最後に貴女方の、許婚を紹介しましょう。ほれ、葉
生」

「麻倉 葉生です。えっと…持霊はブリテンの王、アーサー・ペ
ンドラゴンのアルトリア・ペンドラゴン…」

アルが皆に一礼をする。

許婚達が、びっくりしてたけど、うん…気持ちわかる。

「そして、クランの猛犬。クー・フリーン」

『よろしくな』

いつの間にか、戻って来たクーが一礼する。
ホント、いつ戻って来たんだ？

「最後に…今、此処に居ませんが、最古の英雄にして、世界の全て
を手中に収めし者…ギルガメッシュです」

「……………」

長い沈黙。

アレ？ 俺なんかしくった？

▲葉生視点▲

- 中国 -

▼三人称▼

「父様！！」

「どうした？ 蓮」

「姉さんを、麻倉家へ嫁がせたとは、本当ですか？！！」

蓮と呼ばれた少年は、頭の尖んがりが、いかにも怒ってますと言わんばかりに伸ばして、父を問い詰めた。

「蓮…我が道家はもう後がない。 わかってくれ…」

「…………とめん…」

「……………」

「認めん…絶対に！！」

「待て！ 蓮！！」

父の制止を無視し、蓮は屋敷を出たのであった。

「絶対に認めるかああああっ！！！！」

・日本・

その頃、なのは達と言うと…

「アリサちゃん。本当に、此処で待つのか？」

「だって、あいつの家知らないし」

葉生と初めて会った、公園で葉生を待ってた。

「ここ…お化けが出るんだよ？」

なのはは、目に涙を貯めて呟いた。

どうやら昨日の出来事が、相当怖かったらしい。

「お化けなんて居るわけないでしょー！！」

「ふえええん」

頑張れ！　なのは！！

▲三人称▲

く第四廻(改)く 許婚(後書き)

スピリット・オブ・ファイア達を持霊にしたら最強になりそうな予感。

どうしたらいいんだろ？

出したいけど…最強はなあ……

OS>魔法>憑依

→この方程式が意味する事は、OSはOSでしか崩せないって事です。

甲縛式使ったら勝ち目0になりそう…

あと、今日の本編について

道 潤の持霊はオリジナルです。
パイロンだと………ね

く第五廻く 案内そして紹介（前書き）

ようやく書き上げた一品。

もはや葉生の持霊が空気に！！

く第五廻く 案内そして紹介

▼葉生視点▼

「此処が図書館」

現在、許婚さん達を連れて、街案内中。
フヨシイ
誣葉爺の命令で…。

まあ、外人さんが多いし、今後、家に住む事になってるから街の案内は必須だろうね。
それをやるのも、当然、婚約者の俺ってのは、まあ、義務みたいなものかね？

「とりあえず中に入るけど、静かにしてね。 マナーだから」

「わかりました」

「「わかったわ」」

「了解しました」

「わかった」

「……………うん」

上から順に、メイデン、潤さん&ミネさん、孫明さん、さっちゃん、マリちゃんが了承する。

さて、注意はしたから大丈夫だろう。

俺達の中に入り、各自、バラバラに散って行った。

「さて、俺は何しようかな…」

館内を歩いてると、ギルと車椅子の女の子を見つけた。

ギルは車椅子の女の子を、ただジッと見ていて、車椅子の女の子は、必死に柵の本を取ろうと奮闘していた。

「んしょ、ん」

なんだか、手伝うより応援したくなる程の、頑張りっぷりだ。

『おい…』

「ん？」

『見てないで、助けてやれよ』

「……………そうだね」

クーに言われて、車椅子の女の子に近づく、ギルもこちらに気付く、俺の背後に回る。

「ん」 「代わりに取ろうか？」 「ふえ？」

腕を延ばしたまま、後ろを振り返り、目と目が合う。

《そして始まる新たな恋！》

ハ才？

《何？》

なんか変な電波受信した？

《まさか》

じゃあ、なんだよ新たな恋って

《僕なんかより、彼女を構ってやりなよ…君が一向に話し掛けないから戸惑ってるよ》

ハ才に言われて、前方の女の子に意識を向ける。
そこには、女の子がオロオロとろたえていた。

「……………で、どれを取れば良いかな？」

「えっ…でも」

遠慮された…どうしよう。

『こつこつというのは強引に行け！』

此処は、クーに従い強引に行った。

「いいから、いいから」

「う、…なら…その緑の本です」

言われた通りの本を取り、女の子に渡した。
女の子は「ありがとうございます。」と礼を言って、カウンターへと向かって行った。

『へえ…葉生ってやつさしい』

?!

突然の声に、後ろを振り向くとセンジュがいた。

「センジュか…驚かすなよ」

『さっちゃん達を放って、他の女の子にちょっかい掛けるとはね』

「ち、違うよ！ 女の子が困ってたから…！」

センジュの言葉に、大声で否定をする俺。
係員がやってきて、「館内ではお静かに…。」と注意を受けました。

『くっくくく』

怒られてる俺を見て、笑うセンジュ。

「クソウ…なんて非道な仏なんだ」

▲葉生視点▲

その頃…

▼アリサ視点▼

「遅いわね」

「アリサちゃん…別にお約束してるわけじゃないから、遅いも何もないの…」

なのはが私の言葉に反論する。

確かに、約束してないし、あいつが来なくても、別に悪くはないけど…でも…あいつが悪かったら悪いの！！

《理不尽だねえ…^^》

▲アリサ視点▲

そして場所は戻る

▼葉生視点▼

皆と合流して、ギルを紹介（なんかメイデンがギルをすんごく見てたけど知り合いか？）、そのあと、商店街を歩きながら、公園に着いた。

そして、なんかベンチでへばってる、なのはとアリサが居た。

………なにしてんの？

とりあえず、クーがなんか言う前に、彼女達に近付く。

「おい、アリサ？　なのは？」

ガバツと、突然アリサが、顔をあげて、

「おっそいじゃないのよ！　アンタ！！　今までいったい何してたのよ！！！！」

怒鳴ってきた。

理不尽じゃね？

「どうしました？　旦那様」

アリサに怒鳴られて、世の理不尽さに嫌気がさした時、さっきから様子を見ていた、潤さんの持霊、孫明さんが、声を掛けてきた。

「旦那様ですてええええええ！！」

うわっ！　耳がああああ！！

耳に大音量の音が直撃する。

今、俺のライフを表すならこうだろう。

1 / 128

一気に、127 のダメージ与えるとは恐るべし、アリサ！！

まあ、冗談はさておき……そろそろアリサを宥めよう。

あと、なのはも、何故か目に、光りが見えないし……あるのは闇。

正直、恐いです。はい。

「えっと、この人は俺の許婚の中の一人の従者（？）で孫明さん」

「どうも」

ん〜そういえば、孫明さんって死体なんだよね…。

「ど、どうも」

「あの…顔色悪い……ですよ？」

うん、やっぱりそうなるよね。

「これは………生れつきです」

孫明さん……いくらなんでもそれは、

「「へえ」」「」

信じた！！ えっ何？ 信じそうにない、アリサも信じたよ？！

《ご都合主義って奴じゃない？》

………納得いかない。

「それで？ 許婚って人を紹介してもらいましょうか？」

アリサがジト目で、こちらを見てくる。

俺なんかしたかなあ…………。

まあ、アリサの要望で、皆を紹介することになった。

五人という人数に、アリサの怒りが爆発して、宥めるのが大変だった事を、ここに記しておく。

自己紹介が終わり、今度は昨日の事をしつこく聞かれた。

Q1、昨日の豹変っぷりは何？

A、多重人格なんでコロコロ変わる。

命令1、じゃあ今、変わってみなさいよ！！

A、無理……

Q2、どうして公園が目茶苦茶になったの？

A1、さあ？　なんでだろう！

A2、きつと、幽霊さんの仕業なの……

なのはが震えてた。

怖かったんだね。　ごめんなさい。

さて、アリサの尋問を終えて……えっ？　早い？　馬鹿、違うよ省略したんだよ。

こう長々とやっても、つまらないしさ。

それにアリサも、納得してないけど、まあ、わかってくれたみたいだし……渋々ね。

そして、俺達はアリサと別れ、家に帰った。

▲葉生視点▲

▼????視点▼

今日は、優しい子に会ったなあ。

名前は、聞いてへんけど、また会えるかなあ。
会えたらええんやけど…。

《ガコツ》

「へっ？ きゃああつ」

突然、車椅子が傾いて、私は車椅子から、転げ落ちた。
車椅子を見てみると、車輪が溝に、嵌まっているのが、見えた。

「ああ…嵌まってもうたんか…」

私が車椅子の所へ、這って行こうとした時、後ろから、車のエンジン音が、聞こえた。

振り返ってみると、車がこちらに向かっでいて、運転手さんは、どうやら居眠りをしてるみたいで、こちらに気付いてない。

ああ、……私…このまま死ぬんなあ…

私が、諦めかけて、目を閉じた瞬間、声がした。

「ふん…諦めるのか？　だが残念だったな…俺は、人を見捨てる程、腐ってはいない」

「えっ？」

目を開けると、そこには私と同年の子が居た。

「行くぞ！　馬孫！！」

『はっ！』

男の子は、位牌を取出し、鞆を上へと投げた。

「憑依！　合体！！　うおおおおおおっ！！！！」

いつの間にか、男の子の手には、武器らしき、刃物を持っていた。

「中華斬舞！！」

《閃ッ！！》

男の子が、車にぶつかる瞬間、車は縦に別れて、男の子と私を、避けるように走り去り、数分後には、爆発した。

「大丈夫か？」

男の子は、私の方を向き、声を掛けてきた。

「ふえ、え？」

私は、何がなんだかわからずに、混乱していた。

「……大丈夫のようだな」

そういつて、彼は車椅子を溝から出して、私を抱えて、車椅子に乗せた。

その行動が、私の頭をさらに、こんがらせる事となった。

「それじゃあな…次は気をつけろよ」

彼が去ろうとした時、私は彼の服を掴んだ。

「ま、ままま待って！」

「……………何だ？」

「え、えええ、ええと…そだ！ お、お礼！！ お礼させて！！！」

「……………いいだろう。だが、こいつを交番に、届けてな」

「へ？」

男の子の右手を見ると、そこにはさっきの運転手が居た。

交番に届けた後、私は彼を家に招き入れた。

▲???視点▲

〈第五廻〉 案内そして紹介（後書き）

ハオ《救済処置コーナー》

クー、アル『わあああああ』

《パチパチパチパチ》

ハオ《さあ、このコーナーは、本編に出番がない主役級メンバーを、後書きで救済しようという、素晴らしいコーナーさ！》

ギル『何故、我がこのよう^{オレ}な、お情けコーナーに出んといかんのだ？！』

クー『いや、本編にあまり出てねえからだろ』

ギル『今回は出たぞ！』

アル『描写だけでしょう？』

ギル『己えええー！』

ハオ《はいはい、それじゃあ質問コーナー》

クー『質問コーナー？　なんか質問とかあったのかよ？』

ハオ《無い…けど今日は、読者の代わりに、作者が質問するよ》

アル『……………いいんですか？　それは』

ハオ《僕と作者が神！》

クー『なんだかなあ…』

ハオ《じゃあ一つ目の質問》

Q1、キョンシーの孫明さんは、
周りから見てどんな人？

アル『これは気になりますね』

クー『なのはの嬢ちゃんなんぞ、顔色悪いとか言ってたしな』

ハオ《お答えしよう。孫明は、昔のパイロンみたく、額に札をつけてないのさ。だから突っ込まれるとしたら、「顔色が悪い」とか、「体温が低いですね」ぐらいなんだ》

アル『なるほど…』

ギル『次だな…』

Q2、リリカルキャラは、ヒロイン候補？

ハオ《ハーレムにする予定らしいから、リリカルキャラもヒロイン候補だよ》

アル『ほう…』

クー『ひゅ〜』

ギル『もう無いみたいだぞ』

ハオ《そうか…では読者の皆さんも、疑問に思った事、質問がありましたら感想にお願いね》

アル『次は、読者アンケートですか』

ギル『説明するまでもない…』

クー『まずは、こいつからだ!』

Q1、OSは、オーバーソウル魔導師達にも、なんらかの要因で、見えた方がいいかな？

アル『何らかの要因?』

ハオ《リンカーコア、魔力の恩恵みたいなものかな》

ギル『ほら次だ』

Q2、裏話を作る予定ですが、別々にした方がいいか。または、一緒にした方がいいか。

クー『この一緒にした方がいいって、どんな感じだ?』

アル『例えを出すならこうです』

《一緒の場合》

第○話〳〵表〳〵

第〇話〜裏
第 話〜表
第 話〜裏

アル『別々に書くというのは』

《別々の場合》

転生者はシャーマン〜共通編
転生者はシャーマン〜表話編
転生者はシャーマン〜裏話編

アル『と、こんな感じですね。 この場合、表と裏が別れた瞬間、共通編は完結扱いになります』

クー『この説明で、わかんねえなら、もう説明のしょうがねえな』

ギル『作者の力量不足…怠慢よな』

クー『人の事言えんのか？ テメエ』

ギル『黙れ、狗』

クー『……狗と言ったな…覚悟は出来てんだろうな？』

ギル『ふっ…歯向かう事を許す。 その牙と爪を持ち、我^{オレ}を打倒してみせよ』

クー『後悔すんなよ…。 その心臓^{たましい}貰い受ける!!』

アル『はあ…やれやれ、目茶苦茶になる前に、退散しましょう。』

ハオ《ああ、そうそう…表話は、葉生と管理局が共に歩む道。裏話は、葉生が管理局の闇に絶望しラスボスへと行く道だから…ね。それじゃあ、またね》

ゝ麻倉家と許婚と許婚の持霊+αゝ
(前書き)

感想又は、質問・疑問等を待ってます。

葉生を、自分の小説に、出張させて欲しい方は、感想又は、メッセで受け付けます。

葉生に、まだ戦闘能力は、絶望的です。

～麻倉家と許婚と許婚の持霊+α～

《麻倉家》

名前：麻倉 誣葉

読み：アサクラ フヨ

容姿：頭が残念（毛が一本も無い）で、威厳ある目。和服を着た爺さん。

持霊：八咫烏

備考：麻倉家の前当主。

葉生の祖父。

葉生の許婚にメイデンを推薦した。

葉生からは誣葉爺と呼ばれてる。

名前：麻倉 昭子

読み：アサクラ ショウコ

容姿：長い数珠を首に下げ、和服を着た婆さん。

持霊：火之禍愚土大御神

備考：現役は最強のイタコで、現役を辞めた後も、いまだ力衰えていない。

葉生の祖母。

葉生の許婚に西岸 サチを推薦した。

葉生からは婆ちゃんと呼ばれてる。

葉生に持霊は見せていない。

名前：麻倉 葉馬

読み：アサクラ ヨウマ

容姿：全てを見抜くような眼力。

黒色の長髪。 身体は細身。

持霊：木鬼、炎鬼、金鬼、水鬼、土鬼

備考：麻倉家現当主。

葉生の父親。

葉生の許婚に道 潤を推薦した。

葉生からは父さんと呼ばれてる。

名前：麻倉 玲奈

読み：アサクラ レイナ

容姿：黒色長髪。 緩やかな瞳。

身体の線が細く、顔も整っており、かなりの美人さん。

持霊：無し

備考：霊能力者として霊を視るしか出来なく、麻倉家へと嫁いだ人。
葉生の許婚にミイネ・モンゴメリを推薦した。
葉生からは母さんと呼ばれてる。

名前：安倍 玉藻

読み：アベノ タマモ

容姿：銀の長髪に優男タイプ

持霊：羽衣の狐

備考：彼の安倍晴明の子孫にして、持霊は晴明から代々守護してた
晴明の母。

葉生の許婚にマリオン・ファウナを推薦した。

葉生からは玉藻兄さんと呼ばれてる。

《許婚陣》

名前：アイアンメイデン・ジャンヌ

読み：アイアンメイデン・ジャンヌ

容姿：シャーマンキングに出てる、メイデンと同じ。
服装はゴスロリ。

持霊：シャマシユ

備考：葉生の許婚。 葉生とは同年。

葉生からはメイデンと呼ばれ、葉生の事は葉生と呼んでる。
マンキンキャラのヒロイン候補。

名前：道 潤

読み：タオ ジュン

容姿：シャーマンキングに出てる、潤と同じ容姿。

持霊：キョンシーの孫 明

備考：葉生の許婚。 葉生より四歳年上。

葉生からは潤さんと呼ばれ、葉生の事は葉生君と呼んでる。
マンキンキャラのヒロイン候補。

名前：ミイネ・モンゴメリ

読み：ミイネ・モンゴメリ

容姿：シャーマンキングに出てる、ミイネと同じ容姿。

持霊：ガブリエル

備考：葉生の許婚。 葉生より四歳年上。

葉生からはミイネさんと呼ばれ、葉生の事はハオ君と呼んでる。
マンキンキャラのヒロイン候補。

名前：西岸 サチ

読み：サイガン サチ

容姿：仏ゾーン、シャーマンキングに出てる、さち（サティ）と同じ容姿。

持霊：千手観音菩薩

備考：葉生の許婚。 葉生より三歳年上。

葉生からはさっちゃんと呼ばれ、葉生の事は葉生と呼んでる。

名前：マリオン・ファウナ

読み：マリオン・ファウナ

容姿：シャーマンキングに出てる、マリオンと同じ容姿。

持霊：西部ガンマンの霊

備考：葉生の許婚。 葉生より一歳年下。

葉生からはマリーちゃんと呼ばれ、葉生の事はハオ様と呼んでる。
マンキンキャラのヒロイン候補。
。

《許婚達の持霊（マリオンは除く（不明なんで））》

名前：シャマシュ

読み：シャマシュ

容姿：シャーマンキングに出てる、シャマシュと同じ容姿。

備考：メイデンの持霊。

悪は決して許さない神様。

判決を変える事が出来るのはメイデンのみ。

名前：孫 明

読み：ソン メイ

容姿：一騎当千の関羽の容姿。

チャイナドレスを着てる。

額に札をつけていない。

備考：300年道家に仕えてる武人。

あらゆる武具や武術を扱える。

道家に絶対の忠誠を誓ってる為に、自我を抑える札は使用されてない。

葉生の事を旦那様と呼ぶ。

名前：ガブリエル

読み：ガブリエル

容姿：シャーマンキングに出てる、ガブリエルと同じ容姿。

備考：ミイネの持霊。

OS以外姿を現す事はない。

名前：千手観音菩薩

読み：センジユカンノンボサツ

容姿：仏ゾーンに出て来る、センジユと同じ容姿。

備考：サチの持霊。

センジユの容姿がわからない人は、「仏ゾーン 画像」で検索しよう。

出なかったら………頑張れ！（オイ

《+α》

名前：道 蓮

読み：タオ レン

容姿：シャーマンキングに出て来る、道 蓮と同じ容姿。

持霊：馬孫、呂布奉先、李 書文

備考：葉生のライバルとして、持霊を二人追加しました。

《蓮の持霊 その1》

名前：馬孫

読み：バソン

容姿：シャーマンキングに出て来る、馬孫と同じ容姿。

備考：レンと言えば馬孫。

馬孫の愛馬も健在。

《蓮の持霊 その2》

名前：呂布奉先

読み：リョフホウセン

容姿：真・三國無双3に出て来る、呂布と同じ容姿。

備考：付属で赤兔馬の霊も居ます。

《蓮の持霊 その3》

名前：李 書文

読み：リ ショブン

容姿：フェイトノエクストラに出て来る、アサシンと同じ容姿。

備考：関帝雲長にしようかと悩んだ時、ふと持霊は英霊のキーワードを思い出し、新作のFateに、中國の英霊居たなぁと思って、李 書文にしました。

く第六廻く 仲良し(?) (前書き)

次書き上げて投稿する予定だったけど…。
投稿したくって……。

【更新】「」について

「」↑生きてる人間

《》↑ハオ(シャーマンキング)又は効果音等

『』↑幽霊、二人

「」↑憑依合体時、又は複数人

く第六廻く 仲良し(?)

▼蓮視点▼

俺は、麻倉家を探しに、海鳴市を歩いていたら、車に轢かれそうな女性が居たので助けた。

そして、去ろうとしたら、服の裾を掴まれ、「助けてくれた詫びに、御礼をさせて」と言われた。

礼節を重んじる、素晴らしい娘だ。

さぞ、素晴らしい両親に、育てられたに違いない。

が

初めて会った人間に、御礼の為とはいえ、男を家に上がらせるのは、どうかと思う。

『坊ちゃんまが人助けを…この馬孫！ 感動で涙が止まりませぬ！！』

『流石は、蓮坊だ』

『蓮…麻倉の者の家を見つけたぞ』

感動して、涙を流してる、馬孫。

いくら、あの娘が見えない、聞こえないからと言って、俺には、見えるし、聞こえる…少し黙って欲しいくらいだ。

そして、流石は、蓮坊と言って、頭を撫でてゐる武将の靈。
ええい、鬱陶しいぞ！ 呂布奉先！！

そして、麻倉家を見つけ出した、拳法家の靈。 流石だ！ 李 書
文！！ その仕事っぷりが、素晴らしい！ 同じ、俺の持靈として、
馬孫達にも見習つて貰いたいくらいだ。
オイ、馬孫…役に立てなかったからとはいえ、李を睨むな。

む、読者には、まだ紹介してなかったな。
我が持靈は、先言つた三人の靈だ。

彼の有名な武將に、最強の拳法家だ。
まあ、馬孫は……… フンツ…戦闘になれば、頼りになるのだがな…。

「おまたせ」

思考に耽つてると、女の子がお茶を出してきた。

「ふむ…すまない」

「ええよ」

「親御さんは、仕事に行つてゐるのか？」

共働きとは、思えんが、小さな、それも車椅子の娘を、一人にする
とは呆れる。

「ううん…私が小さい頃、事故におおて…」

「ッ！ そつか…すまないな…」

「ええよ、知らなかったんやし」

くっ…少し前の自分を殴りたい…。

「そつや…名前…なんて言うん？」

「む？ そついえば言ってなかったな…俺は道 蓮だ」

「倒れん？」

「タオ！ レンだ！！」

ニヨキッ！つとトンガリを伸ばし、怒鳴る。

「伸びた！！」

女の子は、俺の怒りよりトンガリが伸びた事に、驚いた。

「はあ…」

「ああ…ごめんごめん（苦笑）」

「たく…で？」

「ん？」

「……俺は名乗ったが、お前がまだだ」

「あ、そつやね。 私は八神 はやてや。 ひらがな三つでは・や・

て。 はやてって言うて「

「ならこっちは蓮でいい」

「うん」

自己紹介を終えて、しばらく世間話をした。

始終、我が持霊から、生暖かい視線を感じた事を、ここに記しておく。

▲蓮視点▲

▼葉生視点▼

あれから数時間、許婚sはアリサ達と、仲良くなって遊んでいます。

……………おままごとで…。

配役は以下の通り。

父親役…俺。

母親役1…メイデン。

母親役2…なのは。

奥様役1…潤さん。

奥様役2…アリサ。

妻役1……ミネさん。

妻役2…さっちゃん。

愛人役…孫明さん。

子供役…マリーちゃん。

……………何コレ?!

《アッハハハ…凄い配役だね》

笑い事じゃないよ！ ハオ！！

『モテモテじゃねえか』

モテモテって…フラグ立てた覚えはないよ？

てか、孫明さんは、なんか愛人役に満足してるのか、頬が若干朱い。
……………なんで？

マリちゃんは、不機嫌なオーラを醸し出してるし、なのはとアリサは、ニッコニコ…。

……………意味がわからん！

『チツ…』

さらに、なんかアルが、怖いです。

『葉生君…』

センジュ君が、僕の肩に手を置く。
流石は、須らく人を救う仏様だ。
その心遣いに、多大な感謝を…

『目指すんだ！ ハーレム！！ 見てみたい！！』

俺の感謝を返せ！！

「さ、始めるわよ！」

「
「
「
「
「
「
「
お
お
」
「
「
「
「
「

アリサの開始の合図に、声を揃え、拳を天に掲げる女性陣。

「ちよつと待つてよ！！
おかしいと思わないの？！」

俺の抗議に、皆は「何を言ってるの？」的な目を向ける。

駄目だ！ まったくわかってらしてない！！

「何がおかしいのよ？」

アリサが代表で、聞き返してくる。

「母親役の数とか、妻役とか、奥様役とか、そんなに要らないし、
 というか妻役と、奥様役要らないでしょ?! さらに愛人なんて、
 そんなドロドロした設定は嫌だよ!! 　　というか子供の君らが、愛
 人の意味知ってるの?!」

「同じ配役があるのは、私達がやりたいからよ!!」

「愛人が、何かわからないけど、奥さんと、同じような役だったのは、わかるの!!」

俺の問いに、答える、アリサとなのは。

誰か……………助けて下さい。

▲葉生視点▲

▼クー・フリーン視点▼

『しかし、モテるねえ…俺らの使い手は…』

今、俺の目の前で、繰り広げられる光景が、凄い。

葉生の許婚達は、いまんとこ葉生に、好意的だ。

まあ、基本あいつは、良い奴だからな、嫌いになるわけないか。

そして、アリサ嬢となのは嬢も、葉生の事を、少なからず気にしてるみたいだし…。

んで…コイツはどうすっかなあ…

横目でちらりと見るは、アルトリアのアル。

感情を抑えずに、ブツブツと葉生に、呪詛を吐いてる。

……………一応、葉生を護る騎士霊なんだがなあ…俺達は…。

金ぴかは金ぴかで、ジャンヌ嬢の持霊と、遊んでやがるし…。

『ぬうお！ 貴様！ 王たる我を、鎖で拘束する事は、何事だ！！』

何？ 公園を目茶苦茶にしただろ？ 無礼者！！ 誰の許しで、

この我に、質問している？！！ なんだ貴様！！ 王に刃を向ける

か?!』

『死刑、死刑』

『やめろ! きさつ! おのれええええ…』

マジ何やってんだ? あいつらは。

……はあ…空が青い。

▲クー・フリーン視点▲

〈第六廻〉 仲良し(?) (後書き)

ハオ《救済処置コーナー》

アル『わー……………』

ハオ《アレ？ 暗い》

アル『……………今回は私だけなんですネ』

ハオ《あー……………その…次回は出れるよ》

アル『それは本当ですか？』

ハオ《うん…》

アル『そうですか……………』

ハオ《それじゃあ、最初のコーナーだよ。 質問・疑問解決コーナー》

アル『最初はこれですね。 マイペースさんから』

主人公の持ち霊は英霊ですが英霊っていうのは『座』から来るとい
うのがFateの設定じゃないですか。

で、『座』とか『英霊』って言うと

・時間軸から外れ英霊となった存在がいるところ。

- ・過去、現在、未来を問わず、英雄が英霊となればここに所属する。
- ・過去、現在、未来を問わず、ここから英霊を召還する。
- ・英霊が体験したことは記録されるが順番は不明

だったと思うんです。

ここで疑問発生。F a t eの『座』とマンキンの『G・S』は違うものなんですか？だからエミヤは無理？

そのところどーなんでしょうか？

アル『ふむ…これはどうなんですか？』

ハオ《お答えしよう。持霊Ⅱ英霊とは、F a t eに出て来るようなモノでは、ないよ。そもそも此処の英霊達は、型月のキャラとは無関係なんだ。ただ、真名や容姿が、似てるっただけ。》

アル『座とグレート・スピリッツについてですが…』

ハオ《此処まで言えば、わかると思うけど、まったくの別物。だから未来の英雄だとか、アルトリア達のサーヴァントの記録とか、無理だし、そもそもサーヴァントじゃないから、記録なんてものはない。》

アル『なるほど…』

ハオ《ただし、英霊達の技等は、F a t eの技を使う。》

アル『つまりは、あの放てば心臓を必ず貫く槍や、武器を飛ばしたりする蔵や、光の刃の剣が出ると？』

ハオ《全ては、葉生がオーバーソウルを、身につけたらね。》

アル『まあ、技名が極端に、少ないですからね。』

ハオ《そうだね》

アル『では次のコーナーってアレ？ 無いんですか？』

ハオ《うん。 コレで終わり。 疑問や質問はコレだけだしね》

アル『アンケートはどうなんです？』

ハオ《アレね… 現在、二人しか来てないから、まだなんとも》

アル『期間を決めれば…』

ハオ《なら明日》

アル『いや、早過ぎです』

ハオ《じゃあ、この投稿日から一週間で》

アル『まあ… それなら…』

ハオ《それでは、質問や疑問…》

アル『アンケート等の解答を』

秋代『お待ちしております！』

アル『急に出て来ないで下さい！』

秋代「ふっ…アルトリアが、寂しい思いをしてないかと、来てみたら、もう終わりに、近かったから、急いで出て来た…。」

アル「今回は、私も本編に出れるらしいので、構いません。早く書き上げて下さい。」

秋代「イエス・ユア・マジスティー」

ハオ《アンケートは第五話のあとがきに…》

アル「それでは、本編で会いましょう。」

《ドロンッ》↑消えた。

ハオ《待ったね》

《シュピーンッ》↑消えた。

秋代「ではこれにて」

《バンッ》↑照明が落ちる。

C
P

葉生×なのは、アリサ、許婚s、他

蓮×はやて、他

く第七廻く 修行そして…（前書き）

さて、皆さん…いよいよ葉生のシャーマンとしての活躍する時期が狭まってきました。

いまだ、原作へと進みませんが葉生は着実に一人前のシャーマンへの道を歩んでおります。

中国から来日した道 蓮…彼が葉生に何を齎すのか…それはまだわかりません。

しかし、彼らの衝突する運命は避けようのないもの…。
この衝突の行方…果たしてどうなるか…

それでは！ シャーマンファイト！！
レエエディイイ…ゴォォ！！

く第七廻く 修行そして…

・翌日・

▼三人称▼

昨日のショッキングな出来事に疲れ、死体のように寝てる葉生。

「くうくうくうくう…」

《ジリリリリリリリ…》

「んく…むにゃ…うるしゃい…」

鬱陶しそうに、音の発生源を止める。

静かになった部屋は、再び葉生を夢の旅に、旅立たせるには十分だった。

それほど、葉生は疲れていた。

《カチャ》

だが…

「目覚まし、起動と停止を確認。」

現実、いつも無情…

「起床時間、三分オーバー」

葉生の怠惰（二度寝）を、許さぬ者が現れた。

「オーバーソウル…目覚ましシヤマシユちゃん」

『罪人…麻倉 葉生』

「罪状を上げて…」

『罪状…怠惰（二度寝）』

「判決を…」

『判決……………起床。』

正義の神・シヤマシユが告げた瞬間、シヤマシユが持っていた、トンカチは葉生の頭に直撃した。

《カー……………ン！》

「いったあああああああああ…ああああああ、頭が碎けるように痛い痛い痛い痛い。」

「起床確認。」

『確認。 確認。』

▲三人称▲

▼葉生視点▼

どうも、メイデンにトンカチで叩き起こされた葉生です。

「もう少し、優しく起こしてよ。メイデン」

「起床時間に起きないのが、悪いんです。」

そりゃあ、そうだけどさあ……。

「朝ごはん、出来てますよ」

「うん、わかった」

「……………」

「……………」

見つめ合う、俺とメイデン。

「……………」

「えっと……………」

「はい？」

「着替えるのですが……」

「どうぞ」

いや、どうぞって…」

「あ、着せ替え「違うから！ 着替えくらいは、自分で出来るから！！ 俺が言いたいのは、いつまでも部屋に居たら着替えづらいって事！！」……ああ！ ごめんなさい」

笑顔で、謝罪の言葉を言ってメイデンは、部屋を出た。

ふう…いくらアルで慣れても、許婚達は別だ。

恥ずかしいものは、恥ずかしい…／／

『チッ』

あれ？ なんかアルの舌打ちが聞こえた気が…。

▲葉生視点▲

▼アルトリア視点▼

最近…というより昨日から、怒りが収まらない。
何に對しての、怒りなのかすらわからない。
こんな感覚は、初めてですね。

『私はいったいどうしたのでしょうか…』

思い返すは、葉生に会いに行ったあの時。

「えつと……………貴女は？」

『？ 不思議な事を言う。 星の王・ハ才が、貴方が私を持霊に選んだと、聞きましたか？』

「え？ でも女の子…」

『ああ、それは当然でしょう。 私は生前性別を偽ってたのですから』

「う、うそ…」

『事実です』

あの時の葉生の顔は忘れようにも、忘れられない程、驚愕に満ちた顔で少しおかしかったですね。

それから葉生との生活が始まって、クー・フリーンが来て、そしてまたしばらくして、ギルガメッシュが来たんですね。

短い月日でしたが、実に充実した日。

そして……………また突如として現れた許婚の存在。

昨日から収まらない、魂の揺らぎ。

これは、いったいなんだと言っのдарう。

わからない…。

わからないけど…。

きっとこれは……………。

葉生のせいなのだろう。

▲アルトリア視点▲

▼蓮視点▼

結局、一泊してしまったな。

「む、味噌の匂い…」

時間を見ると、午前6時過ぎ。

朝飯作るには、ちょうどいい時間という訳か。

俺は味噌の匂いにつられるように、下へと降りた。

「あ、おはよう。早起きさんやね」

リビングに着いて、俺に気付いたはやてが挨拶をする。

「当然だ。それと、おはよう」

「うん」

「何かすることはないか？」

俺がそう言つと、はやては「もうすぐ出来るから」と言い、やんわり断られた。

まずいな…このままでは一泊の恩が返せん。

まあ一先ずは……………だ。

飯時だ。

見ても楽しくないだらから、カメラは変わる。

▲蓮視点▲

▼葉生視点▼

時間は一気に跳躍して昼時。

そして潤さんの監視の下、潤さんが作った修行トレーニングで修行中です。

他の許婚達は、各自町を散策してる。

トレーニング表は以下の通り。

- ・ランニング…10km↑今ここ
- ・休憩…3分
- ・孫明と組み手…5回
- ・休憩…3分
- ・各武器の素振り…各1万回

以上。

.....死ねる。

絶対終わらないと思うんだ。

だいたい俺は5歳よ？ いじめじゃね？

『あと3kmだぜ』

『もうすぐですよ。 葉生』

クーとアルの応援が嬉しいです。

数十分後。

休憩も終え、今度は組み手。
正直休んだ気がしない。

「行きます。 旦那様」

「来い！」

最初は憑依合体をせずに組み手。

はい、死んだー。

「次です。旦那様」

「ちょ…待つへ…きゅうけ…」

「ありません」

……………くそう…。

「ギルガメツシュ…」

『俺を使う事を赦す。』

「憑依！ 合体！！」

ギルガメツシュの魂が、俺の中へと入っていく。

「先手を赦す。 疾くかかって来い」

「2回戦開始！」

潤さんの合図に、孫明さんが突貫する。

さつきより遅く感じるが、速いものは速い。

「フッ」

余裕を持ち、右に顔を逸らす俺。

《ガスッ!》

な、――――に!

逸らした所に、避けたはずの拳が飛んで来た。

「肘打ち、膝打ち、正拳、裏拳、せいやあああああああ!」

「ぐ、が、うぐつ、がはっ」

止まらない肘、膝、拳の暴風。

「破ッ!」

止めの蹴りで、俺はぶっ飛んだ。

その拍子に、ギルガメッシュとの憑依合体も解けた。

「いつ……つつ……」

「大丈夫?^{ですか} 葉生君(旦那様)」

潤さんと孫明さんが、心配そうに駆け寄って来る。

「だ、いじょうぶ……っ」

「本当にすみません……」

「だから……大丈夫だって……こっちが慢心してたんだし……」

合図と共に、突貫する俺と孫明さん。

アルのスキル【霊力放出】で、さらに加速してすかさず上から下へ竹刀を振る。

「ハッ」

「セイツ」

それに対し、孫明さんは蹴り上げて竹刀を、弾き飛ばさんと迎え撃つ。

《バキッ!》

竹刀が孫明さんの蹴りに当たった瞬間、竹刀が衝撃に耐えられず折れた。

だがこちらの武器を失った代わりに、孫明さんの足も折れていた。

.....えっ？足？

振り向くと、片足で立ってる孫明さんが居た。

もう片方の足は普通では、有り得ない方向にボツキリ折れてた。

「あの...」

「なんですか？」

片足のままでも戦おうと、構える孫明さん。

「.....大丈夫なんですか？」

「無問題です」

「「そうですか……………」」

新たに竹刀を出して、再開したがこの組み手はこちらが勝った。

こちらの有利な状況にも関わらず、苦戦を強いられた事を此处に記しておく。

▲葉生視点▲

▼クー・フリーン視点▼

よっ、皆の兄貴　クー・フリーン兄さんだ。

……………すまん。　言ってみたかっただけだ。

今何をしてるんだって？　そりゃあ孫明と葉生の組み手を見てんだよ。

あっ、ギルガメッシュの野郎が先手譲って、負けた。

馬鹿だねえ…あいつ。

最古の英雄つつたって、武器の担い手でもない、宝具のコレクターみたいなもんが、生粋のファイターしかも達人クラスに、勝てるわけないだろ。

次は……………アルトリアか…。

まあ、良い勝負くらいにはなるだろう。

そして、開始の合図が出た。

へえ、同時に出たなさっきの。

お、竹刀が折れた。

ただとあれだけのスピードなら孫明の方も…

そう思い、孫明の方を見ると足が折れてた。

こりゃあ、勝負あったか？

ふむ、やっぱり達人だなあ…方足だけでアルトリアと戦ってやがる。ただとありゃあ負けるかな……。

そう当たりをつけてると、葉生の勝ちとなった。

『次は俺か……しかし……』

俺は倒れた孫明に向かって歩いていく。

『大丈夫かよ？』

「平気です」

『そうかい』

孫明と話していると心配してた、葉生やアルトリアも、こちらの方に来た。

『ようやくの勝ち星だな』

「うん…でも孫明さんを傷つけちゃった」

まったく…優しいなあ坊主は…。

『昔はよくある事だ。 それにあの嬢ちゃんが治療すんだろ』

孫明の足に巫力を込めて、治療する導師の嬢ちゃん。

「よし、完璧ね」

「はい」

『へえ、すごいな』

「これくらいはね」

「では、始めましょう…」

『俺だな…』

さて…頑張りますか……………。

▲クー・フリーン視点▲

▼葉生視点▼

「では4回戦！」

「クー・フリーン！」

『応さ!』

「憑依! 合体!」

「開始!」

潤さんの合図で動く俺、孫明さんは動かず俺の動きを見ていた。

「せりやりやりやりやりやりやりや、おうりや!」

根で高速突きをする。

「はあああああああああああつ!」

対し、孫明さんは拳と肘を使って相殺していく。

「いや…見ていても思ったが…中々…強いじゃねえか」

「お褒めに預かり恐縮です」

「「「……………」」」

一時の間、そして誰かが足音を立てた一瞬、根と拳がぶつかり合う音を立てて、互いに背を向け合い立ち位置が替わる。

強い。

クーの思考が俺に流れこんでくる。
速度はこちらが有利だ。

しかし、相手の見切りが異常。
わざと隙を作って、攻撃を誘う戦法がある。
だが、孫明さんは異常なまでの見切りで、こちらの攻撃を防いでいた。

……八方塞がり…勝てる自信無いなあ。

結局勝負は時間の問題で引き分けとなった。

▲葉生視点▲

▼蓮視点▼

昼ごはんを食べ終え、俺は今、街を見て回ってる。

麻倉家の場所もわかってる事だし、街も見えて回りたいからな…。

『良い街ですなあ…坊ちやま』

「……………ああ」

時々、馬孫が喋りかけてくるが、まあ…軽く流す程度で返してる。

時間が流れ…夕刻。

公園に向かったらそこには、姉さんと孫明と知らない男が居た。

孫明と組み手をしているようで、中々の強者だ。

霊を宿してるという事は、霊が凄いのか…。

あの男…肉の着き方が普通だしな。

『坊ちゃま…』

「ん？」

馬孫の目線を辿ると、所々で観戦している者達が居た。

ほう…

その中で、武術をやっている男が居た。

背中越しでもわかるくらい、孫明と男に嫉妬しているのがわかる。

伸び悩んでるのか、または才能がないのか…いや、後者は有り得ないな。

『あの男…』

「どうした？」

唐突に書文が呟いた。

『いや…あの観戦してる男…復讐に燃えておる』

……………復讐…か…まあ関係ないな。

組み手が終わったのか、観戦していた者は掃けて行き、俺は姉さんの下へと行った。

姉さんは孫明と男の所へ行き、話し込んでた。

「どうだった葉生君。 孫明は…」

「かなり強かったです。 俺としてはいっぱいいいっぱいで」

ピクッ

姉さんの言葉に足を止める。

はお？…あの麻倉の？…姉さんの許婚の…あのハオ？

……………くっ…ふはははは…アサクラハオ…見つけたり！

「書文！」

『応とも！！』

「「「え？」「」」

姉さんと孫明に葉生が、こちらを向く。

「憑依！ 合体！！」

李 書文が俺の中に入っていく。

そして俺は今…最強の称号を持つ拳法家になった。

「「シャーマンファイトオオ…レディイイイ……………ゴオオオオオオオ！！」」

姉さんを奪った罪！ 此処で清算してくれる！！

▲蓮視点▲

〈第七廻〉 修行そして…（後書き）

ちよつとふざけてみた。

アンケート発表〜と言いたいくけど…

実は裏とか表とかまだ先の話しなので延長します。

A・S 最終話まで…

ハオ《今回の救済コーナーはお休み。

メイデンやさち、ミイネ、マリーファンの方…ごめんね…感想や質問、疑問は随時承るよ…次回のあとがきで答えるけど》

〱第八廻〱 激突（前書き）

後書きにてアンケート実施中。

感想、質問等を受け付けてます。

対峙するように、後ろを振り返るが既に彼は、こちらに槍を向けていた。

「呵呵呵…儂の槍を避けるか」

槍を持った男の子の後ろに、武人の霊が見える。

さっきのシャーマンという言葉から、彼もシャーマンなのだろう。そんな事を考えてると、予想外な所から声が上がった。

「蓮！！ どうして日本に！？」

潤さんだった。

「知り合いですか？」

「弟なの」

潤さんは俺の問いに答え、蓮と呼んだ弟の方を見る。

弟……確かに面影はあるな。

「姉さん…オレは麻倉葉生を殺して婚約を無かった事にさせる！」
「」

………は？ えっいや…え？

「な、何を…言ってるの？ 蓮…」

「蓮坊ちゃま…」

あ、潤さんと孫明さんが呆れてる。

「姉さんは渡さん！！」

《あつはつはつはつ…こちらの蓮もシスコンみたいだね》

ハオ？

《僕の世界にも彼女達のような姉弟が居てね。　　というか君の許婚は全員居たよ。　　ある者は敵として、ある者は味方として…ね》

へえ…。

《その在り方も皆似てる…》

声だけしか聞こえないから表情はわからないけど…ハオの声は古い記憶を思い出し、懐かしんでる風に聞こえた。

《まあ、そんな事より眼前の敵に集中した方がいい。　　彼は今の君より少し上のレベルだ》

ハオの言葉に慌てて、蓮に集中する。

「一応、名乗ろう…道^{タオ}蓮^{レン}だ。　　そして我が持霊、李書文…他にも居るが貴様に見せる事はない」

「なら、俺の名前と俺の持霊の名前を名乗ろう…俺は麻倉葉生。持霊はアルトリア・ペンドラゴン！！」

ペンドラゴンと言った後に、一瞬だけ蓮の眉が動いた。

「まさかと思うが……アーサー王の親戚か？」

本人とは思ってないのか、アーサー王の親戚と言う風に至ったらしい。

本来なら訂正するが、好都合なので黙っておく事にする。

「さあ、どうかな？ 本人かもしれぬし、親戚かもしれん……はたまた赤の他人かもな」

「なら、刃で語り合おうしよう！！ 貴様が早々にくたばらなければ……なっ……」

再度、突っ込んでくる蓮。

その突貫は、アルの霊力放出以上と言ったところ。

しかし、対処出来ない速度じゃ……

「………ない……」

聖剣で槍を逸らし、剣の腹で突進してきた蓮の顔をぶっ叩いた。

「ぬう……」

おもいつきり後ろへ吹き飛んだにも関わらず、綺麗に着地する蓮。

例え、相手が格上の敵だろうと冷静に対処すれば、負ける事はない。

「く、少し冷静さを失っていたか……しばし、気を収めよう」

霊の助言で、蓮は冷静さを取り戻したみたいだ。

厄介な事、この上ない…。

『李 書文と言いましたか…あの武人強いですよ？ 葉生』

それは見てわかる。

あの霊の霊力、アルに匹敵する。

「焦らずに、沈めよう」

『ええ…』

「覇アツ！！」

蓮から繰り出される突きの連撃。

直感で弾いてるが、突きは遅くなるどころか速く、鋭くなっていった。

「くっ…」

「ほれほれほれほれっ！！」

徐々に追い詰められ、身体に無数の傷が刻まれる。

「蓮！！」

見るに見兼ねた潤さんが、声を張り上げるも蓮からの攻撃は止まらない。

蓮の攻撃に耐えられなくなり、膝を着く。

「所詮は…男と女か…」

「「どういう意味です？」」

「「お前達の憑依率はかなり高い、おそらく86%ぐらいだろう。だが決して100%には至れない」」

蓮が何を言ってるのかわからない。

考えてる事が顔に出たのか、蓮が説明してくれた。

「「男は女を理解し得ないし、逆もまた然り…霊とシャーマンが心を通わせ完全に理解した先に憑依100%に至れる。つまり…貴様は俺に勝てんと言う事だ！！」」

蓮の身体から巫力、霊力と共に凄まじい力が溢れた。
俺は蓮から溢れ出す力に、飛ばされそうになるが足に力を入れて、踏ん張った。

「「憑依100%！！！」」

「止めなさい！！ 蓮！！」

アルからの恩恵の直感が警告する。

「逃げろ」と…

だが、どうしてか動く事が出来なかった。

「「うおおおおおおつ！！！」」

『葉生オオオオオッ!!』

「神槍!! 无二打!!」

《ドンッ!!》

衝撃が身体を突き抜け、俺は意識を失った。

▲葉生視点▲

▼潤視点▼

紅く、朱く染まる。

葉生君から赤が広がる。

「あ、… あああ… ああ… …… あ」

「潤お嬢様…」

孫明が声をかけて来てくれるけど、耳に入ってこない。
音が全て流れていく。

私のせいで… 私のせいで… 私のせいで…

「潤お嬢様!!」

「ッ!!」

孫明の怒声で遠のいていく意識を戻す。

「すぐに治療を！！　まだ間に合っはずです！！」

「え、ええ……」

葉生君の下へ向かうが、葉生君の指が動いたのが見えた。

よかった……生きてる……。

ホッとしたのもつかの間、葉生君が起き上がった。

「ッ！！」

葉生君の眼を見た瞬間、足を止めた。

葉生君の眼はまだ死んでいない。

「潤お嬢様？」

「……………介入……出来ない……」

「え？」

「蓮のあの奇襲の無駄とも言える掛け声……アレはシャーマン同士の
一対一の決闘なの。どちらかが負けを認めるか、死ぬかでしか外
部の介入を禁じられてる。　葉生君の眼が死んでない以上……介入は
出来ない」

そう、この縛りがあるからこそ……弟と葉生君の戦闘を止める事が出
来なかった。

本当に……いやな掟。

▲潤視点▲

▼葉生視点▼

「ほう、儂の二の打ち要らずの一撃を喰らってまだ立つか…驚くべきはその持霊の技量か…」

「はあ…はあ…」

『葉生……無事、ですか？』

アルが問い掛けてくるが、正直返答する体力すらない。
ただ蓮に聖剣を向けるだけ…。

「どうやら…次で決まりのようだな…（しかし、憑依100%状態の神槍を受けて立ち上がるとはな…あの一瞬だけ憑依100%に至ったという事か？）」「

心臓の音がうるさい。

蓮が何かを言ってるが、うまく聞き取れない。
きっとあと一回しか動けないだろう。

魂魄が騒ぐ、身体が重い。

死の一步手前…だけど不思議と落ち着いてる。

そして…

「「まあいい…これで終わりだからな…」」

蓮が動いた。

時間の流れがゆっくりと感じる。

なにかもが遅い。

気付けば俺は聖剣を持ち上げていた。

一秒、

二秒、

三秒、

「ハッ！！」

周り（感覚）が加速した（戻った）。

「アアアアアアアアアアアッ！！」

《ズギヤアン！！！！》

剣一閃。

俺の一撃は、蓮の槍を破壊した。
それが俺の最後の記憶。

▲葉生視点▲

く第八廻く 激突（後書き）

アンケート

表話、裏話の件について…

一緒にする… 1

例、転生者はシャーマン

表話・第○○話

裏話・第○○話

別々にする… 2

例、転生者はシャーマン《共通編》

転生者はシャーマン《表話編》… 管理局の仕事の手伝い

転生者はシャーマン《裏話編》… 管理局と敵対

オーバーソウルについて

魔導士にも見える… 4

魔導士でも見えない… 1

く第九廻く 会議（前書き）

サブタイトルが…思い付かない……。。

く第九廻く 会議

▼潤視点▼

「そうか…君の弟さんのう」

「はい…」

今、私は麻倉家の皆さんの前で葉生君の怪我の経緯を説明した。
私の後ろに控えてる葉生君の許婚達は、若干殺気立ってる。
気持ちは私にもわかる。

例え弟の暴走だろうと、それは私の責任。
見知らぬフリは出来ない。
いえ、してはいけない。

「いかなる処分も受けます。」

「ふむ…葉馬の意見を聞こうかのう」

「んゝ道家には恩がありますし、お咎めは…無しにしたいんですが、
それにほら…葉生の修行にもなったはずですし」

「…ッ…!」「」

葉馬さんの言葉に、後ろの葉生君の許婚達が息を呑む。
当然だろう。

少なくとも、ライバルが減るのにお咎め無しでは納得出来ない…。
私もその立場だったら、よくわかる。

これは恋愛じゃない、一族の命運が掛かった縁談だ。
破局は許されない。

「お咎め無しのう…それでは示しというのも…」

「あ、あの…」

誣葉様が思考を巡らしていると、私達の中で1番最年少のマリーちゃんが手を挙げる。

「ん？ なんじゃ？」

「さ、差し出がましい事です…マ、マリは…葉生様に決断を任されてはい、如何でしょう？」

「成る程のう…葉生に、か…玉藻君…葉生の容態は？」

「早くて二日、遅くて五日で目を覚ますでしょう」

「あい、わかった。許婚を勝手に決めた以上…お前さん達の粗相を犯した処遇…葉生に委ねよう。ワシらの勝手で処罰を降しても、葉生の奴は納得せんからのう。以上、解散じゃ！！」

こうして、会議は終了し…解散となった。

私は、即座にマリーちゃんの後を追った。

「マリーちゃん！ 待って」

「？ 何？」

「どうして…あんな…」

「マリは葉生様が好き。　ぽかぽかとお日様の匂いがする。　葉生様をいじめる人は嫌いだけど…潤さんも嫌いになれない。　マリに優しくしてくれるから…でも、葉生様をいじめる…でも…」

嫌いになれない。

優しいから…この言葉の繰り返し、おそらくマリーちゃん自身頭が混乱して、何を言ってるのか自分でもわからないのだろう。

「頭がぐるぐる回って…わからないから…葉生様に決めてもらう。　葉生様の決定ならマリーも従う」

「……………そっか…」

「うん…それだけ？」

「ええ…ありがとう」

「どういたしまして」

そう言い、マリーちゃんは自分の部屋に戻った。

▲潤視点▲

▼葉生視点▼

「ん…」

目を開けるとそこは、真っ白な空間だった。
見覚えはある。

確か、ハオと最初に出会った空間だ。
俺が此処に居るって事は……

「……………死んだ？」

また死んだのかねえ。

「いんや…君はまだ死んでないよ」

俺の言葉を否定するように、ハオが答える。

つか死んでないなら、此処は何処？ それ以前に、ハオが居るのに
なんで死後の世界とやらじゃないんだ？ あんたが居る場所が、死
後の世界だろ？ いろいろ疑問が尽きない。

「此処は君の深層心理…つまり、君の心の中さ。 僕が何故此処に
居るかと言うと君を蘇生…まあ、結局生まれ変わりになったけど…
まあ生き返らせる時に、僕の魂の一部を混ぜておいたんだ。 その
おかげか巫力が大きくなったり、容姿が僕に似たけどね」

成る程…。

「じゃあ、たまに頭から響いてくるハオの声って…」

「あれは本体だよ。 僕はただ見てるだけさ…」

お前か？ と言おうとする前にハオが答えてくれた。

「そうなんだ…まあ、それより…」

「ん？」

「早く目を覚ましたいんだが…」

「まだ駄目だよ…憑依100%の攻撃を受けたんだよ？　まだ身体が回復しきってない」

「そうなのか…やる事がないなあ」

「だから、君が此処で出来る修行をつけようかなって思って声をかけたのさ。　少なくとも、今の蓮と同じくらいに」

「本当か？」

「ああ…」

「んじゃ、早速やろう！」

「凄い張り切ってるなあ」

「俺と同じ年齢で既に憑依合体を極めてる蓮や、なによりメイデンに追い付きたい。　このままじゃあ、情けなさ過ぎる…！」

マリーちゃんはどんぐらい強いかわかんないけど、でも一家の代表として許婚に選ばれたんだ。

少なくとも憑依合体くらいは、極めてるだろう。

「良い心掛けだ。　強くなりたいと思う事は大切だ。　いいよ…君

を出来る限り強くしてあげる。 弱音なんて吐くなよ?」

「ああ!」

こうして、八才による修行が始まった。

▲葉生視点▲

▼桃子視点▼

今、私はあるお屋敷の前に居る。

表札には「麻倉」と書かれた名前。

メモを見て、名前と住所を確認する。

間違いなく、この家だ。

何故、私が此処に居るかと言うとそれはある朝の事。

- - 回想開始 - -

包帯でぐるぐる巻きで、動けない夫の世話中。

お医者様から話があると言われ、診断室まで案内された。

「このまま、目を覚まさなければ回復の見込みは……………ありません」

「そんな……」

そこで告げられたあまりにも酷い現実。

「な、なんとか…出来ないんですか？」

目が霞み、頬が濡れる。

あの土郎さんが？ 頭の中ではその事でいっぱいになる。
お医者様の腕を掴み、縋るように聞く。

「なんとか…なんとか…」

繰り返すように「なんとか出来ないか？」と、お医者様は顔を上げ、
真剣な面持ちで答えてくれた。

「……一人…なんとか出来そうな方がいます。ただその人は現役
を離れていらつしやる方です。失敗されるかもしれません…それ
でも……」

良いですか？ とお医者様は言った。

それでも、夫が助かるなら…。

私は藁にでも縋る気持ちで、その希望に縋った。

「構いません」

少しでも夫が目覚めますならば…。

…回想終了…

「ならば……麻倉家へと行きなさい。そこに居る…麻倉誣葉とい
うご老人なら、今の状況を打開出来るかもしれません…」

そう言つて、名前と住所の書かれたこのメモを渡された。

そして、私は……………チャームを押した。

▲桃子視点▲

《ピン、ポン》

▼誣葉視点▼

「ふむ、意識不明の夫を助けて欲しいと…」

「はい」

ワシは今、美人さんの接客をしておる。

どうやら仕事で大怪我をして、今もベッドの上で眠る夫の意識を回復して欲しいとの事。

意識の回復…ふむ、外傷ならばすぐ済むが意識回復は現役を離れて、やっておらんからのう…。

まあ、しんどいだけじゃ…此処は老骨に鞭を打ち踏ん張るとしよう。

「わかりました。お受けしましょう」

「ありがとうございます…」

さて、腕が落ちてなければ良いが…………。

▲誣葉視点▲

▼三人称▼

此処は公園、ベンチでは二人の少女がいた。

「出番ないね…アリサちゃん」

「メタな発言しないでよ…」

今日も彼女達は、暇を持て余していた。

▲三人称▲

く第九廻く 会議（後書き）

ハオ《久しぶりの救済処置コーナー》

クー『本当に久しぶりだな』

ギル『この我^{オレ}がまたこのようなお情けコーナーに呼ばれただと？』

アル『今回はあまり物語が進んでませんね』

クー『つかなのは嬢やアリサ嬢に出番もつと増やしてやれよ』

ギル『あれは悲惨よな…』

ハオ《悲惨と言えばギルの戦闘っぷり》

アル『最低です。 本当に英雄ですか？』

クー『友がいねえと何も出来ねえのか？』

ハオ《一応、フンババっていう生き物や神牛を倒したんだろ？》

ギル『ええい…うるさいぞ！ アレは我^{オレ}を使いきれていない葉生が
悪い…！』

アル『まあ、確かに友を失った後…冥界に赴いてますしね』

ギル『そういう事だ…いや、素晴らしい見解だ…騎士王。褒めて
つかわす』

アル『結構だ』

ハオ《それじゃあ、質問コーナー行くよ》

クー『司書様からの質問だ…』

シャーマンファイトじゃないのに、あの掛け合いは変ではないだろうか？

ハオ《確かに正式なシャーマンファイトじゃあないね》

アル『これは作中にも潤が言ったように全国シャーマン共通の規律。掟と思つて頂きたい』

ハオ《昔のシャーマン達はシャーマンキングを決める為の神聖な戦いを、普通の決闘にも用いたんだね》

クー『つつ事はもうシャーマンキングを決める戦いはないのか？』

ハオ《無いよ。　この世界のパッチはもう居ないらしいし…》

ギル『次だ…同じく司書からの質問だ』

超・占事略決の有無と恐山アンナについて…。

ハオ《超・占事略決はあるよ…アンナについては…どうしようかな…蓮の許婚にしようかな？》

クー『とりあえず葉生の許婚にはならねえことは確実だな』

ギル『登場するかはまだわからんがな』

ハオ『では、今日は此処まで』

アル『もう此処には来たくありません』

クー『いまんとこ皆勤賞だもんな』

アル『屈辱です』

第十廻　オーバーソウルの片鱗

▼葉生視点▼

現在、俺はハオに精神世界で修行を受けている。

正直…キツイ。

ある時は、いきなり滝の直上へ移動させられ、滝壺に落とされたり。
またある時は、深海に移動させられて水圧責め。

またある時は、火山の上に移動させられて、グツグツ煮えるマグマに突き落とされたり。

またある時は、ハリケーンを発生させて切り刻まれたり、真空の中に突っ込まれたり…。

またまたある時は、重力を上げて地面と顔のキス。
内臓が出るかと思った。

それで、これがなんの修行なんだ？ とハオに聞くと「魂が簡単に折れないように、耐久力をつける修行だ」と答えてくれた。

というか、もしあの修行で魂が折れてたらどうなったんだろ…俺は。

「えっ？ 死んでたよ」

「さらりと言われた!!」

「さて、これだけやればそう簡単に折れないだろ…」

「いよいよ…本格的に修行が始まるのか…」

「とは言った物の…憑依１００%を出したり維持させるには、魂面

「じゃなく肉体面じゃないと出来ないけど…」

つまり？

「君は基礎が、既に出来上がっているんだ。だから君がするのは、オーバーソウルの修行さ…」

「オーバー……ソウル？」

「オーバーソウル…詳しく話すと混乱するから省くよ？ あとは…感覚でわかるしかないかな」

うん。 と俺が頷くのを確認してハオを説明をした。

オーバーソウル…言ってしまうえば、憑依合体の上位版。物体に霊を憑依した際に、溢れ出て具現化された物。

本来、霊は物体に憑依出来ない。

それを無理矢理憑依させる事で、シャーマンの持つ巫力によって、具現化する技術と言われてるらしい。

この時、憑依させる物体は霊の縁のある物。

その霊が、死ぬ間際に持ってた物の方が具現化しやすい。

つまり、アルトリアルにはエクスカリバーを…。

クー・フリーンにはゲイ・ボルクとそれが1番らしい。

もっとも剣に近い何かでも、槍に近い何かでも憑依させる事が、出来るらしい。

オーバーソウルとなった霊は、霊であって霊ではない。

物体に触れるし、特殊能力もまた使える。

だが、具現化しても霊は霊。

シャーマンにしか見えないし、巫力によったものでなければ物に干渉する事が、出来ないとの事。

そして、オーバーソウルを象る形は、その人のイメージによる物らしい。

「……と、まあさわりの部分だけ軽く説明したけど…わかった？」

「いや、わからん…つかアレで軽く？　しかもさわり部分！？」

「はあ、じゃあ僕が見本として、見せてあげるから感覚で覚えて…」

「……………」

ハオが手を上に翳すと、周囲が一気に炎上した。

「へ？」

次に出てきたのは、真っ赤な巨人。

「彼の名前はスピリット・オブ・ファイア…僕と一緒に本体から魂の一部を、君に入れたんだ」

「いいよ！！　後付けすぎるから、その設定」

「後付け設定？　嫌だなあ…誰が僕だけって言ったのさ…君の勘違いを僕に押し付けなくてくれ。　さあ、修行再開だ」

ハオはニッコリと笑って地獄のような…いや、地獄の方がマシな修行が始まった。

▲葉生視点▲

▼八才視点▼

葉生に修行を始めて、一日が経過。

スピリット・オブ・ファイアの力に消されながらも、心を強く持ち続けてる。

そろそろ、巫力でも計ってみるかな…。

腕に巻いたオラクルベルを操作して、葉生の巫力を見る。

フリヨク：2500、000/2560、000

六万も上がるとはね…。

まあ、巫力なんて多いに越したことはないんだ。

さて、あと一日は修行を続けるかな。

▲八才視点▲

その頃、蓮は…。

▼蓮視点▼

- 麻倉家一室 -

負けた……俺より数段劣るあいつに…。

『坊ちやま…』

「笑いたければ笑え…馬孫」

星を眺めながら、俺はあの後の事を思い出した。

あの後と言っても、2時間は眠ってたがな…。

姉さんの暗い顔が、頭から離れない。

俺がしたことは、完全な八つ当たりだ。

そのせいで、道家を一族を危機に陥れた。

帰ったら勘当ものだな…。

だが…その前に、責任は自分で取る。

姉さんを嫁がせるのは嫌だ。

姉さんが暗い顔をして、婚約するのは見たくない。

だが葉生を見る姉さんは、少なからず奴に好意を持ってた。

だから…俺の罰は俺が責任を取る。

どんな事してもだ…。

「馬孫、呂布、李…今まで謝謝…」

『『『………』』』』

我が持霊に感謝の言葉を告げ、いざ！

『何処へ行くのだ？』

「なんだ？ 李…麻倉家の当主の所に、行くに決まってるだろ？
俺は俺の責任を取るん為に…」

『ふむ、そうか…しかしな。 あの若造が起きるまで潤に処罰を与えんらしいぞ』

「なんだと？」

『なんでも…若造が潤の処罰を決めるらしい』

李によつて、明かされた事実。

ということとは、猶予はあるという事か？ ならば尚の事、奴が起きる前に姉さんから俺に…。

戸を開けると、銀髪の女が居た。

「貴方の傷は治しましたが、まだ安静にして下さい」

確か名前は、アイアンメイデン・ジャンヌ。

………明らかにアイアンメイデンは名前じゃない気が…。

「お粥…此処に置いときますね？」

布団の傍に土鍋を乗せた盆を置く、ジャンヌ。

自分の許婚を襲った相手だと言うのに、責める気配すらない。だからだろうか…。

「お前は怒ってないのか？」

こんな馬鹿げた質問をしたのは……。

質問した瞬間、ジャンヌの持霊が具現化した。

「ッ！！ オーバー……ソウル……」

「怒ってますよ…貴方にね」

向けられる殺意。

気体が固まり息苦しくなる。

殺される。

そう思った、次の瞬間には殺意やオーバーソウルは消えて、ジャン
又は部屋から出ていた。

俺は畳みに膝を着き、乱れた呼吸を整えた。

「ッ…ハアッ…ハッ…ハッ…」

まさか、オーバーソウルを使えるとはな…。

俺もまだまだと言うわけか……。

▲蓮視点▲

▼桃子視点▼

今、私は夫が入院してる病院の手術室前に居る。

集中力のいる手術らしく、手術室に入って既に深夜。
もうじき日付も変わる。

《フッ》

私が顔を上げたと同時に、手術中のランプが消える。

手術が………終わった。

「士郎さん」

呟き祈るように、誣葉さんが出て来るのを待つ。

成功しただろうか？ もしくは………ダメ………そんなの考えたくない。
早く、早く結果が知りたい…。

そして、扉が開く。

手術室が光り輝き、前が見えない。
当然だろう。

廊下は既に電気が、消えてるのだから…。
だが、僅かに見える人影…。

はて？ 誣葉さんはあんなに背が高かったかしら？

「桃子！！」

「！！」

両手を広げる人影は、聞き覚えのある声を発した。

私が長い間、聞きたいと願った声。

目が慣れると、そこには笑顔で私を待ち受けてる士郎さんの姿があった。

「士郎…さん」

一目散に士郎さんに駆け寄り、士郎さんの胸に飛び込む。

「士郎さん、士郎さん、士郎さん、士郎さん…」

「桃子…心配かけた…」

涙が止まらない…。

士郎さんの声、士郎さんの匂い。

士郎さんが私を受け止め、抱きしめてくれる力強さ。
間違いなく私の愛しい人だ。

▲桃子視点▲

▼誣葉視点▼

うむ…。

良い絵じゃな…。

『流石は麻倉家前当主…まだまだ腕は落ちておらんようだな』

「何を言うか…現役ならば朝飯前じゃったわい」

『ふむ…確かに今は深夜だ。訂正しよう、腕が落ちすぎだ』

「可愛くないカラスじゃ…」

「あの…」

「ん？」

ワシが八咫鴉と喋っておると、桃子さんが声を掛けてきた。

「夫を助けていただきありがとうございます」

「僕からも御礼を言わせてください。ありがとうございます」

「なあに、気にせんでくれ…それではワシはこれで」

「あ、あの治療費を…」

「ワシは引退した身。本来なら手術はやってはいかん。それを無理言つて手術室を貸してくれたんじゃ…出すなら此処の病院に出なさい」

「それは別にしても…」

やれやれ…いらんと言つのに…。

「代金ならば…土郎さんや」

「な、なんでしよう」

「もう、家族を悲しませんよう…これで手をつちましよう」

「えっ…いや、あの」

「返事…!」

「は、はい! 誓つて家族を悲しません!」

「うんうん、それでよい。では…」

士郎さんの誓いを聞き、ワシは家に帰りついた。

ふう…少し張り切りすぎたわい。

▲誣葉視点▲

▼なのは視点▼

朝、起きて下に降りるとリビングが騒がしい。

いったいどうしたんだろう？　と思い、リビングの扉を開けると、お父さんがリビングにいた。

「おはよう…なのは」

「お父…さん？」

涙が落ちる。

「ああ、そうだよ」

「夢じゃ…ないんだよね？　なのは、まだ布団の中に居て寝てるんじゃない」

「現実だぞ？　なんなら頬を抓ってみるといい」

そう言われ、頬をおもいつきり抓る。

眠気も吹き飛ぶように…。

「いつ!!」

結果は痛かった…。

おもいつきり抓ったから凄く…。

「大丈夫？　なのは」

「う、うん…」

「痛かったか？」

「うん！　お父さーん!!」

なのはは嬉しさの余り、お父さんに抱き着いた。

お父さんは笑いながらも、なのはを抱きしめてくれたの。

これでやっと元に戻るんだね。
やっ…。

「ほら、なのは…気持ちはわかるけど、父さんは退院してきたばかりなんだぞ」

「あ、ごめんなさい」

「構わないよ」

お兄ちゃんに言われて、お父さんから離れると、お父さんはなのはの頭をくしゃくしゃと、撫でながら許してくれたの。

「あ、あのね。　なのは友達が出来たの!!」

「ほう…どんな子なんだい？」

「アリサちゃんに葉生くん、ジャンヌちゃん、潤さん、マリちゃん、ミネさん、さっちゃん」

《ダンッ》

《ビクッ!!》

音がした方を向くと、お兄ちゃんがテーブルを叩いて怖い顔をしたの。

「はお…くん？　なのは…その葉生くん！　とやらは男かい？」

「う、うん…そうだよ…麻倉葉生くん」

「「!!」」

ど、どうしたんだろ…お母さんもお父さんも、急にびっくりしたような顔をして…。

「なのは…その麻倉葉生くんって…どんな子？」

「不思議な雰囲気を持ってて、髪が長くて優しい男の子だよ」

「……………そう」

なのはの言葉に、お母さんは考えるように顎に手を当てた。

それよりも、お兄ちゃんが怖いの…。

「桃子…麻倉って苗字あんまり見掛けないよな？」

「ええ…」

「……………なのは、近い内お友達を連れて来なさい」

「えっ…」

「会ってみたくてね…」

「うん…でも、私アリサちゃんの家しかわからないよ？」

「葉生くんや他の皆は？」

「ジャンヌちゃん達は、葉生くんの家に住んでるの…それで葉生くんは、いつも公園で遊んでたから…」

「そうか…なら今度会った時でもいいぞ」

「うん…」

でも、会えるかなあ？ 最近会わなくなっただし……………。

▲なのは視点▲

- - おまけ - -

▼三人称▼

「うがあああああつ！　もつと私に出番寄越しなさいよおおお
お！！」

「お嬢様落ち着いて下さい」

「離しなさい！　鮫島あああ！！」

「だ、誰かあああ…お嬢様を止めてくれえええ！！」

豪邸に一人の少女と、その執事の声が響きわたったとか…。

- - おまけ2 - -

『私の出番…私の活躍はまだですか！！』

『待てや、そろそろ俺も活躍してえんだよ！！』

『狗にやる出番はない！！　早く我に活躍オレさせるがよい！！』

麻倉家では葉生の霊達が、暴れたとか暴れてないとか……。

▲三人称▲

く第十廻く オーバーソウルの片鱗（後書き）

葉生の巫力が大幅に上がった理由は、黄泉の穴を潜った時のような感じですよ。

つまり、生きてるのに死を経験したと同じ事……かな？

私の黄泉の穴の見解はこうなのですが、おそらく違うと思うのでスルーしてください。」

はやてどうしょ……まあ、だいたいどうするかは決めてあるんですがね……

〈第十一廻〉 目覚め

▼三人称▼

炎上し続ける葉生の精神世界。

そこに、立っている真っ赤な巨人と白い巨人。

「ゼオ。イマー！ 力場を展開しろ！」

《ブンツ》

「次元連結システム…最大出力」

ゼオ。イマーと呼ばれた白い巨人は、真っ赤な巨人へ特攻をかける。

「こりもせずに…スピリット・オブ・ファイア！」

そして、スピリット・オブ・ファイアと呼ばれた真っ赤な巨人は、白い巨人の退路を防ぐように炎の壁を出す。

白い巨人は炎の壁に衝突して、衝撃波が発生する。

「それで精一杯か」

「何！？」

「ゼオ。イマー！！」

葉生は白い巨人に巫力を注ぎ、白い巨人は出力がさらに上がる。

「消えうせる…」

《カッ》

白い巨人はさらに神々しい姿となり、炎の壁に腕を貫いた。

「まさか!!」

「天の力の前にな!!」

炎の壁に、もう片方の腕が貫く。

そして、白い巨人の両腕にエネルギーが集まり、爆発する。

《ズガアアアアアン!!》

「茶番は終わりだ」

白い巨人は両腕を上げると、【烈】の文字が浮かび上がる。

「塵一つ残さず消滅させてやる。冥王の力の前に……消え去るがいい!!」

葉生の言葉と共に、腕を胸の前で打ち合わせた瞬間、巨大な爆発が真っ赤な巨人とハオを包みこんだ。

「フフフッ…クハハハハ…アッハッハッハッハッ…見たか…これが冥王の力だ!!」

《轟ウ!!》

「へ？」

葉生が勝利の叫びを終えると、周囲が炎によって包まれた。

「馬鹿だなあ…僕のスピリット・オブ・ファイアが…そんな玩具に負けるわけないだろう？」

ハオと共に炎の中から、スピリット・オブ・ファイアが姿を表す。

「だ、だよね……」

「燃えちゃえ♪」

ハオの命令により、スピリット・オブ・ファイアは炎を破壊光線のように放ち、ゼオ。イマーと葉生を消し飛ばした。

▲三人称▲

▼ハオ視点▼

あほらしい戦いが終わった後、僕は葉生に修行の終了のお知らせをした。

まあ、正直まだただけど…巫力だけで変なロボット作ってたし、まあ…良しとしよう…。

「葉生…起きて」

「ん…ん…はれ？」

「よく眠れたかい？」

「ハッ！ 俺はいつたい！？」

「一先ずは修行は終わったよ」

「そ、そうなのか？」

「まだただけどね…」。

「ああ、そろそろ起きる時間だよ」

「ああ、ありがとうな…ハオ」

「どういたしまして…」

葉生は表層へと上り、深層心理から出て行った。

▲ハオ視点▲

▼葉生視点▼

「ん…」

眼を覚ますと、そこは見慣れた天井だった。
身体を起こすと、潤さんが布団の傍で正座したまま器用に寝ていた。

「ん…すう…」

「……………」

「すう…すう…」

寝顔が可愛いと思った、俺は悪くない。

だから…そんなに殺気をこめて、睨まないでアルトリアさん…。

『葉生…おはようございます………』

「お、おはよう…」

『目覚めて早々話があります』

「なんででしょう」

アルが怖い、それはもうハオを怒らせた時と同等に…。

『女性の寝顔を盗み見るとは、何事ですかー!!』

一拍置いて、アルに大音量で怒鳴られた。

「ん…」

アルの大声で、眼を覚ます潤さん。

「あ、起きた？ ごめんね…アルが大声上げて」

『葉生…誰のせいだと思ってるんですか？』

俺の言葉にアルは不満があるらしく、ジト目で睨みながら聞いてくる。

「……………」

潤さんは俯き、何かを待つかのようにじっとしてる。
はて？ どうしたんだろう？

『葉生…実は』

アルの説明によれば、蓮つまり潤さんの弟さんがやった事の責任を取るらしく、その処罰は俺が決めるらしい。

ふむ…

「潤さん…」

「ッ…」

一瞬、潤さんは震えて俺の言葉を待つ。

「俺は怒ってないよ…。だから貴女の弟さんがやった事……許します」

「え？」

俺の言葉が信じられないのか、顔を上げて俺を見る。
その目には涙が溜まっていた。

うーん、守りたいって思うよね。
この顔を見てると……。

「葉生おおおおお!!」

《バンッ》

「うおっ!!」

突然、俺の名前を叫びながら襖を開けて、蓮が入ってきた。

「れ、蓮!？」

潤さん復活。

『葉生!!』

アルが何時でも行けるとばかりに、俺の前に移動する。

「貴様を襲ったのは俺だ! 責を問われるのは、俺であって姉さん
ではない!! だから!! 処罰は俺に降せ!!」

「いやいや、降すも何も」

「まさか! 既に……なんて事だ! 姉さんが穢された!」

穢されたって……。

「穢してねえよ! 許しただけだ!!」

「なんだと！？ それは本当なのか？ 本当なんだな！？」

間近で大声を張り上げる蓮。

つか、うるさいな！！ 近所迷惑だろ！！

「本当だよ」

「なら姉さんの縁談は！？」

「お前、反対してたじゃん…」

「姉さんが幸せになれるなら反対はしない。 不本意ながらな！！」

なるほど、蓮が襲ったのは本人の意志を尊重しない縁組のせいか…。
うん、気持ちはわかるよ。
本人の意志は大事だよな。

「そもそも、俺は両者の意志を無視した、縁組は嫌だからなあ」

「貴様アア！！ 姉さんじゃ不満だと言うのかああああ！！」

Σええええええええええ！！！！

「ちょ、待つ… お前、両者の意志を無視した縁組が嫌だから、俺を襲ったんだろ？」

「貴様の意志は聞いてない！！」

こいつ、潤さん至上主義だ！！

「お前は潤さんさえ良ければ、いいのかよ!!」

「当たり前だ!!」

断言しやがったあああああ!!

「孫明…」

「了解…」

「ぬ、孫明…なんだ離すんだ…おい、コラッ」

潤さんが孫明さんに眼で指示を出し、孫明さんはそれに従って、蓮を部屋の外へ連れてった。

「弟がごめんなさいね…葉生君」

「いや、大丈夫です」

「ありがとう」

ニッコリお姉さんスマイルを見せる潤さん。
素晴らしいスマイルに、ドキッとした。

▲葉生視点▲

▼潤視点▼

眼を覚ました葉生君を見た時、嬉しさ半分、不安半分な心境だった。いや、不安の方が大きかった。

彼の持霊である、アルトリアさんが彼に説明してる最中も、不安は大きくなり説明が終わった頃には不安しかなかった。

でも、葉生君は私の不安を拭い去るように…「許す」と言ってくれた。

最初は何を言われたかわからずに、葉生君の方を見上げた。

葉生君の顔を見つめ合う事、数分。

蓮がやってきた。

姉としては、また葉生君を襲わないか冷や冷やモノだった。

最初の方はまとも(?)だったけど、やっぱり途中で暴走しだした。孫明に蓮を任せて退場させた。

はあ、我が弟ながら恥ずかしいわね…。

▲潤視点▲

▼葉生視点▼

- - 居間 - -

全員集まって家族会議。

「ならば、処罰は無し……と」

「ああ…蓮には、憑依100%を引き出してくれたしな」

もつとも、もう終わるけどな…。

「わかった…では潤さんの処罰は無し！ 以上解さ「待て」…なんじゃ？」

誣葉爺が解散と言おうとしたら、蓮が待ったをかけた。
なんだろ？ おそらく戦えって事はないだろうけど。

「俺もこの屋敷に居候させてほしい」

「ふむ、理由を聞いても良いか？」

「ああ、俺は強くなりたい。 今よりも、此処に居る強者達と一緒に強くなれる。 いつでも、戦える…だから！」

確かに、強い人との戦闘は学ぶ事が多い。
精神世界でのあの戦いも…

《ブルッ》

おお、考えただけでも恐ろしい…。
よく、死ななかった俺！！

「葉生の刺激になるから、良いんじゃないでしょうか？」

「それもそうじゃのう。 良いぞ」

「謝謝…あと、図々しい願いを一つ…」

「言ってみなさい」

「……………孤独に耐えてる一人の少女も、こちらに居候をさせてやれないでしょうか？」

「孤独に？」

「足が不自由で、車椅子生活。両親が亡くなっていて…」

「お父さん…その子も居候させてあげましょう!！」

アレ？ 俺が恐怖に震えてる間に、話が進んでる？ なんか父さんが号泣してるんだけど…。

「う、うむ…そうじゃの…良いぞ」

「謝謝…」

「もう、良いかの。なら今度こそ解散じゃ」

会議が終わって、早速庭で、修行にかかる。
やるのはもちろん……オーバーソウル。

- - 庭 - -

まずは、深呼吸…。

心を落ち着かせ、イメージする。

アルトリア…霊の時でもたまに見せる、あの剣が印象的だ。
アルトリアをオーバーソウルにするなら、一振りの黄金の剣……
かな…。

クー・フリーン…彼はやっぱりあの槍かな…。

オーバーソウルにすると槍に………。

ギルガメッシュ…傲慢、我様^{オレ}、金ぴか、王様、コレクター……どう
しよう…あまり印象がわからない。

ん…動物ならどうだろう…。

アルトリアは竜。

クー・フリーンは豹。

ギルガメッシュは………獅子？

とりあえずは、アルトリアからにしよう。

「アル！」

『はい！』

「人魂モード！」

アルの魂は人魂へとなり、俺の手に納まった。

「憑依！ 合体！！」

それを身体へではなく、アルに縁のあるエクスカリバーに入れる。

「in エクスカリバー!!」

イメージするのは、星の光を放つ剣。

「オーバーソウル!!!」

そして、現れたのはイメージ通りの剣だった。

成功…。

なんの失敗もなく、おそらくハオの修行の賜物だろう。

『へー普通の憑依合体とは、違うんだな』

様子を見てたクーが、話しかけてくる。
まあ、確かに今までのとは違うからね。

『そのオーバーソウルとやら…』

さらにギルガメッシュまでも、会話に入ってきた。
ギルからとは、また珍しい。
どうしたんだろうか？

『葉生に憑依合体をしてない分、動きは葉生自身によるものではないのか?』

「……………」

『ああ、言われてみりゃあそうだな…』

確かに、普通の憑依合体なら動きをトレースする事で動けた。
でも、オーバーソウルは物に憑依合体させるから、動きは自分の動きになる。

だから憑依合体を100%まで、引き出す必要性があるのか…。
一度オーバーソウルを、解いてみる事にした。

『ふう…』

「お疲れ様…どうだった？」

『何やら不思議な感覚でしたね。まさか私が剣になるとは思わなかったです』

「そうか…」

ふむ、巫力の方も大分なれたし成功してよかったかな…。

「葉生様凄い…」

「へ？」

突然、名前を呼ばれ声がした方を見ると、マリーちゃんが居た。

▲葉生視点▲

▼マリオン視点▼

初めての視点………。

どうも、マリはマリオン・ファウナです。
葉生様の許婚です。

今、会議が終わって葉生様を眺めてます。
どうやら葉生様は、オーバーソウルの練習をしてるみたい。

葉生様の修行の邪魔にならないように、ちょっと距離を置いています。
しばらくして、アルトリアさんを剣に憑依させて、葉生様のオーバーソウルが具現化した。
葉生様のオーバーソウルは綺麗で、それでいて籠められた巫力の密度も高く、ほぼ完成していた。

葉生様は自分のオーバーソウルに満足したのか、オーバーソウルを解いてしまった。
もつと見ていたかったな……。
でも……

「葉生様凄い……」

「へ？」

うつかり、声を出して葉生様に見つかった。

「マリーちゃんか……いつからそこに？」

「え、えとえと……」

『最初っから居たぞ』

「えっ嘘……」

『嘘言ってなんになるよ……』

ああ……葉生様と喋る機会が……。

「……さっきの見た？」

「は、はい……」

「マリーちゃんは出来る？ オーバーソウル」

「い、一応出来ます」

葉生様と会話………」

▲マリオン視点▲

▼葉生視点▼

やっぱりマリーちゃんも、出来るんだなあ…。

にしても、マリーちゃんって人見知りするんだよなあ…。

なのは達に会った時、潤さんの影に隠れてたし…。

そうすると、俺には懐いてくれてかなり嬉しいな。

「なら、マリーちゃんから見て俺のオーバーソウルは、どうだった？」

「凄く綺麗で、完成度も高くてよかったと思う……」

ふむふむ、完成度が高いか…。
最初にしては高評価だな…。

「サンキュー」

「……………」

妹みたいで可愛いなあ…。

生前には、実妹が居たけど血が繋がってる分、遠慮がなかったからなあ…。

このあとも、修行をしようとしたけどマリーちゃんに「病み上がりだからダメ」と涙の説得により、安静にする事にした。

追記、マリーちゃんの頭を撫でたら案外気持ち良かった。
女の子の髪ってきめ細かく、柔らかいんだね。

▲葉生視点▲

く第十二廻く 引越し? (前書き)

【更新】「」について

「
」 ↑ 生きてる人間

《
》 ↑ ハオ (シャーマンキング) 又は効果音等

『
』 ↑ 幽霊、二人

「
」 ↑ 憑依合体時、又は複数人

(
) ↑ 念話

後書きでギルのオーバーソウル案があります。
賛成か否かをお聞かせ下さい。

第十二廻　引越し？

▼蓮視点▼

やばい…何がやばいかと言うと……。

「なんか言い残しあるか？　蓮君？」

はやてがやばい……。

麻倉家から八神家へ戻ると、修羅のときはやてが出迎えてくれた。

「帰りが遅うで心配で夜も眠れんかった次の日に、電話で「姉さん見つけて、あの後姉さんが居る家で泊まった」やて？　なんで報告が一泊した後なんや？　アアン？」

「いや、すまなかった…」

土下座という座り方で、既に二時間…。
足が痺れてきた……。

「揚句の果ては荷造りって、どういふことやねん？」

「それは…お前が淋しくないようだな…」

「それで、人様の家で厄介になれて？」

「ちゃんと許可は貰った……し」

「私の許可は？」

「……………」

これが、車椅子少女の気迫…。

孫明をも、上回ると言うのか！！

『坊ちゃま！ ファイトです！』

煩いぞ…馬孫！！

「ん？ どないしたん？」

「忘れてました！！」

「ドアホー！！！！」

《スパーン！！》

ハリ、セン……………だと？

『坊ちゃまー！！！！』

▲蓮視点▲

▼はやて視点▼

初！ 私視点や！！ こほん、初めて八神 はやてです。

まあ、挨拶もそこそこに…荷造りせなな…。

「ほら、蓮くん…寝とらんと、荷造りするから手伝ってえな」

「寝てなどいない！！　というか良いのか？」

「んゝまあ、独りはもう嫌やしな…。この家も未練が無いわけやないけど、親切な人の好意を無下にするんもな」

「ああ、すまなかつた」

ふう…まったく、蓮くんのお姉さんの苦勞がわかるなあ…。
人の意志を聞かず、突っ走ってばかり…まあ、そこが可愛いんかなあ…。

「さあ、荷造りや！」

「ああ、近いから服だけで良いぞ」

「はよ、言えボケー！！」

《スパーン！！》

「またハリセン！？」

私の華麗なるハリセンツッコミで、吹き飛ぶ蓮くん。
うん？　どっから出したかつて？　車椅子は機能満載なんよ。

▲はやて視点▲

▼葉生視点▼

ふう…家でジツとしてるのもなあ…。

「なんか良い暇潰しないかなあ…」

「なら私と散歩に行きませんか？」

声のする方へ振り向くと、メイデンが笑顔で傍に居た。いつたい、いつの間に近付いたのだろうか…。まったく気付かなかった。

「まあ、暇だからいいよ」

「では行きましょう」

という訳で、メイデンと散歩。

さて、散歩と言えばなんだろう。

- 1、公園。
- 2、商店街。
- 3、図書館。
- 4、山。

「無難なのは公園かな…」

「なら、公園に行きましょう」

そんなわけで、公園。

「あ、葉生くん」

公園に着くと、なのはが居た。

「なんか……久しぶり」

「ひ、久しぶりなの……」

「久しぶりなのはちゃん」

そんなに時間は経っていない気がするが、なんか久しぶりと言わなくちゃいけない気がした。

「ねえ、葉生くん」

「ん？」

「なのはの家に来ない？」

挨拶した後、突然なのはから誘われた。

「……………？ 話が飛んでない？ えっ、なんで急に？」

「お父さんとお母さんが、会いたいんだって」

成る程、なのはのご両親が……………。
なんで!？

「私も行つて良いですか？」

「うん！」

メイドンは、どうやら行きたいらしい。

まあ、こちらも暇だから散歩に行つたし…あんまりする事ないからいいか。

「メイドンが行くなら行く」

「じゃあ決まりなの！ こっちなもの」

なのはの案内で着いたのは、喫茶店だった。

店の名前は翠屋。

なかなか、良い感じの喫茶店だ。

「此処？」

「そつだよ！ お母さん、お父さん連れて来たよ」

なのはの後に着いていき、店に入る。

カウンターになのはの髪を伸ばし、そのまま成長したような若い女性が居た。

そして奥から、鍛えに鍛えた体つきの男性が頭れた。

ふむ、歩き方といい…。

あの体つきといい…。

孫明さんのような、武の達人かな…。

お兄さんとお姉さんかな？

「いらつしゃい」

「よく、来てくれたね」

お姉さん（仮）の優しい微笑みと、お兄さん（仮）の爽やかな微笑みを向けられる。

「はじめまして、ジャンヌです」

「麻倉葉生です」

「ゆつくりしていつてね」

お姉さん（仮）の言葉に「はい」と返事をして、席に着く。
そういえば、なのはの両親が会いたいつて言ってたけど……会わないあ…。

「なあ、なのは」

「なあに？」

「なのはの両親が俺に会いたがつてるんだよな？」

「そうだよ」

「見掛けないけど？」

「えっ？」

いや、えっ？ て、言われても……。

あ、なんか納得したような表情。

どうやら当初の目的を思い出して「さっきのがお母さんとお父さんだよ」くれ、た……は？

「えっ…何？ なんて？」

「だから、さっきのがお母さんにお父さんの」

……まさか既に会っていたとは…。

「一応聞くけど…お姉さん、お兄さんじゃ…ないの？」

「違うよ」

「若いですね…」

「みんなそう言うの。 姉妹みたいとか兄妹みたいとか」

若い、いやむしろ若すぎる。

『よもや、アヴァロンを！』

それはないと思うよ…。

「はい、ケーキセット」

「「いいんですか？」」

「ええ」

桃子さんからケーキセットを貰い、なのはとメイデンと仲良く食べた。

この後、なのはのお姉さんやお兄さんが出てきて紹介された。その時、お兄さんから勝負を挑まれたけど…。

「ずいぶん楽しめたぜ…」

クーと憑依合体して倒した。

卑怯と言ukai？ でもシャーマンの戦いとはこういうものさ。でもまあ、神速つてのを使われた時は焦ったけど…。

▲葉生視点▲

- 時は流れ、三年 -

▼三人称▼

(だれか…助けて下さい…)

それは突然、複数人の頭に響いた助けを求める声だった。

ある者は寝たまま…。

ある者は本を読んでる時に…。

ある者は精神を統一してる時に…。

ある者は星を眺めてる時に…。

ある者は魂の片隅で……。

（助けて…）

声は夜の街に響いた。

▲三人称▲

↓第十二廻↓ 引越し？（後書き）

ギルのオーバーソウル案1

ゲート・オブ・バビロンで蔵を開き、巫力で宝具を射出させる。

オーバーソウルの形としては無し。

むしろ…蔵が形？

ギルのオーバーソウル案2

巫力で宝具を作り、それを射出。

オーバーソウルの形は無し。

ギルのオーバーソウル案3

アニメ シャーマンキング版オーバーソウル。

つまりはサーヴァントみたいな感じの自律型オーバーソウル。

ゝステータスゝ▲（前書き）

葉生と蓮のステータスを更新です。

葉生の許婚も成長してますが記載しておりません。

↓ステータス↑▲

名前：麻倉 葉生

巫力数：256万↓306万1千

F a t e 風ステータス

筋力：C - ↓ C + (B) 耐久：D + ↓ C (C) 俊敏：C + ↓ B
- (C) (A) 巫力：E X 魔力：C - 幸運：A (E) (A) 媒
介：E X

(○) 内のランクは持霊の憑依状態によって異なります。

媒介(宝具)

エクスカリバー

ゲイ・ボルク

ゲート・オブ・バビロン(鍵剣)

備考

孫明と蓮の組み手で、肉体的に鍛えられステータスが上昇した。
ハオとの地獄巡りで、精神的に鍛えられ巫力が上昇した。

名前：道 蓮

巫力数：2万3千↓102万4千

F a t e 風ステータス

筋力：C + ↓ B (A + ↓ B) 耐久：C ↓ C + (A + ↓ C) 俊敏：
C ↓ C + (A ↓ C +) 巫力：E X 魔力：D 幸運：C (C + ↓
E) 媒介：A

() 内のランクは持霊の憑依状態によって異なります。

媒介(宝具)

馬孫刀

槍

方天画戟

備考

孫明と葉生の組み手で、肉体的に鍛えられステータスが上昇した。
葉生と一緒に八才との地獄巡りで、精神的に鍛えられ巫力が上昇し
た。

く第十三廻く 魔法（前書き）

リリなの勢はどうしようかな…

特にアリサ、すずか、なのはの三人…。

美由紀×玉藻ってカップリングが、私の脳裏に出ては消えて出ては消えて……。

第十三廻　魔法

▼葉生視点▼

「昨日の夜、変な声が聞こえたけど…聞こえた？」

朝、マリーちゃんに起こされ、着替えて下に下りる途中、マリーちゃんに昨日の声について聞いた。

「聞こえたよ…そのせいで眠れなかった」

「皆聞こえてみたいですよ。それとおはよう葉生」

下に着くと、メイデンが会話に入ってきた。

皆って……

「潤さん、孫明さん、ミネさん、さっちゃん、はやてに蓮と誣葉爺達？」

「旦那様…私は聞いておりません」

「そっなんだ…」

どうやら孫明さんは、聞こえてないらしい。
霊の声ならキョンシーである孫明さんも、聞こえるはずなんだけどなあ…。

「とりあえず放課後に声の主を探してみるよ…」

「気をつけるのだぞ」

「はい」

話も終わり、朝食。

今日のメニューは、ご飯に生卵、みそ汁と焼き鮭に漬物だ。

純和食

作ったのは、はやてとさっちゃんかな…。

「…」「いただきます」「…」「…」

《カチャカチャ》

と、箸を動かす音…。

食事中は静かに…という決まりはないんだけど…。

《ゴゴゴゴゴゴゴ…》

女性陣（主にメイデン達）の気迫が半端ない。

なんでも、一口一口よく噛んで隠し味や技術を盗んで、自分のモノにするのかなんとか…。

これ、朝昼晩やってるんだよね…。

はやてが来たばかりの頃は、はやてがかなり戸惑ってた。今でも、ちよつと戸惑ってる感じだ。

まあ、面白みが欠ける食事風景は飛ばそう。

「「「「ごちそうさま」……」」」

「あ、葉生くん……そろそろ学校行く時間やで」

はやてが時計を見て、教えてくれる。

普段なら一息入れても間に合うくらいだけど、食事前の会話で潰れたみたいだ。

「それじゃあ行ってくる」

「行つて参ります」

「行つてきます！」

「……行つてきます」

「行つてきます」

「行つてきます」

「行つてくる……」

上から俺、メイデン、さっちゃん、マリーちゃん、潤さん、ミイネさん、蓮の順で「行つてきます」の挨拶。

はやても本当は学校なんだけど、誣葉爺でも足を治す事が出来ないらしく、いまだ学校を休んでる。

『では、葉生の護衛に行きます』

『俺はマリ嬢に憑けばいいんだな』

『学校、学校』

『僕、あんまり好きじゃないなあ…』

『ワシは潤について行くか…』

『今日は俺が蓮坊の護衛か…』

『ミネ殿の護衛はこの馬孫が…』

そして、霊達も護衛としてついてくる。

ギルは俺の位牌で寝てる…。

そして、学校。

「それじゃあ、昼休みに」

「……はい……」

俺と蓮、メイデン以外は学年が違うので、靴箱で解散する。
俺達三人は同じ教室だ。

蓮とも修行を通して仲良くなって、今ではライバルであり親友でありと、男の友情を築いてる。
生前はそんな友情なんてないから、嬉しい限りだ。

「おはよう!」

「おはよう…」

「おはようございます」

教室について皆に挨拶すると、皆が挨拶を返してくれる。
殆どのクラスメートの関係も良好だ。

ただ、昼休みは男子から殺気が……………。
理由は…まあ、それは後で説明するよ。

「おはよう。 葉生、蓮、ジャンヌ」

「おはよう葉生くん、蓮くん、ジャンヌちゃんも」

「おはよう。 葉生くん、蓮くん、ジャンヌちゃん…それと、アル
さんにシャマシュちゃん、呂布さん」

上から順に、アリサ、なのは、すずかだ。

すずかは最後に声を潜め、俺達の傍に居るアル達にも挨拶をする。

すずかは夜の一族って奴で、吸血鬼?のような人種らしく霊体が見
えるらしい。

ただ、吸血鬼として力が劣ってるみたいで、霊力の高い霊体しか見
えないらしい。

生前で見た化。語の主人公を、沸騰させる一族だと思った俺は悪く
ない……………はず…。

そして、HRが始まるまで六人で談笑する。
つまらない授業は飛ばして、昼休み。

《ガラツ》と扉が開き、複数の女子が現れた。
それと同時に、俺と蓮に殺気を放つ男子。
言うまでもなく、来客は潤さん達だ。

「それじゃあ行きましょう」

アリサを先頭に、全員屋上へ。

「ねえ、将来の夢…皆は書いた？」

弁当を食べてると、なのはが将来について聞いてきた。
将来の夢……。

「私は書いたわよ。大学出て家の跡継ぎね」

「ふん。すずかちゃんは？」

「私は機械とか得意だから、そういった関係の仕事かな」

「葉生達は？」

アリサが話を振ってきた。
さて、なんて答えよう。

「私は医療関係ですね」

ジャン又は医療か……。

「俺は会社を立ち上げる…」

蓮は会社をねえ。

「私は看護師かしら」

ミネさんも医療…。

「私も医療関係かな… 医師か看護師かは決めてないわ」

潤さんも医療つと…。

「マリは…ぬいぐるみ屋さん」

まだ将来の夢も何も言われてないだろうに、もう未来のヴィジョンを…マリーちゃんはぬいぐるみ屋さん…。

「私は旅に出るつもり」

さっちゃんは旅か………。

「旅ってお金は？」

「新聞配達でバイトしてる」

「それだけじゃ足りないでしょ？」

「高校卒業してからだから…他にもバイトするよ」

皆よく考えてるなあ…。

「はあ、というか皆葉生の許婚よね？ バラバラじゃない」

そうだ…未来のヴィジョンより…彼女達の誰か一人選ばないと……。でもなあ…やっぱり本人の同意が必要だよ…。

「……葉生（くん/様）が私達（マリ達）を選ぶなんてないよ（ないです）。だから皆この関係を維持するつもり」「……」

本当によく考えてらっしやる…。

なんか、目から汗が……。…。

「あんた果報者ね…大切にしていやりなさいよ？」

「そうだね…」

「で、葉生くんの将来の夢は？」

「俺は、まだ決めてない」

皆決めてるからって、まだ決めてないのに見栄を張るってのもなあ…。

此処は、正直に言うのが1番だ。

「蓮やジャンヌ達は決まってるのに、あんたは………はあ」

なんかため息つかれた。

「別に良いだろ？ まだ人生長いんだし」

だいたい皆、精神年齢高すぎだよ…。

小学生で将来の夢なんて、俺が生前の小学生時代は…

《しょうらいのゆめ。 いちねんさんくみ ■ ■ ■ ■。 ぼく
は、おおきくなつたら、ウルトラm》

うわあああああああああああ…。

何言ってるんだよ！？ ハオ！！

《あっはははは… 思い出させようと思って》

要らない親切だよ！！ 恥ずかしいじゃないか！！ だ、誰も聞いてないよな？

《フフフツ…》

楽しみに笑い、ハオの気配は無くなった。

おそらく、観察に戻ったのだろう。

そして、周りがやけに騒がしいと思ったら、アリサがなのはの頬を引っ張ってた。

はて？ どういった経緯でこんな状況に？

「そろそろ、昼休み終わるな…」

という訳で、時間を飛ばします。

帰り道、俺達はアリサとなのは、ずずかと別れて昨夜の声の主を探
す。

近くの浮遊霊に聞いたり、持霊を使って搜索するも一向に見つから
ない。

『見つかりませんね……』

「んゝ霊じゃないのかも……」

「昨夜、街を浮遊してた霊に聞くと黒い何かを見たよ、言っ
てましたよ……」

「その霊に詳しく……」

『成仏、成仏』

「……」

蓮の言葉に被せるように、シャマシュが不穏な言葉を連呼してた。

「あー…メイデン？」

「すみません…シャマシュちゃんが……」

メイデンの一言で全員悟った。

シャマシュは浮遊霊や地縛霊を見ると、成仏させる癖がある困った
神様なのだ。

お陰で昨日見た霊は、次の日必ず居なくなり海鳴市在住霊は、日本
の中で少ないのだ。

「チツ…使えん馬鹿神だ」

『死刑、死刑』

蓮がシャマシユを馬鹿にし、シャマシユは蓮に向かって死刑発言。というか、シャマシユの知能が低い気がするのは気のせい……だと思いたい。

とりあえず、家に帰る事にした。

「「「…ただいま」…」」

「あ、お帰り」

家に帰ると、はやてが出迎えに来てくれた。

「誣葉爺は？」

「居間で茶をしばいとりよ」

あのジジイは……。

「今朝言つとつた声はどうやった？」

「収獲無し」

「目撃者が居たんだがなあ…」

「なんや、収穫あつたんやないか」

シヤマシユが成仏させたから……………とは言えない。

「信憑性に欠けていてな…」

「どんなん？」

「幽霊みたいな影を見たとか…」

「な、何言つとんのや…ゆ、ゆゆ幽霊なんておるはず……………なななな、無いで……………」

はやての質問に、メイデンが答える。

しかも、はやてはメイデンの台詞に、顔を引き攣って震えながら強がってた。

『はやて嬢の奴…完全に怯えてんなあ…………』

そりゃあ、見えないからねえ…。

『見えない恐怖って奴か？』

そうそう…それ。

さてと、今夜は聞こえたらすぐに行こうかな…。
それまでは、英気を養おう。

▲葉生視点▲

▼なのは視点▼

こんばんは！ 私、高町なのはなの。
今、私は変なのに追われているの。

なんで、こんな事になったかと言うと…。

夜遅くに助けを求める声が聞こえて、なんとなく夕方フェレットさんを預けた病院に行ったら、変な怪物が襲って来たのー！！

「巻き込んでしまってますいません。 お礼は必ずします。 だから僕に力を貸して下さい。 魔法の力を…」

「お礼とか、そんなこと言うてる場合じゃないでしょ？ それに魔法って」

フェレットさんが喋ってるのは驚きだけど、今は突っ込んでじゃダメな気がするの。

「これを…」

フェレットさんは、赤い宝石を私に渡した。

これで何をするの？

首を傾げて、赤い宝石を眺める。

「綺麗…」

「あ、」

「■■■■■■■■■■」

「えっ？」

私は、宝石を眺めていていつの間にか足を止めていたらしく。
変な怪物がなのはに向かって、突進してきます。

「「おらよつと！」」

怪物に触れるか触れないかのギリギリの距離で、なのはの後ろから
赤い棒みたいなのが出て来て怪物を弾きました。

「ふえっ？」

「だ、誰！？」

「「お、なのはに……フェレット？」」

「は、葉生くん……」

後ろを見ると、そこには葉生くんが居ました。

▲なのは視点▲

▼葉生視点▼

晩御飯を食べた後、部屋で宿題していたらまた例の声が聞こえた。すぐさま外へ駆け出し、クーの案内で動物病院まで来た。

動物病院は扉やガラスが壊れており、何かが暴れた感じだった。霊力を感じれない事から幽霊関係ではないと当たりを付け、クーと憑依合体して音のする方へ向かった……んだけど…。

そこに居たのは、なのはと喋るフェレットそして黒い何かだった。

メイデンが霊から聞き出した「黒い何か」ってアレかな？

『だろうな……』

「葉生くん！ 危ないよ？」

「その生物は危険なんです！ 離れて！」

危険なら、なのはこそ離れるべきだろ…。

仮にも女の子なんだ…。

傷がついたら、あのお兄さんがどうなることやら…。

「「ならお前らが先に離れな……」」

「き、君じゃ……」

「「んじゃあよお…アレをどうにかする方法あんのか？」」

もしあるなら、その方法を是非とも教えてもらいたい。

「あります！-」

えっ？ マジであるの？

「ほう…おもしれえ…教えろよ」

俺が黒いのに目を離さず、フェレットに対処法を聞くと…。

「このレイジングハートを使って封印をするんです。お願いします…僕に力を貸してください」

「えっ…私？」

なんかフェレットがなのはに、お願いしてるんだが…。

「おい、フェレット…なのはに封印なんざ出来んのか？ なのはは運動オンチだ、ぞー！」

再度突撃をかましてくる黒いのを弾きながら、フェレットに問い掛ける。

「彼女には魔法の才能があります！」

……魔法？ 魔法ってアレか？ ゲー
ムとかであるアレか？ てか、こんな長々と会話してたらキリがない…。

此処はフェレットに…あーいや、なのはに賭けるか…。

「「なら時間は稼ぐ…さっさと封印とやらの準備でもしな」」

「ですが…」

「「すぐに出来るならすぐやれや！ 準備が必要なら誰かが抑える役が必要だろうが！！」」

「は、はい！」

その後は本当に凄かった。

もうこれしか言えない。

何回か槍で黒いのを弾いてると、後ろから光柱が立ち上がって、そしてなのはがいつの間にか持ってた杖が、喋り出したと思っただけなのはの服装も変わったりと……。

んゝ宴会で早着替えのネタで使える？ 盛り上がりませんか…。

それからなのはがくるくる回って、なんか光の帯だか光線だかを出して、黒いのは一つの宝石になった（フェレット曰く、戻った…らしいが俺は知らん）。

そのあとは、パトカーのサイレン音が聞こえたので、黒いのがぶつかって歪んだガードレールやえぐれた道路を残して、逃げるように立ち去った。

▲葉生視点▲

〈第十三廻〉 魔法（後書き）

PV：190,763アクセス

ユニーク：29,061人

もうじき20万アクセス。

この作品を見てくださりありがとうございます。

20万突破したら何かやろうかなと考えてます。

今の所は、コラボとか孫明との修行とかですね…。

あ、許婚達とのイベントもいいかもです。

ギルガメッシュのオーバーソウルは案1にしました。

ただ、形状としては蔵より門にしたいと思います。

く海鳴の詩く　さいきょう孫明さん編（前書き）

そつえば【ギルガメッシュ】って
本来は【ギルガメシュ】らしいですね…。

む…【ギルガメシュ】…。

此処は型月みたいにオリジナル感を出して

【ギルガメイシュ】と名前を変更しようかな？

いや、やっぱり【ギルガメッシュ】で行こう。

そうそう、今回は番外編です。

20万アクセス突破記念です。

まあ、短編みたいなもんなんで短いですが…どうぞ。

く海鳴の詩く　さいきょう孫明さん編

▼ 孫明 視点 ▼

旦那様と蓮様が、オーバーソウルを体得なされて数ヶ月。

憑依100%の影響で、持霊達の技能も身につけ、身体が出来上が
りつつある。

そんなある日、二人から本気で組み手をして欲しいと言われた。

潤様と相談した結果、一度やってみるのも良いと言われ、本気組み
手をする事になった。

「では旦那様、蓮様…よろしいですね？」

「来い！」

「ああ！」

旦那様は朱い禍々しい槍に、クー殿を憑依させオーバーソウルの槍
を構え、蓮様は青龍偃月刀と呼ばれる武器に、馬孫殿を憑依させオ
ーバーソウル化した刀を構えた。

「ふう……潤様……」

「ええ…孫明！　除霊モード！！」

潤様の指示で、身体から魂が出る。

『行きますよ…お二方…』

「「えっ?」」

私達の行動を見て、理解出来ていないのか困惑したような声をあげる。

「憑依! 合体!」

『まさか!?』

私達がこれからする事を、ギャラリーであるギルガメッシュ殿が、理解したのか驚きの声を出す。

「孫明!! in 孫明!!」

「「!!」」

キョンシーへと戻るのではなく…私は……。

「孫明…オーバーソウルモード!!」

オーバーソウルへとなる。

「「な、なあにiiiiiiiiii!!」」

「そ、孫明が…」

「オーバーソウル化したと!?!」

『これが私の本気です。では、行きます…』

オーバーソウルとなった私は通常よりも遥かに疾く動き、30分も経たない内にお二方を沈めた。

オーバーソウル…注いだ巫力の量や霊が持つ霊力の量によって、オーバーソウルの強弱が決まる。

旦那様や蓮様は潤様に比べ、巫力量や持霊の霊力数は私達の比ではないが、オーバーソウルを使用しての戦いは、潤様に一日の長がある。

故に、私が負けるはずがない！

「少しやり過ぎちゃったわね…」

『いいのではないでしょうか？』

こうして、旦那様と蓮様の初の本気組み手は、私の勝利に終わった。

▲ 孫明 視点 ▲

〈海鳴の詩〉 葉生と優編（前書き）

今回はA r i s h i a様の魔法少女リリカル……なんとか！の主人公である暁 優君（無印終了時点）とのコラボです。

なお、葉生達の世界の時間軸は、なのはが魔法と出会って間もない時期です。

ジュエルシード事件すら終わってない頃です！

く海鳴の詩く 葉生と優編

▼優視点▼

「ここ…海鳴市……だよな？」

はじめましての人は、はじめまして…。

俺を知ってる人は、こんにちは。

唐突だけど俺は今物凄く困ってる。

どうして困ってるのかって言うと、神の奴の気まぐれに世界を飛ばされたんだ。

だけど、飛ばされた先は俺もよく知る海鳴市が一望出来る山。

まあ、いつまでも此処（山）に居ても進展しないし、動く事にしよう。

「オオオオオオオッ！！」

「ハアアアアアッ！！」

「ん？」

山を降りようとしたら、近くから人の声と金属がぶつかり合う音が聞こえた。

▲優視点▲

▼葉生視点▼

「でえええええええい！！」

「はっ！！」

幾千、幾万というほど蓮の金色の青龍刀と俺の金色の門から放たれる無数の武具が、ぶつかり合う。

と、いきなりついていけない人の為に補足を…………。

今俺はオーバーソウル戦に慣れる為、蓮と模擬戦をしている。

ちなみに、蓮が使用してる霊は馬孫で青龍刀に憑依させてる。

オーバーソウルの形は、刃のやや下の柄の部分に鎧が球体のように、着いている。

《原作の初期オーバーソウルと違って構わないよ。 by 八才》

そして俺が使用してる霊は、ギルガメッシュで鍵剣に憑依させてる。オーバーソウルの形は、円形の楯型の黄金の門。

俺の合図で門の開け閉めが出来、開ければ矢のように無数の武器を飛ばし、閉めれば楯として使えるオーバーソウルだ。

「馬孫！！」

『オオオオオオオッ！！』

と、説明してる間に……

蓮は巫力を自身のオーバーソウルに上乗せをして、オーバーソウルを肥大化させた。
球体型の鎧は馬孫へと姿を変えて…………。

「くっ」

「馬孫！ ゴールデンパンチ！！」

俺は黄金の門を楯に構え、馬孫の拳を受け止め……

《ズガアアアアアン！！》

「カハッ…………」

れずに吹き飛び、後ろの木に幾つもぶつかった。

「ハッハハッ…………強いなあ…蓮は」

ギルのオーバーソウルでは、あの馬孫を崩すには無理がある…………か。
俺も巫力の上乗せをすれば勝てるけど…………。

「どうしよう…………孫 明さんみたいに自律型出来るかなあ……………」

《カサカサッ》

「ん？ 誰？」

草むらから出て来たのは、メイデンレベルのかわいい女の子だった。

「迷子……?」

「まあ、迷子……かな?」

とりあえず……こんな時はどうすれば…。

「葉生ー? 無事か……って無事なら早くって誰だ? そいつは」

あ、蓮が来た。

少し心配かけてしまったかな……。

「ごめんごめん……えっとこの人は迷子……みたいなんだ」

「迷子?」

「あ、あははは……どうも……あ、ところでさ」

「「ん?」
「」

なんだろうか……? 彼女の視線がうまく俺達に向いてない。

彼女の視線は俺と蓮の手元。

俺達の手には武器が…。

オーバーソウルは普通の人は見えないから問題無し。

あるとすれば……武器を持ってるという事実かな?

うん、やばいね。

だけど、俺の予想は彼女の次の言葉によって裏切られた。
おそらくは良い意味で………。

「それ…デバイス？」

「ハッ？」

デバイスって……確かなのはの……。

「あ、いや…なんでもないや」

この人……ミッドってどこから来た人かな？

「そ、そうそう…俺は暁 優。よろしくな」

「俺は麻倉 葉生」

「道 蓮だ」

▲葉生視点▲

▼優視点▼

山で葉生と蓮に出会って、数十分。

俺達は商店街を歩いてる。

俺が知ってる海鳴市と、そう変わりはないみたいだ。

葉生の家以外は……。

俺の世界では広い空地だった所に、此处ではでかい屋敷（葉生の家）が建ってたしな。

にしても……

「シャーマンねえ」

「？　どうかした？」

「いや…俺達が居た世界には居なかったからちよつとね」

霊媒師つてのは居ると思うけど、本物がどうかかわからないし。
まあパチモノが多いだろうけど……。

「いや…こう本物に会つとなんか不思議な感じというか」

「まあ…テレビとかで出て来る霊媒師はたいてい偽物が多いしな」

「でも、全部が全部偽物つてわけじゃないけどね」

「ふう〜ん」

「旦那様、蓮様…」

「あ、孫明さん」

ん？　二人の知り合いだろうか……。

葉生の事を旦那様つて言つてた気がするけど……気のせいかな？
というか……顔が真っ青じゃないか？

「そちらは？」

「暁 優って言って、迷子だよ」

「山で葉生と模擬戦してたら居たんだ」

「そうですか…」

葉生達の話聞いて、孫明と呼ばれた女性は俺の方を見て…

「孫 明と言います」

と、自己紹介された。

礼儀正しい人だ。

「暁 優です」

葉生に紹介されたけど、一応な…。
それに、聞きたい事もあるし……

「あの……明、さん？」

「なんですか？」

「顔色や身体色（？）が悪い気がします……大丈夫なんですか？」

「モマンタイ無問題です。 生れつきこうなので」

「あ、そうなんですか」

生れつきなのか……んー生れつき……。

嘘な気がするけど、問題無いのは本当らしいし……ま、いいか……

▲優視点▲

▼孫明視点▼

買い物中、旦那様達と出会い。

今はその旦那様に、荷物を運んでくださってる状況。
手伝ってくださるのは嬉しいのだが……。

「やはり、私が……」

「いって」

「これも鍛練になる」

「しかし、優様にまで」

「俺も構いませんよ」

本当に、心苦しい。

はあ……………。

まあ、旦那様はこの優しさが良い所なのだろう。
潤様を許して下さったし……。

「万引きだー!!」

「「「!!」」」

万引きと言つ言葉に、反応した旦那様達。

だが、荷物を抱えてるお三方が対応するには無理がある。
故に、今迅速に動ける私が対処する！

「旦那様達はそこでお待ちを…私が行きます！」

私は追われてる者の前へ出て、道を塞ぐ。

男はそのまま突っ込もうと、速度を落とさず向かって来る。

「はあああああ…」

ゆっくりと構えを取る。

繰り出すは必倒の一撃。

男と私の距離は歩いて十歩程、このまま何もしなければすぐに抜かれるだろう。

だが……この身は馬孫殿、李殿、呂布殿や道家と中国が誇る英雄達によって、鍛えられし身体。

故に…私の横を抜けるなど……

「無駄の一言！！蹴り砕く！」

足を振り上げ即座に落とす。

一般的に踵落としと呼ばれる技だ。

「足を止める！孫明！！」

「！！！」

旦那様の声に身体が反応し、足は止まる。

しかし、高速で繰り出された技は衝撃波を生み、男はその衝撃波によつて地面に潰れた。

む、いかな…あのまま旦那様が止めなければ殺してる所だった。

そのあと、店員に万引き犯を引き渡して旦那様の元へ向かうと、そこには若干青筋を立てた旦那様と蓮様。

「孫明……」

「なんでしょう？」

「姉さんに報告させてもらつ」

「なっ!？」

潤様に報告なんて……。

「ど、どうか内密に……」

「ダメだよ」

「うう……」

日本とは面倒な国だ。

やり過ぎると逆に捕まるなんて……。

道家では……と、引き合いに出してはいかな……。

「まあ無事だったんだしいじゃないか？」

「優……それは優しさじゃないよ」

「本人にとってダメな事は厳しくしないと」

「以後、気をつけます」

うむ、本当に気をつけよう。

▲孫明視点▲

▼神様視点▼

「もうだいぶ経つのにフラグが立たないな」

《勘違いフラグはいまだ続いてるみたいだよ》

「ん？ ああ、お前か」

俺が優の様子を見てると、頭に聞き覚えのある声が聞こえた。

ハオ・アサクラ。

つい最近、星の王となって俺ら神の仲間入りをした奴。

甘たれた若造で、興味すら湧かなかったんだっけ……最初は…。

まあ、いろいろあって今では暇つぶしに、話し相手になるまでの仲になったが…話す気はない。

「だが、なかなか先に進まない。そろそろ飽きたぞ」

《確かに……ねえ……》

「なんか良い方法は無いかねー」

《戦闘があれば立つかも》

戦闘ねえ……。

あいつ（優）が倒せない敵が現れ、あいつ（優）を襲わせあいつ（優）を殺さない程度に倒して、葉生達が助ける。

ダメだな…あいつが、フラグを立ててこそ意味がある。

自分自身にフラグを立てるなぞ………待てよ？ 死亡フラグは自分自身に立つフラグ…なら……恋愛フラグを自分自身に立たせるのもまた……新しい

《良いことを思いついたみたいだね》

「相手にフラグが立たないなら、あいつにフラグが立てば良い……」

そうと決まれば早速………。

《やれやれ…まあ、頑張つてね………■■》

▲神様視点▲

▼優視点▼

万引きを捕まえて暫く歩いてると、いきなり結界が張られた。

「!」

「これは……」

「なんだ!？」

「旦那様! 蓮様、優様!! アレを」

明さんが指差す方向を見ると、そこにはさっきまで居なかったドラゴンが居た。

それは、空を覆う程の巨大なドラゴン。

「デカイ……」

「というかなんでこんなものが」

「とにかく、街に被害が出ないように」

「そういえば私達以外、人を見掛けませんね」

「そういう結界が張られてるんだ。 結界内で被害が起きても結界の外には影響がないよ」

葉生達に結界の効果を説明し、ナイトハートをセッアップする。

沈黙するナイトハート。

「……………優」

哀れむようにこちらを見る葉生。

「……………凄い技だが……………何がしたいんだ？ 貴様は」

褒めてくれるも、青筋を立てる蓮。

「……………追撃行きます」

気を遣って、明さんがドラゴンに向かう。

「そうだな」

「そ、総攻撃！！」

『了解しました』

皆の優しさが痛い。

▲優視点▲

▼葉生視点▼

「中華乱舞！！」

孫明さんの拳、蹴り、膝、肘がドラゴンの身体を捉え……

「超！ ゴールデン中華斬舞！！」

そして、蓮の斬撃を放つ。

「■■■■■■■■■■！！」

だけど、ドラゴンにとっては微々たるダメージなのか、効いてる様子がない。

まったく、厄介極まりない。

ん？ 俺は攻撃しないのかって？ ちゃんとしてるぞ。

O・S・オーバーソウル・せいじうのこぎ星光之剣で、優と一緒にドラゴンを斬りつけてます。

O・S・星光之剣。

これはアルトリアをエクスカリバーに、憑依させたオーバーソウルだ。

刀身は星のように輝いており、青と金の柄で彩られてる。

ただ、阿呆みたいにデカイけどね。

味方に当てないか、冷や冷やモノだよ。

「■■■■■■！！」

俺達の猛攻にようやく効いてきたのか、ドラゴンが半歩程のけ反る。

「ハアアアアアアアッ！！」

「でええええいつ！！」

「す、すまん！ わざとじゃないんだ！！」

「旦那様！ 蓮様は直ちに後ろを向いて！！」

「「はいつ！！」」

「ちよっ…待つ」

孫明さんに促されるように、優の言葉を聞かず後ろを向く。

「いやいやいや…なんで後ろを向くのさ？ 俺は男…」

「優様！！」

「はい？」

「御自分に胸が無いからと言ってそんな事を言うてはいけません」

「や、だか」

「優様はまだ小学生の身…これからです」

「ねえ？ 聞してる！？ 俺の話？」

もう、早くバリアジャケットつてのを解いて私服に戻って欲しいよ。

「あら？」

「ん？ どうしたの？ 孫明さん」

「……………優様って…」

「だから言っただろ!？」

？

いったいなんだと言っただろうか？

「どうした孫明？」

「ハッ！ 優様はどうやら本当に男だったみたいです」

「「なん……………だと……………?」」

「そこまで意外かなあ!？ 俺言っただよな？ 男だって!？」

むう…紛らわしい姿の優が悪いよ。

「紛らわしい…」

蓮もそう思ったのか、本人を目の前に声を出して言った。

「はぁ…もういいや……………!？」

「ッ！ 優!…」

突然、優の身体が光り出すとだんだん優の存在が希薄となった。

「どうやらお別れみたいだな」

「…………そう、なんだ」

「何、また会えるよ」

「うん」

「またね…葉生、蓮、明さん」

「また」

「フンッ…」

「また会える日を…」

優は笑顔を見せたまま、この世界から消えた。

また会う約束をして……………。

▲葉生視点▲

ゝ第十四廻ゝ 人海戦術（前書き）

恐るべきは麻倉家。

第十四廻　人海戦術

▼葉生視点▼

「ふむ、魔法にロストロギアとな…」

「はい」

「よもや魔法という物があるとはのう。　今でも信じられんが…葉生が見たと言うなら本当じゃろうな」

「こちらにも信じられない事ばかりです。　魔法とは違う、別の力を持つシャーマンという方々が居るなんて」

フェレットと誣葉爺が、同じ部屋で話し合う姿は、なんというかシユールだ。
フェレットが、正座してるのもそうだけど…。

あ、どうも麻倉　葉生です。

あの後、深夜とも言うべき時間帯ということもあり、俺の家になのは達を連れてきた。

そして、なのはは家に電話を入れて俺ん家に泊まる許可を貰ってる最中。

その間に、フェレットが誣葉爺に状況説明して、自分達の事を説明した。

フェレットは魔導師の事。

誣葉爺はシャーマンの事を……ね。

「ねえ…葉生くん…」

「ん？ どうしたの？」

電話から戻ってきたのはが、急に話し掛けてきた。

なんだろう？ 泊まる許可なら電話していたのはの傍に居たから、許可を貰えた事はわかってるけど………もしかして幽霊の事か？

なのはあの公園の一件で、ホラー映画やお化け屋敷など…。

幽霊関係に関する事は泣く、近くにある物を振り回す、そして逃げるという一連の行動を起こすのだ。

今は眼に涙を溜めて、レイジングハートと言う玩具みたいなものを握りしめてる。

つまりは、俺の答えでここがボロボロになるかならないかの瀬戸際だろう。

恐怖のあまり、魔法とやらをぶっ放されたら、たまったものではない。

というかぶっ放されたら、家が消える…。

「ゆ、幽霊さんは………此处に、居るの？」

アル、クー、ギル、呂布、書文、馬孫、センジュ、シャマシユ、ガブリエル、マリーちゃんの持霊。

さらには家の家族が持つ霊達。

そうそう、孫明さんも幽霊に入るんだよなー。

お化けのゾンビだな。

うん、ダメだ。

言った瞬間、町が消える。

え？ 被害が拡大してないかって？ いいだろ…拡がろうと小さかるうと…結局は俺の家が消えるんだ。

「いや、ここらは居ないよ。 さっき説明された通り、シャーマンは霊をあの世へ導く存在だから…」

「そ、そうなんだ……………」

レイジングハートを下ろして、ホッと胸を撫で下ろすなのは。

はあ…………冷や冷やしたよ…。

▲葉生視点▲

- 夜は明け、朝 -

▼蓮視点▼

いつもの朝。

俺は部屋を出て座敷へ向かう。

そこには、葉生とミイネ以外全員揃っていた。

ミイネが寝坊をする事はない。

おそらく、葉生を起こしに行ってるのだろう。

そして、座敷に座ってはやと雑談してる高町。
たしか…昨日の夜に来て泊まったんだっとな…。

「おはよう、みんな」

「いつものがらお寝坊さんやな」葉生くんは…おはようや」

「おはようございます」

「おはよう…」

「おはよう」

「あ、髪が乱れてるよ葉生」

「おはようございます。旦那様」

「おはよう」

「早く席に着け」

葉生も起きて来て、座敷に全員座る。

「では…朝の会議を始める」

「「？」」

やはり、朝の会議はあるのだな…。
まあ、今回は高町達も当事者みたいだしな…というか誰か教えてやれ…頭を傾げてるぞ。

「この町に、散らばったというジュエルシードを、どうするかと言う事じゃ」

「「!!」「」」

誣葉殿の言葉に驚く、フェレットと高町。
ようやく、この会議が何かわかったらしい。

「私は一刻も早くジュエルシードってのを封印して、管理してもらいたいかなあ」

「それは勿論…反応があり次第即座に」

「それだけじゃ遅すぎね」

「此処は人海戦術しかないでしょう」

「そうね…霊と私たちで町を隈なく探す。そして発見後は封印つと」

「でも、封印できるのは…なのはだけで」

「魔法を使わずとも封じる事は可能じゃ。それでは会議終了!!
朝ご飯じゃな」

「……………」

誣葉殿の言葉を聞いて、頭を捻るフェレット。
ジュエルシードをどう封じるか、わからないといったところだろう。

まあ、フェレットの事はさておき……。
食べるか……。

▲蓮視点▲

▼誣葉視点▼

朝食が終わり、葉生達が学校へ行ったあと、ワシらは玲奈さんを家に残し各自散開した。

「しかし……霊の姿が見えんのう」

ジュエルシードを探す合間に、霊を見かけたら探すのを手伝ってもらおうとしたのだが……。

まったく霊の姿が見ん。

『そついや一週間程前に、シャマシユが切り裂いてたぞ』

「……………」

バカガラスが思い出したかのように、ワシに報告をする。

いかん……目眩がする。

『おい、大丈夫か？ 老いぼれ』

「すまん……無理じゃ」

あの神クラスの霊はなんとかせねば……。

▲誣葉視点▲

- 放課後 -

▼葉生視点▼

アリサとすずかと別れ、朝の会議通りジュエルシードを探し始めた。しばらく探していると、なのはが急に何処かへ走り出した。

何処へ行くんだ？ と聞いても「ちょっと」という返事が返ってくるだけで、説明しないのは。

仕方なしに、メイデン達と一緒になのはの後を……………。

「あれ？ 速くない？」

「なのはさん…あんなに速く走れたかしら？」

ほぼ毎日と言っているいいほど、数キロ走ってる俺達だが、先行くなのはに何故か追いつけない。

「魔法を使ってるのかしら？」

「さあ？」

とりあえず、今は見失わないよう追いかけるのみ。

そして、なのはを追いかけて来たら、とある神社に着いた。
というか、速すぎ……。

階段を上がると、なのはは犬のような生物と、対峙していた。
なのはは、上がって来た俺達に気が付くと……。

「危険だから下がってて!!」

と、俺達に警告(?)してくる。
きっと、多分…恐らくなのはは、シャーマンの事を理解してないの
だろ。

まあ、幽霊の単語を出した瞬間…耳、塞いでたし……。

「なのはが下がってて…」

「ジュエルシードが発動してるんです！ 此処はなのはに任せて！
！」

声のする方を見ると、なのはの足元にあの喋るフェレットが居た。
というか…こうにまで気を遣われるとなあ…

「わかった、わかった……下がるよ」

「じゃあ、なのは？」

「うん！」

レイジングハートという杖を持って、昨日のように回転する。
どうでもいいが、いちいち回転しないとダメなのか？

「■■■■■■！！！」

なのはがピンクのビームを出すと、犬はそれを瞬時に避けて、なのはの方へ突貫する。

『Protection』

なのはは、手を出してカウンター気味にピンクのバリアを張る。
犬はバリアに激突して、後ろへ吹き飛び次にこちらに向かって、襲い掛かって来た。

「！！！」

なのはは、俺の前に立ってまたバリアを出そうとするが………

「霸ツ！！！」

孫明さんが犬を蹴り飛ばす。

「明さん！？」

「旦那様に危害を加えるモノは、何人たりとも私が許さん!!」

「め、明さん……あの、危ない……」

孫明さんの殺気に当てられたのか、なのはは震えた声で俺達と同じように注意する。

《ふむ、此処まで来ると…高町なのはは異常だね》

ハオ？

《自分にしか出来ない、自分がやらないといけない。そんな脅迫めいた義務が彼女の頭を占めてるんだろっね》

義務？

《そう、次元世界……つまり地球が消える程のモノが落ちた。それを集めるには自分みたいな、特別な力を持った者のみ。そして現在、その力を持った者は？》

喋るフレットこと、ユーノとなのはだけ…。

《しかも、ユーノは怪我で無理は出来ない》

なら、自分しか居ない……か。
やれやれ……。

「今まで戦いを知らなかった小娘が、知った風な口を叩くな」

「ッ!!」

「封印をしてもまた避けられる……。　なら、避けられないよう弱らせてから封印をする。　常識だ」

孫明さんは潤さんから巫力の供給を受けると、孫明さんの身体は黄金の光に包まれた。

それは、孫明さんの本気モード。

再び、犬は孫明さんに向かって飛び掛かる。

孫明さんは動かずに、犬を見上げ……。　そして犬の爪が孫明さんに触れる瞬間、孫明さんは犬の手を腕で押さえ込み、そのまま腕を滑り上げるよう犬の顎を強打した。

犬はもろにそれを喰らい、後ろの社の中まで吹き飛んだ。

「……………」

『龍王拳、突抜！！　そら、何をしてる…封印をするのだろう？』

「あ、は、はい！！」

孫明さんはポカンとしてた、なのは達に声を掛けて封印を促す。

「リリカル・マジカル…ジュエルシード封印！！」

ピンクのビームが再び、犬が居る方向へと伸びて無事、ジュエルシードは封印する事が出来た。

そのあと、気まずいまま麻倉家へと戻った俺達は、さらに驚くよう

な事があった。

父さん達が、一日で見つけたジュエルシードが7個。

オーバーソウルで保護して、無理矢理押さえ込んでる状態だが、暴走してないのでなんなく封印が出来た。

なのは獲得ジュエルシード……既に9個。

残り……………12個

▲葉生視点▲

▼フェイト視点▼

「どういう事だい？　これは？」

「どうしたの？　アルフ？」

とあるビルの屋上。

私達は母さんのお願いで、ジュエルシードというロストログアの収集に来てた。

だけど、いざ探そうとアルフがモニターを見て難色の声を上げた。

「これを見ておくれよ…フェイト。　これが昨日のデータだ」

「うん」

映し出されたモニターには、六つの光が点々とあった。
この光がジュエルシードなんだろう。

でも、これがどうしたんだろう？

「そんで、今日」

「なっ！！」

さっき見ていたモニターが変わると、六つの光が消えていた。

「どういう……こと？」

「ね？ おかしいだろ？」

ジュエルシードは、ついこの間この地に散らばったって母さんから聞いている。

ジュエルシードの大きさから、この広い町を探索して回収するなんて、時間が掛かるはず……。

なのに、こんな短期間で………。

「どうする？ フェイト？」

「……………どうやら今回のお使いは時間が掛かりそうだね……」

夜も更け、ジュエルシードの場所もわからなくなったので、今日の探索は止める事にした。

▲フェイト視点▲

第十四廻 人海戦術（後書き）

このまま行くと……フェイトちゃんはジュエルシート獲得数0個に……。

プレシアからのきつつーいお仕置きが……！

↓第十五廻↓ もう一人の魔導師（前書き）

書いてるうちに何かなんだか……。
感想、誤字報告待ってます。

く第十五廻く もう一人の魔導師

▼葉生視点▼

神社のジュエルシードを封印して、日中に父さん達が集めたジュエルシードを封印したあと、俺はなのはにシャーマンとは何かを説明した。

最初は幽霊という単語に反応して怯えてた。

まあ、なのはの幽霊嫌いの原因が俺の持霊にあるとはいえ、いつまでも怯えてられると話せないので無理矢理にでも聞かせた。

全て話終えると、まだ怯えてはいるがなんとか理解してくれた。今後は俺達シャーマンが前衛で弱らせ、なのはが後ろで封印と言うことになった。

あと、暇な時に戦闘訓練的な事をしてほしいと頼まれた。

正直、魔導師の戦闘なんてどんなのかわからない。

だから簡単な組み手ならと答えたら、満面の笑顔で感謝された。

「……………」

「? どうしたの?」

「いや……………」

メイデンの方が可愛いと言ったら、死ぬから言わないでおう。

- - - - - 閃ッ！！

石は強く輝いたあと、ドンツと大きな音を立て消えた。

▲三人称▲

▼葉生視点▼

そして、次の日。

父さん抜きで、朝ごはん。

えっ？ 父さん？ 別に寝坊でも母さんのお仕置きで、朝ごはん抜きなわけじゃないよ。
仕事に行っただよ。

『今朝のニュースです。今日の午前5時頃に、海鳴市の墓地が荒らされたとの報告が警察署へ通報があり……』

あ、父さんが働いてる所だ。

そう、何を隠そう父さんは警察官なのだ！！
それなりに発言力があるらしい。

警視長で課長とか言ってたような……。

偉いのか？ まあ、よくわからんが偉いのだろう。

「ふむ、葉馬も大変じゃのう」

「だが、墓荒らしにしては荒れすぎじゃ」

婆ちゃんが言うように、今映し出されてる墓地は酷く荒れていた。いや、荒れてるというよりも……

「戦鬨の跡か……」

「隕石か何か落ちて、その衝撃で破壊された跡だな」

俺と蓮の言葉に、全員が頷く。

きっと……墓を荒らした犯人も皆が思ってるモノだろう。願いを叶える石、ジュエルシード。

それはどうやら……霊も例外じゃないみたいだ。

「孫明……」

「ハッ」

「次は俺がやる」

「わかりました」

「蓮君…学校行かなあかんよ？」

「フンッ…勉強などすでに修めたわー!!」

バサツとマントを纏い、外へ出る蓮。
それをはやては呆然と、眺めていたことを記しておく。

▲葉生視点▲

▼蓮視点▼

麻倉家を飛び出して、俺は今葉馬殿のコネ（付き添い）で現場に居る。

周りの警察とかは、何故此处に子供が？ とか、調査の邪魔とか言
った視線を向けられるが、全て無視する。

俺からしてみれば、奴らが邪魔だからな。
しかし、此处はえらく静かだな……。

本来、墓地という場所には絶えず霊が居る場所なのだ。
いくらあの駄神が成仏（たいていは消してるが）させた所とて、ま
た新たに霊が集まるはずなのだ。
それがこうもないと……。

「何かが霊を引き寄せてるってとこだね」

俺の考えを読むように、葉馬殿が話し掛けて来る。

『そのようだ』

「しかし…君の持霊は凄いなあ」

？ 何がだ？

「僕の鬼達は出した瞬間、何処かに引き寄せられて行こうとしたからね。調査に出せないんだ」

「あの五行鬼が？」

「うん」

ふむ……となるとこちらはどうなんだろう……。書文は、平然としてるが……。

「書文……どうなんだ？」

『ん？ 我を強く持つて堪えてるが？』

つまりは、今まさに引き寄せられてるのか。なら追跡は出来るな。

「今回の件……一般では迷宮入り間違いはないけど、僕らにとっては解決かな？」

「大丈夫なのか？」

「署長は僕らの事を知ってる。だから、任せたよ？ 蓮君」

「フツ……任せておけ」

葉馬殿と別れてすでに数時間が経ち、日はすっかり落ちて夜となっていた。

そして、たどり着いた場所はとある神社の裏にある池。そこには、ボコボコと肥大化していく肉塊。

霊が集まってあんなになるとは、だがそれよりも……

「…………アレはオーバーソウルか？」

驚いたのは霊達がシャーマンの力を借りずに、オーバーソウル化してる事に驚いた。

『オーバーソウルに似て非なるモノだろう』

「疑似オーバーソウル……いや、オーバーソウルもどきか…」

すぐさま破壊したかったが…………

『助けんのか？』

呂布が位牌から現れて、話し掛けてくる。

そう、俺達が到着するより先に先客が居た。

そいつは黒い服とマント、そして鎌を手に肉塊に攻撃してる。

そして、そいつの仲間と思われる空を飛ぶ犬耳女。

おそらくは魔導師。

高町以外にも、この町に居たのは驚いたがそれだけだ。
俺には関係ない。

だが……

「魔導師という者共の戦いも見てみたい」

『そうか……』

それっきり、呂布は俺と一緒に魔導師の戦いを見学に入った。

▲蓮視点▲

▼フェイト視点▼

「ハア…ハア…」

「くっ…なんなんだい？ こいつ…」

「攻撃が効いてない……」

今、私は神社の裏でジュエルシードの暴走体と戦ってる。

戦ってるとはいっても、一方的に攻撃してるだけなんだけど……どれ
れもまったく効いてない。

「せっかく見つけたジュエルシードなのに……」

フォトンランサーを撃っても弾かれ、サイズモードで斬りつけても

硬く斬れず、魔力消費を無視してまで放った雷ですら……………

「嘘だろ？ フェイトの攻撃が……………」

でも……これだけ攻撃しても、未だ肉塊は肥大化を続けるだけで、反撃してこない。

もっとも攻撃手段が、あるのかさえわからない。

「どうしたら…………封印が……………」

「フン、魔導師と言えどその程度か」

「誰だいッ!？」

突然、後ろから声が聞こえてきた。

肥大化を続ける肉塊を警戒しながら、私は後ろを振り返る。

そこに立っていたのは、私たちと同じ年か年下の男の子だった。

▲フェイト視点▲

▼蓮視点▼

さて、やるとしよう。

魔導師と肉塊の間に入り、俺は方天画戟に呂布を宿しオーバーソウルを作る。

馬孫のオーバーソウルと形は酷似してるが、その一撃はゴールド

馬孫よりも強力なのだ。

「ただ肥大化し続けるだけの、オーバーソウルに脅威は無し……行くぞ。 呂布」

『応』

俺は具現化した呂布の鎧を柄の端へ持って行き、ソレを爆発させ肉塊に突貫した。

そして、肉塊は俺の攻撃範囲に入る。

「フツ!!」

方天画戟を振り上げ、一気に叩き下ろす。

肉塊は抵抗もなく両断されるが、即座に再生した。

「再生と肥大化か……」

だが、それだけではこの俺は止まん!! 俺はオーバーソウルに巫力を込めると、全身の筋力とバネで肉塊を細切れにする。

……その名も、 呂布無双!!

肉塊は再生せずに、無数の靈魂へと戻った。

そして、俺の目の前に暴走が収まった石が三つ浮いてた。

「……………」

拳を媒介に書文の簡易型无二打で、ジュエルシードを掴み立ち去ろうとしたら……

「コンノーー!!」

犬耳女が殴り掛かって来た……が、正直間が悪いとしか言いようがない。

俺はまだオーバーソウルを解いておらず、そしてオーバーソウルもどきとはいえ、一撃もダメージを負わせる事が出来なかった者。

「俺の敵ではないな」

方天画戟で女の拳を防ぎ、書文の簡易型无二打で反撃。モロに喰らった女は、仲間の下まで吹き飛ばす。

「アルフツー!!」

「うつ……ぐ……それを……わた……」

アルフと呼ばれた女は、仲間の言葉に答えずに立ち上がろうとしたが、その努力も虚しく気絶した。

簡易型の无二打とはいえ、起き上がれるとはな……。だが……やはり俺の敵ではない。

そう評価をし魔導師が、仲間を心配してる内に立ち去った。

▲蓮視点▲

今日の獲得ジュエルシード…… 3個。
獲得者…… 道 蓮。
なのは組、獲得ジュエルシード…… 12個。
フェイト組、獲得ジュエルシード…… 0個。
残り…… 9個。

↳第十五廻↳ もう一人の魔導師（後書き）

オーバーソウル形態の説明。

今回は蓮です。

馬孫のオーバーソウルは、シャーマンキングに出てきた初期型です。
オーバーソウルの色は金。

呂布のオーバーソウルは、馬孫とまったく似てる形となりました。
ただ、オーバーソウルの色は、金ではなく赤となります。

書文の簡易型オーバーソウルは、ただ拳が朱色に輝いてるだけです。

この作品は霊によって、オーバーソウルの色が変化するという後付け設定となります。

第十六廻 分岐点（前書き）

今回はとある人の分岐点。

第十六廻 分岐点

▼葉生視点▼

「いらつしゃい。みんな」

「お邪魔します」

今日はみんなで、すずかの家に遊びに来てる。いくらジュエルシード探しが大事だからと言って、友達を蔑ろにしたら駄目だしね。そして、俺らが来た時にはアリサが居て、あとはなのを待つだけとなった。

なのはが来る間、メイデン達は会話に華を咲かせ、俺と蓮は猫と遊んで時間を潰した。

「みゃゝみゃゝみゃゝ」

「鬱陶しい」

『ハッハッハッ…モテモテではないか』

蓮に群がる猫。それを鬱陶しくも思いながらも、頭を撫でたりと猫と戯れる蓮。それを見て、楽しげに笑う書文。

えっ？ 俺？ 俺は………

「フーッ!!」

「……………」

『お前……動物に嫌われる体質なのか?』

「知らない……」

俺が猫に近づくと猫は逃げるか、威嚇するかのどちらかで、まったく取り付く島もない状態だ。……………ネコ。

「相変わらず、嫌われてるわね」

「アリサさん家の犬は、懐いてましたね」

「うん。懐いてたって言っただけのかなあアレ……」

メイデンの言葉に、否定気味に答えるすずか。

すずかの家の猫には威嚇され、アリサの家の犬には押し倒されたり、顔をペロペロ舐められたり、髪を噛んで引っ張ったりと……………うん……。

「アレは懐くより、玩具にされてるってのが正しい。ちゃんと躰ておいてほしいよ」

「失礼ね!? ちゃんと躰てるわよ!!」

「本当に?」

「OK。喧嘩売ってんのね? あんた」

《コンコン》

アリサが袖を捲り俺に近付くと、扉が数回叩かれた。

さすがが返事をする、メイドさんがなのはを連れて来た。その

あと、メイドさんは立ち去って、なのははさすが達と雑談。

蓮は書文とクーと猫と戯れ、俺はアリサの腕をかい潜ったり、避けたりする。

しばらくアリサに構っていると、ユーノが突然林の中へ走っていく。そのあと、なのはが追い掛ける。

ふむ……。

ジュエルシードが発動した感じがしたので、おそらくはソレだろ。俺も追い掛けたいのは山々だが……この状況だとやばいかな？

『行けい。 葉生！』

！！

どうやって抜け出そうか考えてると、書文が話し掛けて来た。

『こちらは蓮や潤達に任せて行け』

蓮達を見ると、小さく頷いてくれた。

ありがとう。 とロパクで伝え、クーから得た技能を使いなのはを追う。

『葉生！ 下がれ！！』

「！！！」

なのはのそこへ行く途中、クーが突然指示を出し、その通りに動くと目の前の地面が爆発した。

「チイツ！！ 外したか」

土煙が晴れると、目の前にはオレンジ色の狼が居た。しかもかなりでかい。噛まれたら痛そうだ。むしろ痛みでショック死しそうだ。

『蓮が言ってた奴の仲間かもな』

「それが妥当かな……。 オレンジの髪の女性と、黒服の女の子は？」

『黒服だけ確認が取れました。 なのはと交戦中です』

「そつか…」

アルの報告に小さく答える。

相手は魔導師（狼だけど）でも、霊は見えない。 独り言をブツブツ言う危険人物にはなりたくない。

「何をブツブツ言ってるんだい？ 気持ち悪い」

.....泣けてきた。

「.....で？ 君、何？ 挨拶も無しに攻撃してきて.....礼儀がなつてないよ？」

「ハッ！ 敵に礼を尽くす義理はないよ！！ この状況で来たって事は、管理局かジュエルシードを、何かしらの目的で集めてる奴だろ？」

「もう半数は集めた」

「ほ、ほう.....つまりあんたを倒せば、残り半分ってわけか」

「持つてるの俺じゃないけどね。」

「出来るの？ 蓮に触れられなかった君らに」

「蓮？ まさか！！ アレはあんたの仲間だったのかい！！」

「フフッ.....」

「ちょうど良い.....横から現れてあたしらのもんを横取りした借りは、返させてもらうよ！！」

そう言つて狼は、俺に飛び掛かる。それを真紅に輝く槍で防ぐぎ、から空きの腹に蹴りを入れる。

「ガッ！！」

狼は吹き飛び、木にぶつかる。 うん、痛そうだ。 狼はむくりと体を起こして、唸りながらこちらを睨みつける。

「こんの……」

「まだ……やる？ 正直、早くなのは所へ行きたいんだけど……」

「行かせるかー!!」

俺の言葉に狼は吠えながら、また襲い掛かる。 迎撃しようと、O・

S・死朱呪槍を構える。

はい、此処で説明タイム。

O・S・死朱呪槍とはクー・フリーンをゲイボルクに憑依させ、具現化させたオーバーソウルだ。

形態としては、矛と柄の間には複数の棘がある。

《わからなければ、F a t e / E X T R A のクー・フリーンのゲイボルクと思ってね。 b y ハオ》

大きさは、普通の槍と同じだ。 O・S・星光之剣みたく大きかったら、簡単に懐へ入り込められるしね。

そもそも、O・S・星光之剣を出したあの時も、ドラゴン用に調整してただけだし……ほ、本当だよ？

とりあえず、そう言う事で説明終わり。

狼はすぐ目の前まで来ており、槍を薙ぎ払えばまた吹き飛ばせれる

状況だった……が、槍で払おうとすると狼は急に止まり、後方へ飛ぶ。

「？」

あの状況で止まった？

「フエイト？　そうかい……そいつはよかった。それじゃあ、私も撤退するよ」

狼は一人ブツブツ言い終わると、俺をひと睨みしたあと飛び去った。

「……………なんだったんだ？」

狼が去った方向を見て、数分ぐらい考えたあとなのはの所へ行った。

「なのは！」

「あ、葉生くん」

「何かあった？」

おそらく妨害にあったんだろうが、それにしても暗すぎる。

「ごめんね……」

「え？」

謝られた！？

「葉生くん達が集めてくれたジュエルシード……持って行かれちゃった」

「どれくらい？」

「……………」

まさか、全部なのか？

「まさか……………」

「1個」

《ズササササササ》

なのはの言葉に、コケた俺は悪くないと思う。

12個の内、1個ならまた取り戻せばいいし、何も問題はないと思うんだけど…………。

「とりあえず、戻ろうか」

「……………うん」

すずか達の所へ戻っても、なのはは表情を曇らせたままで、そのせいでなのはのお兄さんに、突っ掛かれたのは言うまでもないだろう。

「「シスコンも程々にな……………」」

まあ、クーと憑依合体して沈めたけど…………。

▲葉生視点▲

▼プレシア視点▼

「ふう……」

今、私は海鳴市の公園で涼んでる。

正直、アリシアが居る時の庭園を空けたくは無かったけど……。

「私に残された時間は、もう残り僅か……」

今更……アリシアを蘇らせたところで、いえ……そもそもジュエルシードで、アルハザードに行けるかどうか……。

「……………」

『隣……言いですか？』

突然、声を掛けられる。

そちらを見ると、一人の老人男性が居た。

「え、ええ」

『星が綺麗ですなあ』

「そうですね……」

『もし、違っていたら申し訳ないが……』

「なんでしょう?」

『病を患えてますか?』

「ッ!」

老人の言葉に驚く。

会って間もないのに、私の体に住まう病を見抜いたからだ。老人の方を見ると、老人は、全てを見透かすような鋭い目で、私を見ていた。

『長い間、医療に携わっていると、人が抱えてる病を見抜く目を持つてしまつてのう。まあ、老人のお節介です』

「……………確かにお節介ですね」

『ハハッこれは手厳しい』

「ですが……………もう遅いんです。私の病はもう……………」

アリシアを生き返らせずに、私がアリシアの所へ行くのも良いかもしれないわね。

『そうですか……………ならお節介ついでに、麻倉家へ訪ねてみては如何かな?』

「え?」

老人の方へ顔を向けると、同時に突風が起きた。

私は眼を閉じ、腕を顔の前まで持つて行き突風に耐える。

突風が収まったあと、老人が居た所へ眼をやるが老人はそこに居なかった。

「なん……だったの？」

今の出来事が、なんだったのかわからない。 だけどこれは私の分岐点だと、誰かが囁く。

▲プレシア視点▲

▼誣葉視点▼

『戻ったぞ』

「助かったぞい」

『しかし、アレだな……お人よしだなお前』

「今更じゃ」

さて、帰るとするかのう。

ワシは一度、あの女性が居る公園を見た。

そして、家へと足を進めた。

▲誣葉視点▲

今日のジュエルシード……1個。

獲得者……フェイト・テストロッサ。

なのは組、獲得ジュエルシード……11個。

フェイト組、獲得ジュエルシード……2個。

残り……8個。

ゝ第十七廻ゝ 温泉（前書き）

表現したい事を文章に出来ない。

く第十七廻く 温泉

▼葉生視点▼

「葉生くーん。そろそろ皆さんが来ますよー」

「はい」

今日は待ちに待った連休！ その連休を利用して、俺となのは、アリサ、すずかの家は二泊三日の温泉に行くことになった。

俺の家は家族が多く、最初は俺と母さん、父さんだけだったんだけど、高町家の人達やアリサ達が説得して、家の家族全員も温泉に行くこととなった。というか、なのはん家が率先して説得してたなあ……。なんでだろ？

まあ、考えても仕方ないし、今は温泉を楽しみにしよう。

『葉生、なのは達が来ましたよ』

と、どうやら皆が来たらしい。こっちも準備出来たし、行きますか…………。

「この度は我々を温泉に誘ってくださり、ありがとうございます」

「いえいえ……あの時のお礼がしたかったので……」

「本当に義理堅いのう」

「アハハハ……」

下に降りると、なのはの父さんと誣葉爺が話し合っていて、玉藻兄さんがせつせと荷物を車に乗せて……ん？

俺が周囲を見てると、高町家の車から玉藻兄さんをジーツと見つめてる人を発見した。確かあの人は、なのはのお姉さんだったかな……名前は確か……美由希さんだっけ？

▲葉生視点▲

▼美由希視点▼

今日はうちの……えっ？ これ葉生くんが一度やってるから良いって？ そうなんだ……うう、出番が取られた気がする。

まあ、やったもんはしょうがないね。

今、私たちはでっかい屋敷の前に居ます。此処が葉生くん家らしいんだけど、でっかいなあ……アリサちゃんやすずかちゃん達で大きい家は見慣れてるけど、こんな格式ある家みたいなのは初めて見る。

「おっきいね」

「そうね。 あ、鮫島に聞いたんだけど、麻倉家って昔は国を動かしてきた家系らしいわよ」

「なんか……凄いな」

私がぼーっと眺めると、すずかちゃんとアリサちゃんが麻倉家について話してた。 どう考えても、子供が喋る話題じゃないよね？ さっきの……

「でも昔はって、今は？」

「今は政治から離れて、医療界に幅を利かせてるみたい。 今度、医療関係に手を出そうと考えてるパパも、麻倉家が使う技術や技能を知りたがってたわ」

へえーって、子供らしい会話しよう……。 と、アリサちゃん達の会話を聞きながら、また麻倉家を見ていると中からカッコイイ男性が……。

むむむ、なんとというイケメン。 ちょっとタイプかも…… 葉生くんのお兄さんかな？

チラッと、恭ちゃんが乗ってる車を見る。 そこには恭ちゃんと恭ちゃんの彼女であり、すずかちゃんのお姉さんの忍さん。 そしてそのメイドのノエルさんとファリンさんが居た。 というか、ファリンさんも顔を赤く染めて、私が見てた男の人を見てるけど……
…あれ？ ライバル？

「ねえ……」

「え？ あ、な、何？」

私が考え事をしてると、葉生くんが声を掛けてきた。　　というか、髪長いなあ……人の事言えないけど……

「玉藻兄さんを見てたけど、どうかしたの？」

「ん、いや、どうもしてないよ」

玉藻さんって言うんだ。　覚えとこ……あ、そうだ。　葉生くんに玉藻さんの事聞こ」

「ねえ、えつと玉藻さんは、葉生くんのお兄さんなの？」

「ん？　んゝ実の兄ってわけじゃないよ。　玉藻兄さんは、俺が小さい頃にやってきた居候」

つまりは麻倉の人じゃないと……。

「気があるなら声を掛けたら？　確か玉藻兄さんはフリーだったよ。それに優しいし良物件って奴だよ」

ブッ！　な、なななな何を言うかなあ？　葉生くんは……それに良物件って……

「あ、ありがとう……機会があれば、ね」

「なら、ファリンさんを焚き付けよ」

・・ガシッ

そう言って、立ち去ろうとする葉生くんの肩を捕まえる。

こ、この子は……侮れない。

「何？ 根性なし」

・・ザクッ

グハッ！！ 葉生くんの言葉に私のHPはすでに1。あと一撃喰らったら死ぬ。というか、葉生くん……結構辛辣だね？

「まあ、声を掛けるなら早めにした方がいいよ」

そう言って、葉生くんはその場から立ち去った。……………こ、今回のところはアドレスを聞ければ……おや？ メモ用紙？

ふと……膝の上に目を向けると、一枚のメモがあつた。内容は以下の通り……

とりあえず、アドレスを聞いて終わりなんて考えてるなら……ファリンさんを……ね？ byハオ

……………心を讀まれてる！？

▲美由希視点▲

▼葉生視点▼

さてと、いつまでも麻倉家で雑談つてのも話が進まないから、一気に旅館へ行こうー！

《所謂、キングクリムゾンだね》

久しぶりに、ハオの声を聞いた気がした。

そして、旅館。

「あ、此処は……」

旅館に着くと、父さんが何かを思い出したように声を上げた。

ん？ どうしたんだろ？

「此処がどうかしたか？ 葉馬」

「いえ、一度アレを探しに来たので」

ああ、成る程……なら、此処にはもう無いかな。 良かった良かった……今日はゆっくりしたかったしね。

部屋について、俺はすぐに男湯に向かう。 潤さん達が、何か企んでるみたいだしね。

「お、葉生じゃないか」

「あ、恭也さん」

脱衣所に行くと、恭也さんと玉藻兄さんに父さんが居た。 というか、この人達……体格良いなあ……まさに漢って感じだよ。

「む……」

「おや、蓮くんもお風呂ですか？」

「まあな……」

実を言うと、蓮も結構鍛えられた体をしてるんだよなあ。 俺も鍛えてるけど、まだまだって感じだしなあ……。

まあ、そんな事はさておき……温泉に入る。

えつと……ここの効能は血圧の低下ねえ。 あまり意味が無いかな……。

《巫力を流したらより効果が出るよ》

………よし、やってみよう。

ハオの指示通り、手を湯舟に入れて巫力を流し込む。 その時、思いつきりしたのがいけなかったのか、温泉が強く輝き出した。

《やり過ぎだ！ 馬鹿！！》

いや、だって……

「なんだ！？ さっきの光は！？」

体を洗っていた恭也さんが、こちらに振り向きさっきの事を聞いてくるが、なんとか誤魔化す……まさか「効能を上げる為に、巫力を注いだ」なんて言えないしね。

そして、体を洗い終わった蓮が湯舟に浸かると、異変が起きた。

「ぬうああああああああああ！！ ち、血がああああああああ！！」

『ぼ、坊ちゃまあああああああ！！？』

「お、おお……」

蓮の体から血管が浮き出て、ドクン、ドクンと脈動を……

《説明してないで助ける！ このままじゃ、蓮が死ぬぞ》

そ、それはやばい……。

ハオの言葉を聞いて、即座に蓮を湯から出そうとするが、蓮の体が熱くて触れない。

まるで、熱した鉄のようだ。

- ザバアッ！

「大丈夫か？ 蓮くん？」

結局、あのあと玉藻兄さんが蓮を助けた。
今は、玉藻兄さんの治療を受けて大人しくしてる。そして、俺は
と言つと…………

「聞いておるのか！？ 葉生！！」

「は、はい…………」

誣葉爺に、めっさ怒られてます。 まあ、これは俺の責任だからな
あ。 あとで、もう一度蓮に謝る。

うん？ 温泉？ あれなら父さんが巫力を流し、俺の巫力を相殺さ
せてたから、もう安全だ。 ただ、相殺しきれずに多少は効能の力
が、上がったけどね。

▲葉生視点▲

▼玉藻視点▼

蓮くんの治療を終えて、僕は館内を歩いている。

「にしても……葉生くんに参ったものですね」

まさか、巫力を温泉に流し込むなんて……何気に水行の術を使ってるし……流石は、大陰陽師・麻倉 葉王の子孫。陰陽道には言霊と言つのもありますし、やはり《はお》という名が彼に力を与えてるのだろうか……

《それもあるけど、僕の存在が彼の魂に影響してね……。それと、僕が陰陽術を教えてるってのもあるね》

「……」

聞き覚えのある声に振り返ると、着物（といっても浴衣に近い）を着た葉生くんが居た。

『玉藻！ 気をつけよ……。こやつ、あの葉生坊ではない』

僕の持霊である羽衣の狐（先祖の母）が、姿を現して葉生くんに似た魂を警戒する。

羽衣の狐が言わなくても、対峙しただけでわかる。非才なこの身では到底叶わないと、頭が魂が理解する。

《いかにも、僕は葉生じゃない。シャーマンキングだ》

「『なつ！？』」

シャーマンキング……伝承で聞いた事がある。全知全能の存在。

すべての霊が集まる場所。 精霊の中の精霊……精霊王グレート・スピリッツを手にした者の総称。 ある者は彼を救世主と呼び、またある者は彼を神と崇める者。

「し、失礼いたしました。 シャーマンキング様」

『ご無礼を……』

僕と羽衣の狐は頭を垂れ、シャーマンキング様に謝罪をする。

《別に気にしてないよ。 ほら、頭を上げなよ。 今日には僕のせいで、葉生が迷惑を掛けたね。 次からは気をつけるよ。 それじゃあね》

そう言つて、シャーマンキング様は音もなく姿を消した。 ……
というか、葉生くんが時々見せる不思議な行動は、シャーマンキング様が関係してたわ……。

『葉生坊の交友関係が気になった……』

それは僕もだよ。 何の縁があつたら、シャーマンキング様と交友が持てるのだろうか……。

▲ 玉藻 視点 ▲

今日のジュエルシード…… 0個。

獲得者…… 無し。

なのは組、獲得ジュエルシード…… 11個。

フェイト組、獲得ジュエルシード…… 2個。

残り
.....
8
個。

ゝ第十八廻ゝ 卓球（2011/04/25加筆修正）（前書き）

さあ、張り切って行こう！（何処に？

第十八回　卓球（2011/04/25加筆修正）

▼玉藻視点▼

引き続き、私視点で行きます。

シャーマンキング様に出会ったあとは、特に何もなく皆が居る広間でご飯を頂いてます。

いやあ……美味しいですね。　この天ぷら。

「どうだろう？　みんな……このあと卓球大会でも」

各々、料理を味わい、または話し合ったりしていると、土郎さんがこのあとやることを提案してきた。

卓球大会……本来なら温泉に入ったあとにするのが、一般的だろうけど……汗を流したあとに、また汗をかくという矛盾行為はどうなのだろうか？　その点、土郎さんが提案したのは温泉に入る前、終わったら卓球大会でかいた汗を流せる。　うん。　合理的だ。

「卓球大会か……フツ面白い。　葉生！！　この俺が引導を渡してくれる！！」

卓球大会にいち早く食いついた蓮くんは立ち上がり、葉生くんを指しながら打倒宣言。

それを葉生くんは……

「いいいぜ。　英雄と呼ばれた力を見せてやる」

いつの間にか、クランの猛犬と呼ばれた英霊と憑依合体していた。
やる気満々だね……クーさん。

「なっ！？ 貴様！！」

蓮くんも葉生くんが、憑依合体してる事に気付く。 とうか、クーさんは卓球を知ってるのだろうか？ まあ、そんなこんなで卓球大会スタート。

最初は、葉生くん（クーさん）VS 恭也くん。

「頑張れ〜。 恭也〜」

「……「葉生^{くん}も頑張れ〜」……」

忍さんが恭也くん^に声援を送り、負けじと葉生くんのジャンヌちゃん達が声援を送る。

「な、なのは！？ 何故、兄の俺じゃなく……こいつに！？」

葉生くんを応援してるジャンヌちゃんの中には、なのはちゃんが居る事に恭也くんは驚き、そして葉生くん^に殺気を籠めて睨む。 それを葉生くんは、飄々と受け流してる。 まあ、中身はいくつものの戦をくぐり抜けてきた、英雄なのだから当然だろ。 とうか、何故卓球に殺気が……。

「それでは……始め！」

士郎さんが開始の合図を取ると、恭也くんは高速サーブを放つ。それを葉生くん（とは言っても、クーさんがやってるんだけど）は、余裕を持って打ち返す。

- カコンツカコンツカコンツカコンツカコンツカコンツカコンツカコンツ……スパンツ!!

しばらくラリーが続いたが、葉生くんのスマッシュが決まり、葉生くんが一点先取。　　というか……卓球をする英雄って凄いシールだ。

「あ、あの……」

「はい？」

私がいろいろと考え事をしていると、美由希さんが声を掛けてきた。彼女とは面識もなく、当たり前だが話した事すらない。　　声を掛けられる理由が、わからない。

いや、まあ……各家庭の保護者や葉生くんといった子供達と親睦を深める場なのだから、声を掛けられても不思議ではない。　　だけど、顔を真っ赤にしてまで怒らせるような事をしただろうか？　　もしや、自分が気づいてないだけで、いつの間にか粗相を？

『はあ……やれやれ玉坊の春はまだまだじゃな』

なんですか？　ご先祖様？　春？　今は5月……もうすぐ夏になりますね。　　というわけで、今はギリギリ春ですよ？

『はあ……』

？ 変なご先祖様ですね。

「あの、聞いてます？」

「っと、これは失礼しました。 少し考え事を……差し支えなければ、もう一度お願いします」

『やれやれ……せつかく年頃の女性が勇気を持って……』

無視しましょう。 また聞き逃しては、彼女に悪いですからね。

「携帯のアドレスを教えてください」

「ええ、構いませんよ」

そう言つて携帯を出し、赤外線通信でアドレス交換。 世の中便利になりましたねえ。

「あ、ありがとうございます」

「いえいえ」

《ボンツー!!》

ニコツと優しく微笑むと、美由希さんから何か爆発するような音が…… 大丈夫でしょうか？ 顔も赤いですし……。

「青春じゃのう」

「いいことです」

誣葉様、葉馬様が思い思いの言葉を言う。 どういう事でしょうか？ 若輩の身の私には、まったくわかりません。

「勝者、葉生くん！」

おや、そうこうしてるうちに葉生くんが、勝ちましたね。 流石は英雄と言った所でしょうか。

「あの……た、玉藻さんは普段何をしてるんですか？」

「そうですね。 平日は大学で、休日は葉馬様と山登りですかね」

「へえ……山登り」

「はい」

と、なんらたわいのない会話をしつつ、私は次の試合を見るのであった。

▲玉藻視点▲

▼プレシア視点▼

変な老人に出会ってから、私はまず麻倉家を調べた。 すると、出てきた資料は目を疑うモノばかり、「シャーマン」「日本を裏から

支える家系」「奇跡を起こす医者」など。

特に「シャーマン」というのが、馬鹿らしい。　霊媒師だのなんだのと、非科学的だ。

「だけど……アルハザードに行こうとしている、私が言える事じゃないわね。　シャーマン……彼らの資料が、これだけでは少なすぎるわ」

《なら、僕が教えようか？　プレシア・テストロッサ》

「……誰!？」

《O・S・グレート・スピリッツ!》

頭に響く声と共に、ドンツと何かが現れた音がした。　音がした場所は庭園。　即座にモニターを出して、庭園を見るとそこには巨大な何かが庭園の前に居た。

《君らが僕を認識するにはO・S・が必要だね。　まったく、魔導師と言うのはめんどくさいモノだよ》

「な、なんなの？　貴方は？」

《僕はシャーマンキングだ。　シャーマンの事を、教えようと思ってるね。　言っておくけど、僕は忙しい身だね。　一方的に話すから質問はやめてくれ》

そう言って、シャーマンキングと名乗った巨大な何か……ん？　アレは……モニターを操作して、巨大な何かの中心を拡大する。　す

ると、そこにぽつんと一人の男が居た。

彼は、私が自分を見つけたのを見計らったように、シャーマンについて説明し始めた。

▲プレシア視点▲

▼フェイト視点▼

今日は海鳴市から、少し離れた場所でジュエルシード集めをしてる………のだけど。

「見つからない」

「げ、元気出しなよ！？ 大丈夫だって！ きつと見つかるよ！！」

ここ何日かジュエルシードを搜索するも、空振りばかり……手に入れたのは、先日白い服の女の子から奪ったのと、猫を大きくしたジュエルシードの二つ。

近い内に母さんに報告しに、時の庭園に帰らなきゃいけないけど、手に入れたのが二つだけだなんて、あまりにも少なすぎる。せめて、あと二つは手に入りたい。

《シュンッ》

「「！！」」

突然、私の前にモニターが現れた。向こうに映ってるのは……

「なんの用だい！ フェイトは、今あんたが集めろと命令したジュエル」

「フェイト……」

「母、さん」

「麻倉 葉生を私の前に連れて来なさい。これは、ジュエルシードよりも優先させるのよ」

「あさくら……はお？」

「そうよ。特徴や映像をバルディッシュに送るから……それじゃ」

《ブツン！》

モニターが消えると、同時にバルディッシュがデータが来たことを知らせる。母さんに無視されたアルフは、「いったいなんだってんだい。ジュエルシードより優先って」と、ブツブツ言ってる。

とにかく、今は母さんから送られてきたデータを見よう。

「バルディッシュ」

『イエッサー』

私の呼び掛けに、バルディッシュはモニターを出して、送られてきたデータを私に見せた。

「髪が長いけど……女の子？」

「ん？ アレ？ こいつ……」

後ろから覗き見るように、アルフはモニターを見て何かを思いだそうとしていた。

もしかして、知り合いなのかな？

私はアルフが思い出すのを待つてると、アルフはようやく思い出したのか、「アーッ！！」と大きな声を出した。

「こいつ！ あの時の……」

「知ってるの？」

「知ってるも何も、この間戦った相手だよ」

「そっか……」

確か、ジュエルシードを半数集めきつてたんだね。母さんの狙いも、きっと彼が持つてるジュエルシード。でも……それだと、他のジュエルシードを無視していい理由にはならない。まあ、とにかく彼を連れて来ればいいか。

▲フェイト視点▲

▼葉生視点▼

「優勝は蓮くん!!」

負けた……。せっかく、決勝まで行ったのになあ……。クーが……。

『ま、そこそ楽しめたし、良しとするか』

『良い余興だったぞ。褒めて遣わす』

『おめえを喜ばせる為に、やってねえよ』

「まあまあ……」

ギルの言葉に過剰に反応するクーを抑えて、俺は皆の輪から抜けて外へ出た。

外はシンツと静まっており、空を見上げれば星がよく見える。

「静かだなあ……」

「そうだね」

「ん？」

俺の独り言に、後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。後ろを振り向くと、なのはの栗色の髪をちよつと薄くし、長髪の女の子……。俺の許婚の一人、さっちゃんが居た。

「ついて来ちゃった」

「まあ、良いけどね」

さっちゃんは俺の横に来て、空を見上げれる。それに釣られ、俺もまた空を見上げた。

「綺麗だね……」

「そうだな」

短い会話。そもそも、さっちゃん……いや、他の女の子ともそうなんだけど、何を話したら良いか迷う。というか、話題が無い。

彼女達からしてみたら、俺はヘタレでどうしようもない駄目男……なんだろうなあ……。マリーちゃんは俺の事、様付けで呼んでるけど……というか、なんで様付け？ まあ、いいか。

「そっいえば葉生は、たまに陰で独り言を言ってるけど……何と話してるの？」

「シャーマンキングと話してる」

「へえ」………「え？」

そろそろかな……

「えええええええええっ！！」

ちょうど両手で耳を塞ぐと、さっちゃんが大きな声で叫んだ。う

ん。俺の鼓膜は守られた！！

まあ、驚くのも無理はないだろうね。シャーマンにとって、シャーマンキングは神そのものと言っていいし……。さっちゃんの気持ちはわかるよ？ うん。

「シ、シャーマンキング様と知り合いなの！？」

「うん。本人は忙しいって言うてるけど、俺から見たら……暇そうに見える」

毎度毎度……俺に話しかけて来るし、猫にたかられてるし、前は自分の母親に甘えてたしねえ。ほんと、何してるんだろ？ ハオは……。

「くしゅんっ」

「ん？」

物思いに耽っていると、隣から小さなくしゃみが聞こえた。

どうやら長居しすぎたみたいで、身体が冷え切ってしまったらしい。

「戻ろうか？」

「うん」

さっちゃんに戻ろうと提案して、俺達は来た道に戻って旅館に戻った。

「身体が冷めきってるから、もう一度温泉に入って寝なよ？」

「うん。そうする」

そう言っ、部屋に戻るさっちゃんを見送り、俺も部屋に戻った。

そして特に事件らしい事件もなく、温泉旅行は終わった。

あ、そうそう。 美由希さんと玉藻兄さんは、この温泉旅行中……
美由希さんが小さな勇気を振り絞り、告白して恋仲になったらしいよ。

いやあ……ファリンをけしかけるつもりは、本当はなかったんだけど、僕が（・・）美由希を追い詰めたら告白だもんなあ。ほんと、人間って凄いやね♪

▲葉生視点▲

く第十九廻く 蘇生・前編（前書き）

長らくお待ちしましたあー。
転生者はシャーマン更新です！

第十九廻　蘇生・前編

▼葉生視点▼

温泉旅行から数日が経った。

学校が終わってジュエルシード探してるも、一向に見つかる気配が無い。

まあ、残りのジュエルシードは8個。

この広い町で、早々見つかるわけはないんだけど……それは普通の搜索ならの話だ。

こちらは、霊にまで協力してもらっている。

それでも見つからないとすると、いよいよ手詰まりなんだが……。

「どうしたもんか……」

『もうこの変に無いとすると、あとは海しかねえよな……』

クーの言う通り、町に無いなら海。

しかし、海と言っても広い。

霊の協力があっても、見つけるのに時間が掛かるはず……。

「一旦、なのは達と合流してユーノにもっと効率の良い探し方がないか、聞いてみよう」

『あいよ』

そうと決まれば、早速合流地点へ向かおうとした時、結界が展開され閉じ込められた。

「これは……」

『ん？ 葉生！！』

「何！？」

クーが俺の名を叫ぶと同時に、ジュエルシールドが暴走するのを感じ、そこを見ると光の柱が立っていた。

「クー！」

『応よ！』

俺はすぐにクーを人魂モードにして、ゲイボルクにクーを宿す、するとゲイボルクは朱く輝き刃のすぐ下に、複数の棘とげが現れる。

「O・S・死朱祝槍ししゅこめやり」

戦闘準備完了！ さて、すぐにあちらへ向かうとしようかね。

▲葉生視点▲

▼フェイト視点▼

温泉地で母さんから、ジュエルシールド搜索から麻倉葉生って人を連れて来るのを、優先しなさいと言われて探してるんだけど、まったく見つからない。

アルフも匂いや魔力を辿って探してるらしいけど、会ったのは一回きりだから匂いもうる覚えで、魔法を使われなかったから魔力も感知出来ないみたい。

「あー、もう！ イライラするねえ。来なくて良い時は来て、来て欲しい時は来ないなんて」

アルフの言う通り、これならジュエルシードを探してた、方が……

……

「あ……」

「ん？ どうしたんだい？」

そうだ。 そうだよ。 あの人もジュエルシードを集めてるなら……

……

「ジュエルシードを見つけて、暴走させればやって来る！」

まあ、ジュエルシードがある所に行けば、暴走させなくても暴走を待てば良いんだけどね。

「さっすが、私のご主人様♪ それじゃあ、魔力を解放して無理矢理暴走させるかねえ」

「うん！」

そうと決まれば……

「つと、ちよーつと待った！」

「え？」

バルディッシュを掲げて、魔力を解放しようとしたら、突然アルフが待ったをかけてきた。
どうしたんだろう？

「フェイトは体を休めて、私に任せなって」

「でも、魔力解放だよ？ きついよ？」

「だあいじょうぶって、ほら、フェイトは下がって」

アルフがそう言うなら………任せちゃおうかな………

「じゃあ、よろしくね」

私は、アルフの邪魔にならないように後ろへ下がった。

「ハアアアアアアアアアア！」

アルフからオレンジの魔力光が滲み、次第にバチバチと電流みたい
に弾ける。

そして、各所にオレンジの雷を落とした。

《ズガアアアアアアアンツ！！》

何度か雷が落ちて、ジュエルシードが暴走した。

「あそこだよ」

「うん」

私とアルフが急いで、ジュエルシードの所へ行こうとした時、ジュエルシードの近くで結界が張られた。

「あっちの方が近いみたいだね」

「関係ないよ。 私達の目的は麻倉 葉生って人だけ」

何度も言ってるけど、今回はジュエルシードは要らない。

「どうやら、ジュエルシードの下へ行かなくても良いみたいだよ」

アルフが見てる方を見ると、そこには朱く輝く槍を持った男の子が、ジュエルシードの所へ走っている。

「……………ねえ、アルフ」

「なんだい？」

走ってはいるけど……

「あの子……生身にしては速いような」

「どうせ魔力で、身体強化してるんじゃないのかい？」

そっか……そうだね！ 生身の人間が魔力の恩恵も無しに、あんなに速く走れるわけないよ！

私がそう自分に言い聞かせてると……

『いえ、魔力を感じられません』

バルディッシュから、とんでもないお言葉を頂いた。

「じゃあ、何かい？ あいつ素で走ってんのかい？ んな、奴居るわけ！！」

でも、私達の前に居るんだよね。

『とりあえず、足を止めた方がいいかと……』

「そ、そうだね」

このまま行かせたら、連れていく事が出来なくなる。

私はすぐにフォトンランサーを精製して、一発だけ彼の足元へ撃つた。

「……誰だ！？」

「久しぶりだねえ」

アルフが彼に声を掛けると、彼は驚いた顔をしてこちらを見た。

「お前は……えつと誰？」

《ズルツ》

.....へ？　もしかしてアルフの勘違い？　そうなる
私は、彼に外したとはいえ魔法を撃った事に.....ええっと、とりあ
えずそこでコケてるアルフに聞こう。

「ちょ、ちよつとアルフ！　どういうこと！？」

「あたしだよ！　あたし！！」

私の質問に答えず、アルフは狼の姿へとなった。　それを見た彼は
また驚いた顔を見せ、そして何かを思い出したかのように手をポン
ツと合わせる。

「ああ、君かあ。　それで、なんの用かな？　早くしないとジュエ
ルシールドがなのはに取られるよ？」

こちらの目的が、変わった事を知らないから言えることだね。

「今日はおんたに用があつて来たんだ。　ジュエルシールドはついで
に取ればいいかなー程度だよ」

アルフが私に代わつて、用件を伝えるが信じてもらえてないのか、
顔をしかめながらも隙なく槍を構える。

別に戦いに来たわけじゃないんだけどなあ。　とりあえず、言うだ
け言ってみようかな.....。

「突然で申し訳ないけど、私と一緒に母さんに会って欲しいんだ」

「へ？」

私の言葉を聞いて、彼は間の抜けた声を返して来た。 私になにか変なこと言ったかな？

▲フェイト視点▲

▼葉生視点▼

突然、攻撃してきた女の子に母さんに会ってくれと言われた。

理解が出来ない。 まさか一目惚れしたから親を紹介……なんてのは絶対に有り得ない。

俺の容姿はハオと同じで、髪は長く適度に手入れした程度で美しいというわけでもない。

身体の方は孫明に鍛えられてるとはいえ、服の上からは鍛えられた身体は見えないから、彼女が低い確率で筋肉フェチだとしても絶対にわからない。

わかったらわかったで、俺よりももっと良い体格をした人が居るはずだ。

シスコン（恭也）とか、親バカ（土郎さん）とか、白衣を着た大学生（玉藻兄さん）とか、アホ（父さん）とか、トンガリ（蓮）とか…… 何故俺なんだ？

いや、待てよ…… そもそも親に紹介するとかではない？ うん、本人に聞いてみよう。

「何故、君の親に会わないといけないんだ？」

「？ 母さんが貴方に用があるって」

……… だったらそう言おうよ。 って、待てよ……… 何

故彼女の母親が俺に用があるんだ？

《やれやれ、うたぐり深いといかなんというか……ボクがキミを連れて来いと言ったんだよ》

ハオ！？

《彼女の母親は、神クラスのシャーマンに会いたがっていたからね。ちよっとした気まぐれで、助言してやったのさ》

なるほどね。しかし、神クラスならメイデンの方が……

《キミの修行にもなるから、キミを選んだんだよ》

まあ、ハオがそこまで言うなら………つか、拒否権ないよね？

《勿論♪ 拒否したらキミの中に居るボクを表に出して行動させる》

なんという理不尽………

「わかった。行くよ」

「ありがとう……あ、自己紹介がまだだったね。私はフェイト、フェイト・テストロッサ」

「俺は麻倉 葉生だ。よろしく」

俺はオーバーソウルを解いて、フェイトに手を差し出した。

フェイトは頭を傾げるが、数秒としない内に理解したのか俺の手を握った。

フェイトと握手をしたあと、フェイトと一緒にフェイトの母さんが居る庭園（って言うらしい）に移した。

そこは太陽も月もない、次元の中にポツリと庭園があるだけの世界。人が暮らすには、たった三人という家族が暮らすには寂し過ぎる世界だ。

『フンッ…気に入らん』

『この庭園に漂う、怒りと悲しみと絶望……負のエネルギーが蔓延してる』

『こんな場所で暮らしていけば、精神的にやべえんじゃないの？』

一緒にいて来たギル、アル、クーがこの世界で感じた事を口にする。

確かに、こんな場所で暮らしていると精神は蝕まれ、身体を乗っ取られそうではあるね。

こんな、半地縛霊化した悪霊達が居る場所に居たら……。

「まるで……巢だな」

「え？」

「なんでもないよ。それより、早くキミの母さんの所へ行こう」

彼女には悪いけど、こんな場所に一秒でも居たくないからね。

「う、うん……こっちだよ」

そう言つて、庭園の奥へと進むフェイトを見て、見えてない人と見える人の差を思いやられる。

フェイトは見えてない。　けど、俺は見える。　悪霊達に向かって歩くフェイトの姿を……。

『葉生……』

「行こう……みんな」

アルの言葉を遮るように、俺はフェイトの後を追った。

「母さん……連れて来ました」

「ご苦労様、フェイト」

玉座の間……とは言い難いけど、なんとなくそんな感じの場所に、黒髪のフェイトを大人にした感じの人がそこに居た。
大量の悪霊に包まれて……

「ようこそ、時の庭園へ」

「どうも、自己紹介は必要なさそうだから言わないけど、そっちは名乗って欲しいな」

ハオ、見てるんだろ？

「それもそうね。私はプレシア・テストロッサ……そこに居るフエイトの………母親よ」

フエイトの母親に話し掛けながら、この状況を見てるであろうハオに話し掛ける………が、一向に応答が無い。

おい、ハオー？

《あの子なら、今席を外してますよ》

この声は………麻ノ葉^{あさは}さん？

《はい》

と、麻ノ葉さんを知らない皆さんに……。

彼女の名前は麻ノ葉と言い、あのハオのお母さんだ。

ハオを呼ぶ時、たまゝにハオが居ない場合があり、その時は麻ノ葉さんが代わりに答えてくれるのだ。

まあ、麻ノ葉さんと楽しく会話していると、嫉妬したハオが乱入してくるんだけどね。

《今日はどうなような用件ですか？》

あ、いえ……ハオに従って彼女に着いて来たは良いんですが、どんな事をすればいいかわからなくて……

《ん、確か蘇生術を教えると言ってたからソレだと思っけど……その場所、よくないわね》

蘇生術って……まだそのレベルに達してないよ！！

麻ノ葉さんの言葉を聞いて、俺は一瞬耳を疑った。確かにハオはプレシアさんが神クラスのシャーマンに会いたがってたと聞いたけど、まさか蘇生させられる事になるなんて……確かに修行には持つて来いだろっけど……。

「シャーマンの貴方に聞きたいのだけど……」

と、混乱ばかりしてるわけもいらないか……。

いつの間にか周りには誰もおらず、俺とプレシアさんだけになっていた。

「何？」

「シャーマンには、死んだ人を生き返らせる術があると聞いたわ。それは本当なの？」

確かにあることはある。それなりのレベルを要すけど、しかし……

…死者の蘇生なんてモノは自然の摂理に反する。

まあ、転生者……生まれ変わりの俺が言っても説得力の欠片もないけどさ。

さらに言えば修行で何度も地獄行って、終わったら蘇生してもらってるし……。

「確かに蘇生術は存在する。俺も蘇生術を身につけてるシャーマンを何人が知ってるし……」

メイデンとか、さっちゃんとか、潤さんも蘇生術を習ってたから使えそうではある。

あとは、母さんに婆ちゃんに誣葉爺かな……うん、結構居るね。

《蘇生するにしても、場所が悪すぎてきつと失敗します。この場を浄化するか、別の場所でない……》

麻ノ葉さんが、蘇生術に関しての知識を教えてくれる。

ハオレベルなら成功するらしいけど、普通のシャーマンではこんな場所で蘇生させると別の魂が割って入り、蘇生が失敗するとか……無害な霊ならあまり問題ないらしいけど………悪霊だしねえ。

此处に居るの。

「貴方は………」

「ん？」

「貴方は出来るの!？」

どうだろう？

《出来ますよ。巫力は息子以上で、シャーマンとしてのレベルも神クラスに届いてるし……》

いつの間に……まあ、いいや。

「出来ます」

麻ノ葉さんのお墨付きを貰い、プレシアさんの問いに答えると、プレシアさんの瞳に光が宿った。

「だったら、今すぐアリシアを蘇生させて頂戴！」

アリシア？ 誰だろう？ まあ、プレシアさんのあの反応から、大切な存在だと思うし……ハオも蘇生の修行をさせる為に呼んだんだろうから、此処は頷いておくべきだね。

「良いですよ。では、遺体を持って来れますか？ 持って来れないでしたら、こちらから……」

「連れて来るわ。少し待ってて」

プレシアさんの言葉に「わかりました」と答えると、プレシアさんは奥へと消えて行った。

さて、ああは言ったモノの蘇生術なんて、なんとなくしか知らないしなあ。

麻ノ葉さんは知ってます？

《私もよく…》

《此処からはボクが指導するから、母さんは見ててよ》

タイミング良く、ハオの声が頭に響いた。

それに伴い、先程まで感じてた麻ノ葉さんの気配が消える。

むう…もっと話していたかった。

ハオの魂が俺の魂に影響を与えてるのが、麻ノ葉さんの声は落ち着くのだ。

ハオはいきなり厄介事に巻き込むから、いつも気が気でない状態。精神的にとっても宜しくない存在なのだ。

何が言いたいのかと言うと……

チエンジで！

《焼き殺すぞ、人間^{くず}》

すみません、調子に乗ってました。

《では、悪霊退治からしておこうか？ 失敗は嫌だろ？》

まあ、確かに失敗より成功した方がいいしなあ。

《それにプレシアの体を蝕む病魔も……》

ハオの言葉に、やっぱりと言った納得の感情があった。

これだけの悪霊が住み着いて、人間が健康で居られるはずないしな……と、なればフェイトも？

《あの娘なら大丈夫だよ。今のところはね》

そうか……と、そろそろプレシアさんが来るところだね。

《それでは一気に除霊だ》

「浄化」

一つの言葉に力を乗せて、言葉は言霊となって力を発揮する。
言霊は徐々に力を増していき、玉座の間から悪霊達を浄化し始めて、次第に庭園を一つ包み込んだ。

浄化が完了して、薄暗かった庭園は若干光が差し込み明るくなった。
やっぱり、人が住むとなるとこれくらいは無いとね。

しかし、このまましておくとか数ヶ月後には元通りに悪霊の溜まり場になること間違いなし、というわけであの世へ続く道を作っておく事にした。

「此処の雰囲気が変わったみたいだけど……何かしたかしら？」

あの世への通り道を作り終えたあと、プレシアさんが遺体が入ったポットを浮かせてやって来た。

「悪霊がわんさか居る場所で蘇生なんてしたら、失敗するから悪霊達を浄化してあの世へ送っただけだよ。まあ、プレシアさんにはわからない事だから、気にしないでいいよ」

むしろ魔導師がわかったら、俺の立場的にアレだしねえ。

「そう……」

「あ、それと……ハオが貴女に話があるって」

「うん、部屋に居るってさ。蘇生は話が終わってからって」

少し考えたあとプレシアさんは、また奥へと消えた。その間、俺は遺体を調べるんだが………裸はどうかと思う。

というか、遺体調べるの終わった。

341

.....

.....

.....

.....

...

遅い。 ちょ、え……何、この遅さ。
ちよつと話すだけじゃないの？ もう8時間だよ！？

さらに2時間経過。

ようやく、プレシアさんとハオがやって来た。　フェイトとアルフを連れて、さらに詳しく言うのとニコニコ笑顔のプレシアさんが、恥ずかしそうに俯いてるフェイトの手を握って……ナニガアツタ？

そしてプレシアさんがこちらを見て、一瞬驚き汗をたらだら流し始めた。

はて？　一体どうしたと言っただろうか？

▲葉生視点▲

▼プレシア視点▼

あの子（葉生）からハオが話があると言われて、私の部屋に行った。そこで待っていた話はフェイトを人形ではなく、人間として、自分の娘として扱えとの事。

最初は、くだらないふざけた話だと思い怒鳴り暴れた。

ハオには効かないとわかりながらも、魔法を放った記憶がある。

それから30分でハオに説き伏せられ、部屋で待機してたフェイトとアルフを呼び全てを話した。

当然、アルフは怒ったがフェイトは私を許してくれた。

少し、優しくすぎるんじゃないかしら？　母さん、将来が心配だわ。

とまあ、それはさておいて……そのあとはフェイトと今まで話しかつてると、ハオがそろそろ戻ったら？　と声を掛けてきた。

最初はなんの事かわからずに玉座の間へ向かったら、そこにはボーンと立ってるあの子（葉生）とアリシアが入ったポット……………

……素で忘れてたわ。

大分待たせたみたいだし、怒られても仕方ない……此処は素直に謝ろうと口を開こうとしたら……

「それじゃあ、蘇生を始めますね」

なんて言ってきた。

これは、相当怒ってる？ でも、怒ってるなら生き返らせるなんてしないと思うけど……

「あの……」

「はい？（なんか、雰囲気変わった？）」

「その……かなり待たせてしまつてごめんなさい」

「？ はあ………ん？」

何故、私が謝罪したのかわからず顔を傾げる彼を見て、なけなしの良心が死んだ。

いつそ怒ってくれたらどれだけ良かったか………フエイトと良い、彼と良い……本当に大丈夫かしら？ いや、むしろ彼の頭は大丈夫かしら？

「（なんか、かなり失礼な事言われてる？） とりあえず、蘇生しますからこの娘をポットから出しますね？」

「え、ええ………え？」

一瞬、何を言われたかわからなかった。そして、私の言葉を了承したという意味で受けとったのか、ポットからアリシアを抱えて出した。

裸のアリシアを抱えてだ。

一瞬止めようとしたけど、アリシアの為と思い耐えた。

ええ、数あるプレシアの中では耐えた方だと思っわ。

「ふう……重いな」

「失礼な事、言わないで欲しいわね！　うちのアリシアは軽いわよ！！」

《ズドオオオオオオオオッ！！》

ええ、耐えた方よ。

魔法なんて、サンダーレイジしか使ってないわ。

え？　体は大丈夫なのかって？　娘を想う母は強しって奴よ。今なら病魔を瞬殺出来るわ。

「（あつぶないなあ）　それじゃあ、やるよ」

「ええ……」

いよいよ、アリシアが生き返るのね。

▲プレシア視点▲

ゝ第二十廻ゝ 蘇生・後編（前書き）

いろいろと駆け足で書いてみました。

第二十廻　蘇生・後編

▼ 三人称 ▼

グレートスピリッツ、三途の川コミュニケーション。

そこで、沢山の子供達が泣きながら石積みをしていた。

此処に集まってる子達は親より先に死んだ者達であり、地獄の鬼達から強制的に石を積みされてる。

それは異世界の人間でも同じだった。

『ひつく……ぐす、お母、さん……』

彼女の名は、アリシア・テストロッサ。とある実験の事故の影響で、命を落とした少女だ。

最初は自分が何処に居るのか、此処がどういった場所かわからなかった。

しかし、周りに居る自分と同年くらいの子が何人もおり、同じ作業をしてる事を見て自分もしなくてはいけないと、自分の中の何かがそう訴えてきた。

そしてアリシアは、その訴えに従い石を積み始めた……。

しかし、それが地獄の始まりだった。

積んでも積んでも、鬼がやって来ては積んだ石を崩していく。

アリシアは最初は耐えた、そしてまた石を積んだ。

五回目でアリシアの目に涙が滲み出るが、それでも諦めずに石を積んだ。

そして十回目、耐えに耐えたアリシアはついに声を上げて泣いた。

積んだ石を崩しに来た鬼の足に抱きつき、止めようとしても結局は崩される。

それが数十回続いたが、もう諦めたのかやって来た鬼を止めずに崩されたら積んでいった。

その行為が何年続いただろうか、アリシアが来た時に居た子供達はすでに居なくなっていた。

その事に気付いたアリシアは、また泣いた。

とうとう一人だけになったんだと…。

そして、また鬼が現れた。

『ぐす、ひくっ……もう、嫌だ……もう……』

『これも規則なんだわ。悪く思っなよ?』

鬼が根を振り上げると、何処からともなく少年の声が聞こえた。

「一つ積んでは、父の為…」

『!?!』

「二つ積んでは、母の為…」

『う、この声は……』

『な、に……?』

鬼はこの声に顔を青ざめて、アリシアは辺りを見渡す。

「三つ積んでは、兄弟、故郷の為」

『ひひひひひひひひひひ！！』

三度、少年の声が木霊すると川の中に光が集まり、その光を見た鬼は一目散に逃げた。

それも当然だろう。あの声は、シャーマンキングの声に似ており、その魂の匂いはつい最近に修行と称しては、地獄の鬼達をボコボコにしてるソレと同じなのだ。

『……………』

その光景を見ていたアリシアは、自分は救われたのかと涙を拭い、優しい光の方へ足を進めた。

そして光は、人の形となる。
そして…………

「キミがアリシア・テストロッサかい？」

『う、うん。 お兄ちゃん？』

「俺は麻倉 葉生。 キミを此処から救いに来た」

葉生と名乗った少年は、手を差し伸べながらそう言った。
そして、アリシアはまた涙を流しながら、その手を取った。

▲ 三人称 ▲

▼ 葉生視点 ▼

三途の川で泣いていたアリシアを連れて、俺は時の庭園へ戻ってきた。

「それじゃあ、蘇生を始めるよ」

「お願いね」

「超・占事略決、呪禁存思」

《ペアア…》

俺の巫力が消費され、アリシアの体が光に包まれた。

そして光が止むと、アリシアはゆっくりと目を開けた。

それを見て、俺は成功したとホット胸を撫で下ろし、後の事をプレシアさんに頼んで退出した。

『お疲れ様です、葉生』

「うん、初めての蘇生で少し疲れたけど……成功してよかったよ」

扉のすぐ横の壁に腰掛けて、俺は少し眠りについた。

「…生、おい…葉生」

ん？ この声は……………

「スピリット・オブ・ファイア」

ヤバイ！！

「お、起きる！ 起きるからそれは勘弁！！ って、アレ？」

慌てて目を開けると、俺は真っ白な世界に居た。
前にも来た事がある。 此処は俺の精神世界だ。

「やっと起きたか」

「ハオ」

そして、この真っ白な世界で黒と赤の姿…………ハオとハオの持霊であるスピリット・オブ・ファイアが居た。

「なんで、俺…………ここに…………」

「キミは初めての蘇生に疲れて眠った。そして、ボクはキミに本体からの伝言を伝える為に此処へ呼んだ」

伝言ならいつものように言えば良いのに…………。

「キミの持霊達に聞かれない事だから仕方ないんだ」
ふん。 なんだろっ？

「近々、キミの為に誕生する精霊が現れる」

俺の？

「そう、キミの力になる為に……キミに尽くす為に……つまりは……」

麻倉葉生専用の精霊……と、ハオは言った。しかし、俺専用と言っても俺にはすでに三人の持霊が居る。流石にこれ以上は、手に余る。

「言つとくけど拒絶とか、力を極力使わないとか、そんな消極的な事をするとな彼女はキミを振り向かせる為にいろんな事するから……」

た、例えば？

「持霊を消したり？ キミを殺して、キミの魂を喰らい永遠に共に居たり……」

恐っ！！ 何処のヤンデレだよ！！ 怖いよ！ 拒絶するなつて、拒絶したいよ！！ なんでそんな事すんだよ！ 苛めか？ 苛めなのか！？

「諦める」

嫌だああああああああ！！

「伝える事は伝えた。もう戻っていいぞ」

ハオの口からドッキリとか、冗談という言葉を聞くまで此処に居る！！

「無理」

ニコツとハオが笑った瞬間、俺の意識は浮上した。 チクシヨウ…
…。

「…生！ 葉生！！」

「ヤンデレ……嫌、死ぬ」

「葉生！？」

「ちよつ、死んでもらったら困るわ！！」

なんか周りがうるさい。 死なないから、もう少し寝かせてよ。

「ん、ん……あと五分……」

「お母さん、どうしよう……」

「サンダースマッシュヤー撃てば起きるかしら？」

「だ、駄目だよ！！ それじゃあ、葉生が死んじゃうー！！」

なんだか、俺の生死に関わる何かが決められてるような……しかも、俺の直感が早く起きると輝き叫んでる！！ ……………別に輝いても叫んでもないけどね。

『おい、坊主！ 早く起きろ！！』

『葉生！ 今すぐ起きなさい！！』

ん、なんだよ。 クー、アル……そんなに慌てて……。

目を開けると、デバイスを俺に向けてなんか魔法行使しようとする
プレシアさん。

「って、ちよつとー？」

「あら？ 起きた？」

「起きたよ！ うん！！」

プレシアさんの問いに、高速で首を縦に振る。 それを見たプレシ
アさんは、デバイスを向けるのを止めてくれた。
あと少しでも、目を開けるのを遅かったらと思うとゾツとする。

「アリシアを生き返らせてくれた事感謝するわ。 これで私も病を
治すのに……うっ！ ごほっ、ごほっ！！」

「「母さん（お母さん）！！」」

「プレシアさん！」

突然プレシアさんが咳込み、手を退かして具合を見ようとしたら、
手にはびっしりと血が付着しており、体温も低下とこのままでは死
ぬ事が目に見えていた。

くっ…医学をほんの少しかじった程度の俺じゃ治せない。

《シャーマンの医療術の殆どは、イメージによる治療だ。健康な身体をイメージしながら、巫力を流し込め！》

俺がどうするべきか困っていると、見兼ねたのかハオがイメージによる治療法を教えてくれた。

「ありがとう……」

早速、健康な身体のイメージを頭に描き、プレシアの心臓付近に手を当て巫力を流し込んだ。

そして、アリシアが蘇生させた時と同じようにプレシアは光に包まれ、光が収まった頃には穏やかな表情を浮かべたまま眠りについていた。

「ふう……もう大丈夫だ。多分、一日したら目を覚ますよ」

「ありがとう……葉生」

「ありがとうございます」

「それじゃあ、俺は帰るね？あと話したい事あるから、プレシアさんが目を覚ましたら此処に来て」

フェイトに俺の家の住所を書いたメモを渡して、庭園内にあった転送ポットに入る。

「うん、わかった」

「それじゃ、待ってる」

転送ポットは起動し、俺は麻倉家の玄関前まで転送された。

「ただいまー」

こうして、俺の長い一日が……

「『『『『『葉生（くん、様）！！』『』『』『』」

まだまだ続くみたいだ。

それでは、皆さん……次回、俺が無事だったら会いましょう。

▲葉生視点▲

ゝ第二十一廻ゝ サブタイトル未定（前書き）

誰かこの話のサブタイトルを考えてケロー！！

く第二十一廻く サブタイトル未定

▼フェイト視点▼

姉さんを蘇生してもらい、母さんの病気も治してもらった次の日。
私達は麻倉家に居た。

「遠路遥々ご苦労様です」

「い、いえ……」

頭を下げる葉生のお爺さんに、私や母さんと姉さんは戸惑う。
畳みで座ってるのもあるけど、麻倉家が大きいつてもあるから、
ちよつと落ち着かない。

「アリシア、フェイトとアルフは葉生くんの所へ行ったら？」

「え？ で、でも」

私達が落ち着かないのを察してか、母さんがそう言ってきた。
確かに落ち着かないし、足の感覚もなくなってきた助かるけど、
それは母さんも同じ……私達だけつても……。

「いいから、ね？」

「はい……」

前のような冷たい言葉ではなく、優しくアリシアの記憶にある暖か

い言葉を向けられ、母さんの提案に頷く。

それを見ていた葉生のお爺さんから、葉生の居る部屋を教えてもらい、私とアリシア、アルフは葉生の部屋に向かった。

▲フェイト視点▲

▼蓮視点▼

「メイデンやミネのオーバーソウルは巨大だが、不自由とかしないのか？ む、揃ったな」

「そうですね。私の場合は場所によって、シャマシュちゃんの大きさを変えますから、あまり不自由はしませんね」

「狭い場所は確かに私は不向きね。今までは空けた場所での戦闘しかやってないし……うっ揃わない」

ん？ 俺達が今何をしてるか？ みんなでババ抜きをしている。その間に、オーバーソウルの事や戦闘の事を聞いているのだ。

「オーバーソウルは、小さくした方が小回り利く。あ、ジョーカ」

「マリーちゃん、言っちゃ駄目だって……。俺の場合はアルのオーバーソウルが、どうしてもでかくなるんだよなあ。なんとか小型化したい」

「あれ？ 葉生くんのオーバーソウルって小型化出来なかった？」

葉生の言葉に、姉さんが首を傾げて葉生に問う。

アルトリアのオーバーソウルと言えば星光之剣だ。

あのオーバーソウルは、大小姿を変えるはずだが……。

「ああ、二段階目に移行しようかと……それがかなりでかくて」

なるほど、二段階目が……。

俺も二段階目のオーバーソウルを考えねばならんな。

「なあ、みんなで会話するんはええけど、私にもわかるように言ってくれへん？」

と、今まで黙ってババ抜きをしていたはやてが言ってきた。
確かにはやてにとっては、つまらない話だったな……だが……

「靈感が無くても霊視が出来たはずだよな？」

「ほんまか！？ せやったらなんで言ってくれへんの？ 私は今まで会話に入れんで、寂しい思いしてたんやで！？」

《ブンブンブンブン》

俺の言葉に素早く反応して、俺の胸倉を掴んでブンブン振り回す。

この時、胡座あぐらをかいていた俺に車椅子のはやてが、どうやって胸倉を掴んだのか不思議に思う。

腕力ハンパないな？

「確か目の裏側にそんなツボがあるって聞いたわね」

《ピタッ》

サチが呟くように言うと、俺を揺さぶってたはやてが止まった。
気持ちにはわからんでもないな。

ツボと言えばツボ押し……つまりは目潰しをしないと、霊は見えないと言ってるようなものだし……。

「うう……それは嫌やあ」

「……」

うなだれるはやてに場が沈黙した。

《コンコン》

「ん？ 誰」

「あ、あの！ フェイトです……！」

「アリシアだよ」

「アルフだよ」

「どうぞ」

三人の女の声に、姉さん達が一瞬反応する。

というかさっきの声は、何処かで聞き覚えがあるような……。

《ガチャ》

「なっ!?!」

「あ……」

戸が開き、現れたのはオーバーソウルもどきと戦っていた奴らだった。

もう一人、金髪の女に似た奴は知らんが……あの金髪の仲間だろう。

「……」「葉生くん(様)、説明してくれますよね(くれるわよね) (してくれますか?)」「……」

「え、あれ? メイデン達……なんでそんな怖い顔してるの?」

姉さんが怖い。 ダメだ、直視出来ない!!

「怖い顔だなんて、そんな酷いじゃないですか……怖クアリマセンヨ」

いや、怖いぞ? 鏡を見るジャンヌ、鬼が見れるから……。

「仏を持霊にしてる私が怒りや嫉妬に、身を任せるわけないじゃない。 もっとも未だ未熟の身、時々怒りとか嫉妬に身を任せるかも知れど」

なるほど、これが忿怒の相と言う奴か? 仏の怒りは怖いモノだな。

「神に仕えし天使を持つ私が、憤怒という大罪を犯すとても?」

身を凍らす程の微笑みが、憤怒じゃなければなんだ? 明らかに憤

怒の大罪犯してると思うが……。

「葉生様はマリの旦那さんだもの、葉生様はマリの、葉生様はマリの……」

「「ひいつー!」」

髪が半分以上顔を隠れて、髪の間に見える病んだ目が怖い!!
七歳で病むなんて、マリオンの将来が激しく心配だ。

「説明……してくれるわよね?」

やはり姉さんが怖い。

というか、姉さん達はどうかやって妥協したんだ? あれか? 葉生のパーツを分け合う感じで妥協したのか? 恐ろしくて聞けん。

「わかった、説明するから落ち着いて(俺がいったい何をした?)」

というわけで説明に入るんだが、入室して殺伐とした雰囲気になつて戸惑つてる奴は放置か?

「えっと……どうしよう?」

「さ、さあ?」

「?」

「とりあえず、座ったらどうだ?」

金髪その1(フェイト)と、その2(アリシア)と、犬耳女に座る

よう促す。

そこで犬耳女は、何かに気付いたように俺を睨んでくる。
最初に会った頃を根に持っているのか？

「キミはあの時の」

「道^{タオ}蓮^{レン}だ」

「はん！ 変な名前だね」

「なんだと！ 犬耳女！！」

《ニヨキツ！》

「「伸びた！！」」

「あたしは犬じゃない！ 狼だよ！！」

俺の髪が伸びた事に金髪二人が驚くが、そんなものに構ってる暇はない！！

「ふん！ 何が狼だ！ 俺に牙も爪さえも、触れる事が出来なかったくせに！！」

「なんだとお！ このとんがり頭！！」

「これは道家の伝統ある髪型だ！！ 馬鹿にする事は許さん！！」

「ねえねえ、蓮君」

「なんだ？」

犬耳女に詰め寄ろうとしたら、不意に金髪その2が声をかけて来て、振り返ると呂布の手を握っている（……………）金髪その2が居た。

『蓮坊。この女子は俺が見えるようだぞ』

なん……………だと……………？

▲蓮視点▲

▼葉生視点▼

五人に説明を終えたあと、母さんが昼ご飯が出来たと言われ、皆で下に向かった。

「昼食の前に客人の紹介と行こうか」

皆が席に着き、誣葉爺がプレシアさんを見て言った。

「プレシア・テストロッサです。此度は、葉生くんは娘と私の病を治していただき、お礼をしに来たのにお昼まで誘ってくださり、ありがとうございます」

「アリシア・テストロッサです！」

「フ、フェイト・テストロッサです」

「アルフってん、です？」

プレシアさんに続いて、アリシアが、若干^{ども}吃りながらフェイトが、限りなくアウトに近い敬語を言いながらアルフが名乗る。

そこからさらに俺達が、自己紹介するんだけど長いのでカット。
だって十一人居るんだよ？ 文字数を稼げるけど、携帯だと打つのが鬱陶しいのです。

あれ？ 俺は何を言ってたんだ？

そして昼ご飯を食べ終えて、なのは達と遊ぶ。

そこにフェイト達を連れて来たら、なのはが驚いたり、アリサが問答無用で俺を殴ったりと、いろいろあったが理不尽な事にめげずに頑張ってます！！

あとフェイトは、なのはと一緒にジュエルシードを共同で集める事になったみたいだよ。

▲葉生視点▲

▼三人称▼

葉生がなのは達と遊んでる頃、次元の海を航行してる戦艦があった。時空管理局が、所有する次元航行艦アースラである。

なんの目的で造ったのか、なんで場所が地球から次元の海に移ったのかとかいろいろ説明したいが、面倒なのでやめておく。

まあ凄い船が地球に向かってるとだけ、理解して欲しい。
原作がわからない読者よ。

「うーん、きつちり説明して欲しいかなあ」

「母さ…艦長？」

地文にツツコミを入れるエメラルドの髪の色的女性に、何を急に言い出すんだ？と戸惑う黒髪黒服の少年。

「なんでもないわ。それで？ 次元震が起こったとされるポイントはあとどれくらい？」

「この辺なんですが……」

「見事に何も無いなあ。 確かなのか？ エイミィ」

黒髪黒服の少年は辺りを映し出してるモニターを見ると、モニターを映し出した茶髪的女性に声をかける。

「あ、クロノくん…酷おい」

エイミィと呼ばれた女性は、黒髪の少年に振り向き頬を膨らませる。

「女の子をいじめるのは感心しないわよ？ クロノ執務官」

「か、母さん……」

エメラルドの髪の色的女性、艦長と言われ、つい先ほど母さんと言われた女性は黒髪の少年クロノはがっくりと肩を落とす。
もうクロノでいいや

そんなアースラクルーと彼らが居るのは、プレシア・テストロッサ……時の庭園が合った空間だった。

「まあ、クロノをからかうのもそのくらいに、此処周辺にある次元世界を調べてみましょう？」

「ですが、此処らって魔法技術のある世界なんてありませんよ？」

「此処に近い次元世界は何処なんだ？」

「ちよつと待つて〜」

クロノに言われ、エイミィは高速でキーボードを打つ。

「出たよ。 第97管理外世界……地球だね」

「艦長……」

「では、これより第97管理外世界周辺の調査を始めます!!」

物語は加速する。

管理局による介入が、地球に、なのはに、テストロッサ家に、シャーマン達に何を齎^{もたら}すのか……まだ、誰も知らない。

▲三人称▲

今日のジュエルシード……0個。

獲得者……無し。

なのは&フェイト組、獲得ジュエルシード……14個。

管理局組、獲得ジュエルシート……	0個。
残り……	7個。

く第二十二廻く 時空管理局

▼三人称▼

海。

此処に二人と二匹の四つの影が、海の上で浮いていた。

彼女達は、この海鳴市で散らばったジュエルシードを集めていた。

最初は敵対していた二組の魔導師は、今では共に手を取り合ってジュエルシードを集める事になったのだ。

「行くよ、フエイト」

「うん」

「封印はお願いね？　なのは」

「そつちも気を付けてね？　ユーノくん」

赤に近いオレンジの狼の姿をしたアルフと、フエレットの姿をしたユーノが二人の少女から離れて、海に魔力を放出した。

すると海は荒れ始めて、ユーノとアルフは即座にその場から離れた。

海は二つの魔力を受け、その中にある四つの宝石の輝きを受けて、海中に居る霊を吸収して擬似的な鯨のオーバーソウルを生み出した。それを見た二人の少女は、頬をひくつかせて、現実から目をそらした。

「私達は結局……葉生に頼るしかないんだね」

「そうだね……」

オーバーソウル、彼女の友人達が使う一種の戦闘法の一つ。それは絶対的な力を誇り、霊によっては自然の力を味方につけるのだ。

しかもオーバーソウルはオーバーソウルでしか倒せないという、理不尽極まりない設定付き。

だがジュエルシードから産み出されたオーバーソウルは、正規のオーバーソウルとは違い多少は魔法でダメージを受けるが、二人の少女では無理！！大魔導師と言われる黒いバリアジャケットの少女の母親、プレシア・テストロツサならなんとか出来るだろう。だが、当のプレシアと言えば……

「見て見て、このフェイトの写真！アリシアに負けないくらいの天使の笑顔！！」

《ブバツ！》

「キヤー！お母さんの鼻から滝のような勢いで血があああああああああ！！」

「うちのなのはの笑顔も負けてませんよ！！」

《ブシュウウウウウ！！》

「恭ちゃん！？ お母さん、恭ちゃんが凄い事になってる！！」

恭也と一緒に身内自慢に勤しんでいた。
端から見ると変態集団にしか見えない。

場所は戻り海上。

白い魔導師、高町なのはと、黒い魔導師、フェイト・テスタロッサは、ジュエルシードが生み出した鯨のオーバーソウル擬きを抑え込んでいた。

と言っても、鯨のオーバーソウル擬きから来る攻撃を回避してるだけだが……。

「葉生はまだ来ないのかい！？」

「もうすぐのはずなんだけど……」

アルフとユーノは、なのは達の状況を見て顔を歪める。

いくらなのは達が、魔導師として高い資質を持っていたても、なのは達は幼い。

幼い故に体力も精神も未熟なのだ。

「おゝい」

そして、いよいよなのは達の体力が尽きた頃に葉生はやってきた。

「葉生！　つて！？」

「な、竜！？」

赤い竜に乗って……。

「アル！　一気に叩く！！」

『了解です』

葉生は竜に向かって指示を出すと、竜は羽根を動かし、鯨のオーバーソウル擬きに近付く。

「なのはとフェイトは離れてろ！」

「わかった」

「お、お願い！！」

なのはとフェイトはアルフとユーノが居る場所まで避難し、なのは達が離れた事を見計らい葉生は竜に巫力を追加する。

葉生から与えられた巫力を、竜は口内に溜め込む。

口内に練り上げられる巫力、それを魔力に変換するとすればSSS+と言った規格外なモノだろう。

だが、ソレを黙って見てるほど、鯨のオーバーソウル擬きは馬鹿じゃない。

































鯨のオーバーソウル擬きは、大きく口を開けて巨大な水の塊を竜に向けて放ち直撃させるも、竜にたいしたダメージはなかった。

「消えろ、約束された勝利の息吹」
エクスカリバー

葉生がそう呟くと、竜は口を開き黄金のブレスを放ち、一瞬にして鯨のオーバーソウル擬きを消し飛ばした。

そして、場に残ったのは巨大な赤い竜と葉生、なのはにフェイト、ユーノとアルフ……。そして、四つのジュエルシードだった。

「それじゃ、封印よろしく」[♪]

「任せて」

「うん！ リリカルマジカル」

「ジュエルシード、封印」

ピンクと金色の光がジュエルシードを包み、ジュエルシードを封印していった。

こうして全てのジュエルシードが集まり、**事件は無事解決した**――

かに
蟹見えた。

「そこまでだ！！ 時空管理局執務官、クロノ・ハラウンだ！！
管理外世界での魔法行使及び、ロストロギアを意図的に暴走させ
次元世界を崩壊させようとした容疑で逮捕する！！」

帰る雰囲気の中、突如として黒いのが現れた。

▲三人称▲

▼葉生視点▼

ジュエルシードを集め終え、さあ帰るかあつて時に黒い服（多分、
バリアジャケット）を着た少年が現れて、なんか言ってる。

時空管理局……プレシアさんから聞いた事があるけど、はて？ ど
んな組織だったかな？ なんか法を守るとかなんとか……。
管理外世界での魔法行使……。俺は魔法使ってないから良いんだよな
？ でも、それだとなのは達を見捨てる事に……。

「……………よし、ユーノ任せた！」

「え？」

「そうだね。 私達ユーノのお手伝いで、ジュエルシードを集めて
ただけだし……」

「え？ え？」

「はい、ユーノくん。 ジュエルシード」

「あ、うん」

「それじゃあ、帰るべ〜よ〜」

なのはがユーノにジュエルシードを渡したのを確認して、俺達は海鳴市に帰ることに……

「つて、待て待て待て!」

なんか呼び止められた。

「何?」

「何つて、何を帰ろうとしてるんだ!??」

「いや、だって……魔法使ってないし」

「その竜はなんだ!」

あー、これは面倒な事になりそう。

アル（竜）の事を説明するとなると、シャーマンの事も話さないといけないし、プレシアさんの話だと、霊能とか信じるような連中じやなかったはず……。

とりあえず……

「ペット」

「いくら管理外世界でも、地球に竜は生息していない事くらいは判
つてるんだぞ!？」

駄目か……。

「私は現地の民間協力者ですから、良いですよね？」

「ロストログアを暴走させた疑いがある」

なのはも駄目。

でも、海にあるものを封印するのに仕方ない事なんだけどなあ。

「私は家族で観光に来てて、強い魔力反応を感じて行ったらって感
じで、それでロストログア回収の協力を……」

「此処に居る皆さんには、僕からお願いしました（フェイト達は違
うけど）」

「わかった……詳しく話し合う必要があるみたいだ。 みんな僕に
近づいて……キミ！」

「俺？」

「竜に乗ったまま近付くのをやめてくれないか？ 飛べるだろ？」

いや、飛べん。

「あのー彼は飛べませんよ?。」

「何!？」

いちいちリアクションが大きいなあ。

速く連れて行くとこ連れて、事情聴取なりなんなりしてほしい。

……………あ、カットすればいいか。

てな訳で、ハオ〜カットよろしく〜。

《all cut！ 大きく過程を飛ばして空白期へ！！》

はい、却下〜。

《冗談だよ。 アースラで事情聴取までカット！！》

というわけで、アースラ内部。

取調室ではなく、艦長室。

お茶や茶請けを出して来て、とてもじゃないがさっきまで犯罪者と疑われたとは、思えない対応だった。

「この艦の艦長をやってるリンディ・ハラオウンです」

「さっきも名乗ったが、一応僕も……執務官のクロノ・ハラオウンだ」

「高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

「フェイトです」

「フェイトの使い魔のアルフだ」

「麻倉葉生です」

「まず、こういった経緯であなた達は出会い、ロストログアの回収を？」

自己紹介が終わり、リンディさんがこの事件の経緯について質問し、それにユーノが答える。

そのまんま話すと長いので要約すると、発掘して管理局に届けようとしたら、事故って地球に散らばり、回収しようとしたが思いの外手こずり、そこで出会ったのがなのはだと……。

そして、ここからなのはが話し出すが、すぐにフェイトにバトンタッチ。

何故か？　すぐにフェイトとの初邂逅に入ったからだ。

で、フェイトの言い分（プレシアさんが、万が一管理局に事情を聞かされた時用に作った言い訳。　ちなみに、なのは達と話し合い口裏を合わせたモノ）。

地球に観光で来ていたら、ジュエルシードの暴走に感知し、即座に封印した。

そして封印したモノを調べると、海鳴市に集中して同じものが散らばってるのがわかり、独自に回収してるとなのはにばったり会い、互いにジュエルシードを悪用する為に集めてると勘違いを起こして激突。

紆余曲折あったものの、なんとか和解して最後は共闘したとの事。

ちなみにリンディさんが、フェイトのファミリーネームを聞いて来たが、フェイトは産まれてすぐに孤児院に引き取られたため、無いと主張。

それを聞いたリンディさんは、うちに来ないかと誘ったが、フェイトはそれを拒否した。

理由は……

「昔は辛かったです、今はなのはや葉生に出会えて幸せだから……それに家族も居る」

——との事。

「そう……（うーん、身内に引き込んで管理局に入れさせたかったんだけど、でもまだ引き込み方はあるわ）」

っ！

『どうかしましたか、葉生？』

一瞬、俺の表情が変わったのを感じたアルが問いかけて来るが、そんな事に気にしてられない。

何せ、リンディさんの声が頭に響いた。

最初は念話とも思ったが、その可能性を否定する。

仲間のクロノならまだしも、俺にああいった事を言うのはおかしい。

「じゃあ、管理局に勤めてみない？　なのはさんや葉生くんも（魔カランクがクロノよりも高いのはさんに、未知の力を使う葉生くん……そしてなのはさんと同等の力を持つフェイトさん……こんな見所ある人材は管理局にとって欲しい存在）」

また……。
少し試すか…………。

「すみません、リンディさん」

「何かしら」

「俺の目を見て、先程の言葉を言ってみてください」

リンディさんにそう言って、すぐさま赤子の霊を呼び憑依合体する。
そして、リンディさんの目を見ると……

「っ！！」

リンディさんは息を呑み、そして目を反らした。

やっぱり、どす黒い人間には純心な赤子の目を見るのは辛い。

俺も赤子を憑依合体してるから、泣き出す一歩出前。

瞬時に体の支配権を取り戻さないと、泣いてしまうところだった。

「言えませんでしたね。では、俺は断らせてもらいます」

そう言って俺は艦長室を出た。

《——フフッ》

出る瞬間、ハオの微笑みを聞いた気がした。

▲葉生視点▲

く第二十三廻く 訓練

▼葉生視点▼

時空管理局の取り調べが終わって数日。

どうやらなのはは時空管理局で、囑託なるモノになるらしい。
詳しくはわからないけど……。

そして、フェイトはプレシアさんから時空管理局との関係上または時空管理局がプレシアさんにやって来た行いを聞いて、時空管理局に入らないと拒否。

そこで黒いのがなんか言ったらしいけど、フェイトの意思は固く説得（？）に失敗。

今は元気よく、蓮とバトルしてる。

「やっぱり憑依合体だと、魔導師に分があるかな」

「そうね。 オーバーソウルは破壊不可だけど、憑依合体は憑依した霊の動き、思考などをトレースするものだし、でもオーバーソウル相手でもやりようはあるわ」

「オーバーソウルを避けて、非殺傷なるシステムを使った魔法で、生身のシャーマンを叩くんだろ？」

「あら、わかってるのね」

当然。 と、プレシアさんに言いながらも、フェイト達の戦いを見る。

いやあ、いつ見ても綺麗だよなあ。魔法。

「ハアアツ！！ 中華斬舞！！」

「くっ！」

蓮に近付こうとするフェイトだが、蓮に憑いてる馬孫の技である中華斬舞がフェイトを襲うが、フェイトは間一髪で空に逃げる。

「これじゃあ、勝負着かないな」

「そうねえ……フォトンランサーを使っても、蓮くんでは避けてしまっし、近接戦闘では蓮くんに分がある。空を飛べば蓮くんは攻撃出来ないし、フェイトの攻撃も当たらない」

「どうするんですか？」

「そうね。これじゃあ、訓練にならないし……フェイト！！」

「ん？ 何、母さん」

「飛ぶの禁止」

「ええ！？」

おゝ、驚いてる驚いてる。

まっしょうがないよね。蓮は空を飛べないし……。

「で、でも母さん、蓮の攻撃鋭いんだよ？」

「訓練にならないでしょ？」

「うう……」

渋々と言った感じに、飛ぶのをやめるフェイト。
これで少しは、訓練らしい訓練になるかな？

「はあ〜」

「ん〜」

蓮とフェイトの戦いもようやく面白くなるって時、家の奥からアリシアが現れた。

「この子凄いよー!!」

そう言って見せてきたのは、雷の小精霊。

アリシアの巫力で乾電池と、オーバーソウルさせてる。

何故、アリシアがと言うのもわかるが、死者が生き返ったのだ。
シャーマンの能力にも目覚める。

「で、何が凄いの？」

「ゲームがやりたい放題!!」

『キャツキャツ』

……あー、うん。 精霊が、楽しんでるならいいや。

俺は何も聞いてないし、見てない。

「そうか…」

にしてもアリシアの巫力に、底が見えないのは何故だ？ ん〜謎だ。

「ハアアッ！！」

「速い……書文！！！」

『応さ！』

フェイトの声が聞こえたと思ったら、超スピードで蓮を翻弄していた。

超低空飛行は認められたみたいだ。

どうやら俊敏性に劣る馬孫との憑依をやめて、反応速度と俊敏性が高い書文に替える所ようだ。

「憑依合体！」

「させない！！！」

フェイトも蓮の行動がわかったのか、フォトンランサーで蓮を撃つが、蓮の方が速かったみたいだ。

「李 書文！！！」

《カッ！！ スガアアアアアアンツ！！》

「やった？」

「「神槍・無二打!!」」

「!？」

煙を突き抜けるように、槍を突き出してフェイトに向かう蓮。つて、一撃必殺の技じゃん!!

急いでフェイトを助けようとしたが、蓮はフェイトの真ん前で寸止めして槍を止めた。

「「ワシの勝ちだ」」

「……………ハア、ハア」

書文はカッカッカッと、明後日の方を見て笑ってる。フェイトはフェイトで、冷や汗を流して息を荒らしてる。まあ、必殺技を受けるかもしれないしね。当然かな。

「じゃあ、次は葉生と私ね」

そう言って現れたのは、さっちゃんだ。

隣にセンジュを連れて、さっきまでフェイトが居た所に行く。俺も蓮が居た所に行き、クーを呼び出す。

「それじゃあ、オーバーソウル対決でどう？」

「良いわよ。センジュ！」

『OK! さっちゃん!!』

さっちゃんは腕にはめてる梵字が書かれた輪に手を当て、持霊であるセンジュを憑依させてオーバーソウルを発動させる。

「オーバーソウル、センジュアーマー」

「オーバーソウルを纏ってる？」

プレシアさんが驚いてる。

確かにアレだと、ほぼ死角はない。

生身の部分があまり露出してないから、さっき言ったシャーマンを直接叩くってのはないからね。

「クー、新型オーバーソウル!!」

『任せとけ!!』

ゲイボルグを構えて、人魂モードのクーをゲイボルグに憑依させる。

「憑依合体、クー・フリーン in ゲイボルグ!!」

そしてもう一つの位牌を掲げ、ある霊を呼ぶ。

「来い、犬神!!!!」

『ワオオーン!!!!』

「犬神 in ^{ファンゲ}牙!! ^{ダブル}Wオーバーソウル!!」

「嘘!?!」

さあ、お披露目だ!!

「しゅそうのもつけん朱爪之猛犬!!」

蒼い狼を似せたアーマー、腕のアーマーから伸びる三つの朱い爪。この三つの朱い爪は、ゲイボルグに似せており、蓮の李 書文並の一撃必殺の爪。

「甲縛式オーバーソウル……習得していたんだ」

「これは甲縛式オーバーソウルって言うんだ……知らなかった」

「これが天才って奴かしら？」

さっちゃんがなんか言ってるけど、この際無視と言うことで……。

「行くよ、クー、犬神」

『おうよ!』『ワンッ!』

《ダッ!》

四足走法で、さっちゃんに向かって駆け抜けるが、気がつけばさっちゃんの後ろを取っていた。というか、速過ぎて反応出来ん!!

「合掌……」

「ぐ、この……」

《バッ！》

体を無理矢理捻って、向きを変える。そして、また間合いを近付けるが……

「千手パンチ！」

《ダダダダダダダダダダダダダダダダダダ……！！》

向かって来る千の拳を避けれずに、さっちゃんの攻撃が全て直撃する。

そのあとの事は、まったく知らない。
恥ずかしながら気絶しちゃったから……。

勝ちたいなあ……。

▲葉生視点▲

▼サチ視点▼

倒れた葉生を見て駆け寄る。

まだあのオーバーソウルに慣れてなかったから、手加減はしたと思うけど……。

「だ、大丈夫！？」

「うきゅ〜」

『完全に伸びてら』

「少しは慣れてから使えばいいのに」

『男の意地って奴じゃね？』

男の意地……ねえ。

女の私が甲縛式を使ったからって理由よね？ やっぱり……。となると、まずったのは私？ いやいや、これはやっぱり葉生自身のせいでしょ。 うん、絶対！！

「でも、このままにしとくのも」

プレシアさんは、フェイトとアリシアちゃんに構ってる。というか、見なかった事にしてる？

『こいつは、嬢ちゃんが運ぶしかねえな』

厭味ったらしい笑みで言うクー。

殴っても良いかしら？ と、現実逃避しても仕方ないか……。

「って、アレ？ 葉生は？」

現実から目を向けると、そこに葉生はおらず、探そうと辺りを見たら葉生を引きずってるマリーちゃん。

『あー、お嬢。無理せんでも良いぞ？』

「でも、葉生さまが死んじゃう」

『いや、死なねえよ!!』

あれ？ これって……

『マリーちゃん、策士だね!』

「うつさい、バカセンジュ!」

『うわ、酷い!!』

つて、センジュに構ってる暇ないや。

「んしょ、んしょ」

「ちょ、マリーちゃん。 私も一緒に運ぶから……」

健気に頑張ってるマリーちゃんと協力して、葉生を部屋まで運んで
ベッドに寝かしつけた。

疲れた。

▲サチ視点▲

く第二十三廻く 訓練（後書き）

マリーちゃん、恐ろしい娘っ！！

くパッチの詩く 純粹な炎編（前書き）

どうしてこうなった？

くパッチの詩く 純粹な炎編

▼三人称▼

グレート・スピリッツのパッチのコミュニケーション。

そこにはシャーマンキングとグレート・スピリッツの意志に従う一族が住んでいる。

そんな彼らの前に、シャーマンキングが現れた。

《久しぶりだね。 ゴルドバ》

「シャーマンキング様!!」

《今日はキミ達、パッチに頼みがあって来た》

「頼み、ですか？」

ゴルドバと呼ばれたパッチは、長年培ってきた勘に嫌な予感がした。しかしそんなゴルドバを無視して、シャーマンキングであるハオはとんでもない事を言った。

《二体目のスピリット・オブ・ファイアを育てろ》

「……………は？」

ゴルドバは、何を言われたかわからずに、口を開けて固まる。

スピリット・オブ・ファイアとは、記紀神話におけるカグツチ、イ

ンド神話のアグニ、ギリシャ神話のプロメテウスやヘパイストスと言った、世界中に伝わるありとあらゆる炎への崇拜、畏怖から生まれた神々の原型であり、炎の力そのものが具現化した精霊でもあるのだ。

そして何よりも恐ろしいのは、普通の霊にはない成長が、その精霊にあるのだ。

その精霊の二体目、さらには育成？ ゴルドバは空耳であってほしい。

聞き間違いであってほしいと願いながら、もう一度、シャーマンキングであるハオを見る。

しかしハオはニコツと笑い、頼んだよ♪と弾む声で立ち去った。
一体の炎の小精霊^{ベビー・オブ・ファイア}を残して……。

▲三人称▲

▼ゴルドバ視点▼

シャーマンキング様より授かりし、スピリット・オブ・ファイアを育てて十日目。

スピリット・オブ・ファイアは、何かに共鳴するようにぐんぐん成長してる。

最初の霊力はたったの10程度じゃったのに、すでに霊力は1000……うむ、成長速度が速いと言っレヴェルじゃないな。

「ゴルドバ様……」

「なんじゃ、カリム」

「スピリット・オブ・ファイアが!!」

「ムッ!？」

この闘牛の頭を象ったバックルをつけた、ガタイの良い男の名はカリム。

今週のスピリット・オブ・ファイアを育ててるパッチの男じゃ。そんなカリムが……

「スピリット・オブ・ファイアが現世に行こうと、暴れてます!! 現在、シルバとクロムが抑えてますが……」

「まだか、カリム!! もう抑えれんぞ!!」

「ぬうううああああっ!! 近くに居る霊を食べて成長した!!」

「な、なんとか持ちこたえろ!!」

『無理だ!!』

「ゴ、ゴールドバ様!!」

やれやれ五大精霊とは言え、まだ小精霊のスピリット・オブ・ファイアも抑えれんとは……。

ワシはカリムに連れられて現場に行くと、そこにはワシの予想を超える事が起きていた。

『……………!!』

《ボシュウウウンツ!!》

『ぬああああああ!?!』

「な、何故、こんなにも成長しとるのだ!?!」

「今日の朝起きたら、こうなっていました」

「今日!?!」

カリムの言葉に驚き、スピリット・オブ・ファイアを見る。

どう見ても、いくら見ても……ベビー・オブ・ファイア【素霊】ではなく、スピリット・オブ・ファイア【精霊】でもなく、スピリット・オブ・ファイア【第二形態】。

十年前のシャーマンファイトの本戦で、シャーマンキング様が出した第二形態が居た。

《へえ、早くも第二形態に成長したか》

「シャーマンキング様!!」

《まさか十日で、此処まで成長させるとは思ってなかったよ。しかし、此処まで来たんだ。せつかくだから究極形態まで面倒見てよ》

「……」「無茶言つな（言わんで下さい）!!」「……」

《アッハッハッハッ…まあ、此処まで育ててくれたんだ。　鎮める役くらいはしてやる》

そう言う、シャーマンキング様はスピリット・オブ・ファイアに向かつて、鎮める事に成功させた。

しかし、どうして二体目のスピリット・オブ・ファイアを生み出したのか、それをシャーマンキング様に問うと……

《こいつは、十日前にボクが転生させた人間の持霊にするためさ。その為だけに生まれた精霊だ》

「一介のシャーマンが持つにしては、些か強すぎると思いますが……」

《あいつには、ちょうど良いさ。　ボクにはわかる。　あいつがこいつを必要とする日が来る事を……》

そう言う、シャーマンキング様は御自身のコミュニケーションへと帰って行った。

それから一週間で、スピリット・オブ・ファイアは究極形態へとなった。

さらに時が経ち――現在^{いま}、スピリット・オブ・ファイアの霊力は56億以上。

これをシャーマンキング様に話したところ、顔を引き攣らせていた。

《くっ……圧倒的に巫力が足りないじゃないか!!》

▲ゴルドバ視点▲

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2073m/>

転生者はシャーマン

2011年11月12日18時59分発行